

福岡市

わき やま
脇 山 II

—県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

(脇山A遺跡調査概報、谷口遺跡調査報告)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第269集

1991

福岡市教育委員会

八月九日

長遠（花押）

連祐（花押）

長益（花押）

(3) 木造薬師如来坐像々底墨書銘
謹
奉新造
藥師琉璃光如來
一體爲現世安穩後
世善應也、

庄崎雅樂丸著款
○総目裏に花押あり
○袖を切除

(六) その他の資料

(1) 「筑前國統風土記拾遺」鷲山村の条

經零 谷山に在、宝形の所に梵字三つあり、基石に奉造立塔婆一基事、右
志趣者、爲阿闍梨安^門卅三回菩薩^印妙經三部亦奉造立供

菴^印如件明德五^甲正月廿七日孝子敬白と銘あり

(4) 大内家々臣連署状

聖福寺文書

(2) 少式教頼安著状写 「筑前國古帖證文」
筑前國良都鷲山三町分地頭職、同郡小田部地頭職并主船司名七
町・富永庄内成貞名・同久富名・同國那珂郡内廻子村八町・同國深
江三町^{入石}事、任本領旨、知行領掌不可有相違之狀如件、

嘉吉三年五月三日 大宰少武

○大宰管内志では「嘉吉三年二月」となっている。

庄崎彦三郎殿
九月十八日
房行（花押）
弘相（花押）
弘矩（花押）
弘詮（花押）

Waki yama
脇 山 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第269集



遺跡略号 WKA-4、TNG-I
遺跡調査番号 8933、8932

1991

福岡市教育委員会



第12地点土壙墓出土青磁碗と鉄製刀

序 文

福岡市西部の早良平野は豊かな自然と歴史を持つ地域であり、特にその南側は広大な農地と山林の広がる美しい景観を保っております。近年、この一帯では飯盛地区、入部地区、金武地区など相次いで圃場整備事業が開始されており、これに伴い貴重な埋蔵文化財が出上っています。

早良区脇山地区では昭和61年度より8ヶ年計画で、県営圃場整備事業が始まりました。

このため福岡市教育委員会では、圃場整備事業に伴い、昭和61年度より埋蔵文化財の調査を開始し、現在にいたっております。

本書は、谷口遺跡の調査成果と、脇山A遺跡第4次調査の概要を報告するものです。調査の結果、縄文時代から近世にいたる遺構と遺物を検出し、今まで明らかでなかった脇山地区の先人の生活の一端をうかがえるようになりました。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてのみならず広く活用されることをねがいます。

最後になりましたが、調査にあたり数々のご協力を賜りました関係者、地元の皆様をはじめ、多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は早良区大字脇山地内の岡場整備事業に伴い平成元年度に実施した脇山A遺跡の第4次調査の概要、および谷口遺跡の調査報告である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が担当した。
3. 本書使用の造構実測図は、脇山A遺跡4次調査を井澤洋一・野村俊之・多田映子・有馬千恵美・福田小菊・西嶋彰子・上生喜代子・辻節子、谷口遺跡を井澤・野村・池田祐司・常松幹雄・辻節子が行った。
4. 本書使用の遺物実測図は、脇山A遺跡の第4次調査を重藤俊行、谷口遺跡を池田が行った。
5. 本書使用の造構写真は、脇山A遺跡を井澤・常松、谷口遺跡を井澤・野村・池田、遺物写真是脇山A遺跡を井澤、谷口遺跡を池田が撮影した。
6. 本書使用の造構、遺物挿図の製図は脇山A遺跡が吉田扶希子・井澤、谷口遺跡を松尾秋代・黒川和生・美奈之・長尾伸・池田が行った。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 本書使用の脇山地区空中写真(PL.1)は国土地理院昭和51年撮影を縮小したものである。
9. 本書の執筆は、脇山A遺跡を井澤・重藤、谷口遺跡を池田がそれぞれ担当した。尚、付編について福岡市立博物館の古良国光が執筆した。
10. 本書の編集は各担当者の協議の上、井澤がまとめた。
11. 本調査出土遺物および調査記録は、今後、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開、活用される予定である。

本文目次

第1章 はじめに	1
(1) 発掘調査に至る経過	1
(2) 発掘調査の組織	4
第2章 遺跡の立地と環境	5
第3章 勝山A遺跡第4次調査の概要	9
(1) 調査経過	10
(2) 第1地点I・II区(1号道路)	17
(3) 第2地点I～III区(3号道路)	21
(4) 第3地点I・II区(2号排水路)	25
(5) 第4地点I・II区(13-8田)	28
(6) 第5地点(13-7・8田)	29
(7) 第6地点	30
(8) 第7地点(13-6田)	31
(9) 第8地点(13-5B田)	32
(10) 第9地点(13-5A田)	33
(11) 第10地点(13-3田)	34
(12) 第11地点(13-2田)	36
(13) 第12地点I～IV区(13-1-1・2田、13-2田・2号排水路IV区)	38
(14) 第13地点(12-3田)	44
(15) 第14地点(12-4田)	44
(16) 第15地点(12-5田)	45
(17) 第16地点I～IV区(12-6A～C、7A・B田)	47
(18) 第17地点(12-8田)	49
(19) 第18地点(12-9田)	50
(20) 第19地点(12-10田)	51
20 その他の出土遺物	53
第4章 谷口遺跡調査報告	55
(1) 谷口遺跡の概要	56
(2) 第1地点	60
(3) 樽溝	64
(4) 第2地点	67
(5) 第3地点	68

(6) 第4地点	68
(7) 第5地点	70
(8) 第6地点	72
(9) 第7地点	74
(10) 第8地点	78
(11) 第9地点	80
(12) 第10地点	83
(13) 第11地点	85
(14) 第12地点	85
(15) 第13地点	86
(16) 第15地点	87
(17) 第16地点	90
(18) 試掘調査出土遺物	91
付録「筑前国早良郡 脇山地方における村落の形成について」	101~131

挿 図 目 次

Fig. 1 脇山地区県営圃場整備事業計画区域（縮尺1/16,000）	3
Fig. 2 周辺の遺跡の分布（縮尺1/75,000）	7
Fig. 3 周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図－西部III－）（縮尺1/16,000）	8
Fig. 4 試掘調査トレンチ配置図（縮尺1/5,000）	13
Fig. 5 調査区位置図（縮尺1/5,000）	14
Fig. 6 圃場整備計画図（縮尺1/5,000）	15
Fig. 7 焼土壙SX02、SX19 実測図（縮尺1/60、1/40）	18
Fig. 8 第1地点 遺構配置図（縮尺1/400）	19
Fig. 9 旧河川跡 SD01土層図（縮尺1/120）	20
Fig. 10 第2地点 遺構配置図（縮尺1/400）	23
Fig. 11 第2地点 SK37出土绳文土器実測図（縮尺1/4）	24
Fig. 12 第3地点 I・II区 遺構配置図（縮尺1/400）	25
Fig. 13 焼土壙SX04 実測図（縮尺1/30）	26
Fig. 14 焼土壙SX05 実測図（縮尺1/40）	27
Fig. 15 第4地点 I・II区 遺構配置図（縮尺1/400）	28
Fig. 16 第5地点 遺構配置図（縮尺1/300）	29
Fig. 17 第6地点 遺構配置図（縮尺1/400）	30

Fig.18	第7地点 遺構配置図（縮尺1/300）	31
Fig.19	第8地点 遺構配置図（縮尺1/300）	32
Fig.20	第9地点 遺構配置図（縮尺1/400）	33
Fig.21	第10地点 遺構配置図（縮尺1/300）	34
Fig.22	SD01溝断面十層図（縮尺1/100）	35
Fig.23	硯実測図（縮尺1/分）	35
Fig.24	塚SX03 実測図（縮尺1/40）	37
Fig.25	第11地点 遺構配置図（縮尺1/300）	37
Fig.26	第12地点 I~IV区遺構配置図（縮尺1/400）	39
Fig.27	土墳墓SX03 実測図（縮尺1/30）	40
Fig.28	土壤墓SX03 出土龍泉窯系青磁碗（縮尺1/3）	41
Fig.29	SX09、SD02出土土器実測図（縮尺1/3）	42
Fig.30	SD02、P5出土土器実測図（縮尺1/3）	43
Fig.31	第13地点 漆構配置図（縮尺1/200）	44
Fig.32	第14地点 遺構配置図（縮尺1/200）	44
Fig.33	焼土墳SX04 実測図（縮尺1/40）	45
Fig.34	第15地点 遺構配置図（縮尺1/200）	46
Fig.35	第16地点 遺構配置図（縮尺1/400）	47
Fig.36	焼上塙SX23 実測図（縮尺1/40）	48
Fig.37	18地点 焼土墳SX01 実測図（縮尺1/40）	50
Fig.38	第17・18地点 遺構配置図（縮尺1/400）	50
Fig.39	第19地点 遺構配置図（縮尺1/300）	51
Fig.40	焼上塙SX01 実測図（縮尺1/30）	52
Fig.41	その他の出土遺物実測図（縮尺1/3）	53
Fig.42	谷口遺跡試掘調査及び調査区位置図（縮尺1/3000）	57
Fig.43	焼上塙の分布及び旧道、極溝位置図（縮尺1/3000）	58
Fig.44	第1-I地点 遺構配置図（縮尺1/400）	60
Fig.45	第1地点遺構実測図（縮尺1/40）	61
Fig.46	第1地点トレンチT3西壁土層図（縮尺1/30）	62
Fig.47	第1地点出土遺物実測図（縮尺1/3）	63
Fig.48	極溝トレンチ土層図（縮尺1/30）	65
Fig.49	第2-I地点 遺構配置図（縮尺1/400）	67
Fig.50	第3地点遺構実測図（縮尺1/40）	68
Fig.51	第3地点出土遺物実測図（縮尺1/3）	68

Fig.52	第3・4・5地点遺構配置図(縮尺1/500)	69
Fig.53	第4地点遺構実測図(縮尺1/40)	70
Fig.54	第5地点遺構実測図(縮尺1/40)	71
Fig.55	土壤SX-01実測図(縮尺1/40)	72
Fig.56	SX-01出土遺物実測図(縮尺1/4)	72
Fig.57	第6地点遺構実測図(縮尺1/40)	74
Fig.58	第6・7地点遺構配置図(縮尺1/500)	折込み
Fig.59	第7地点遺構実測図①(縮尺1/40)	76
Fig.60	第7地点遺構実測図②(縮尺1/40)	77
Fig.61	第7地点出土遺物実測図(縮尺1/3)	78
Fig.62	第8地点遺構配置図(縮尺1/400)	79
Fig.63	第8地点出土遺物実測図(縮尺1/3)	80
Fig.64	第9・10地点遺構配置図(縮尺1/400)	81
Fig.65	第9地点遺構実測図(縮尺1/40)	83
Fig.66	第10地点遺構実測図(縮尺1/40)	84
Fig.67	第11地点遺構実測図(縮尺1/40)	85
Fig.68	第12地点遺構配置図(縮尺1/400)	85
Fig.69	第13地点遺構配置図(縮尺1/400)	86
Fig.70	第15地点遺構実測図(縮尺1/40)	87
Fig.71	第15地点遺構配置図(縮尺1/400)	88
Fig.72	第15地点出土遺物実測図(縮尺1/3)	89
Fig.73	第16地点遺構配置図(縮尺1/400)	89
Fig.74	第16地点遺構実測図(縮尺1/40)	90
Fig.75	試掘調査遺物実測図(縮尺1/3)	92

表 目 次

Tab. 1	調査概要の一覧	1
Tab. 2	第4次調査地点一覧表	16
Tab. 3	第4次調査遺構一覧表	16
Tab. 4	谷口遺跡調査地点一覧	59
Tab. 5	遺構一覧1	94
Tab. 6	遺構一覧2	95
Tab. 7	遺構一覧3	96

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経過

昭和59年度当初の駒山地区の圃場整備事業は、約100haに及ぶ広大な地域を対象としたもので、対象地域内には埋蔵文化財の存在が予想された。この事業計画に伴い、埋蔵文化財課（当時 文化課）では、全体の施工計画の作成に必要な資料を得るために、昭和60年3月18日から22日にかけて試掘調査を実施した。この時の試掘は、分布調査によって土器が多く出土する川原田地区から会田地区の北東部（A区）と石塚地区の南部から駒山小学校の西側にあたる小ノ原地区（B区）、及び小学校を隔てた東側一帯（C区）に限って行った。A区は小笠木川の氾濫原にあたり、遺構の可能性は少ないという予測が出た。B区については柱の痕跡が認められたが、その密度は薄いものであった。C区では試掘溝の一ヶ所で遺構を確認した。

昭和60年度に事業計画は具体化され、事業計画の面積は82.9haとなり、昭和61年度から8ヶ年度にわたって計画完了させるものとなった。

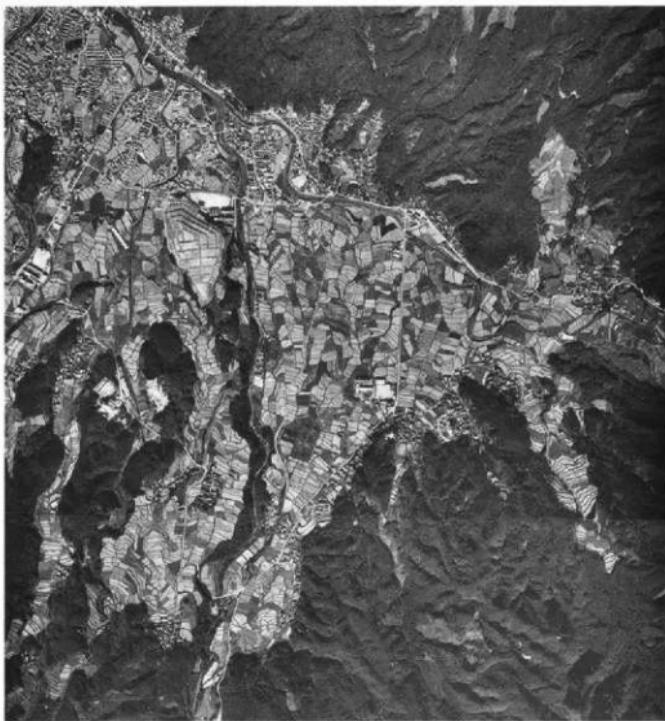
埋蔵文化財課では、初年度の工事が予定される地区について昭和60年12月11日から19日にかけて試掘を行い、土壤を確認した。このため昭和61年度は道路・水路部分の約2,600m²及び、削平をうける水田部分の約3,300m²の合計5,600m²について本調査を実施した。昭和62年度も当該年度内に試掘調査を行い、遺構を検出した構造物、田面部分の合せて約5,000m²について本調査を行った。昭和63年度は試掘調査の結果、削平を受ける田面部分の約6,600m²について本調査を実施したが、この成果は既に報告済みである。

平成元年度は、試掘調査については国庫補助（詳細分布調査費）を受けて実施した。元年度の圃場事業地区は谷口地区、会田地区の2ヶ所が計画されており、且つ、田植え前に試掘調査を実施しなければ、田越し水や湧水のため、水の落ちる9月まで試掘調査が出来ないという条件や、担当職員の不足等も重なって、試掘調査の実施は困難を極めた。試掘調査の結果、谷口地区では約70%、会田地区では約80%の地域に遺跡の存在が確認できた。この結果に基づき、農政サイドとの協議の結果、整土保存、及び設計変更等によって、以下の表のとおり調査面積を決定し、谷口地区については7月より、会田地区は11月より発掘調査を実施した。

Tab.1 調査概要の一覧

遺跡名	次数	遺跡調査番号	遺跡略号	調査地		分布地図番号
				調査地名	地番	
駒山A	1次	8643	WKA-1	早良区大字駒山字石原、大桑、会田		早良 10・17
#	2次	8722	WKA-2	早良区大字駒山字川原田、会田		早良 10・17
#	3次	8816	WKA-3	早良区大字駒山字会田		早良 10・17
#	4次	8933	WKA-4	早良区大字駒山字川原田、会田		早良 10
谷口	1次	8932	TNG-1	早良区大字駒山字谷口		早良 8

遺跡名	次數	年 度	事 業 量	調査対象面積	調査面積	調査期間
駒山A	1 次	昭和61	4.5ha	5,600m ²	5,600m ²	1986年10月14日～87年1月14日
#	2 次	昭和62	5.0ha	7,150m ²	5,000m ²	1987年8月4日～87年12月28日
#	3 次	昭和63	11.4ha	6,636m ²	6,636m ²	1988年9月26日～88年12月15日
#	4 次	平成元	8.76ha	87,600m ²	10,931m ²	1989年11月1日～90年2月5日
谷口	1 次	平成元	5.6ha	56,000m ²	13,745m ²	1989年7月1日～90年2月28日



駒山地区航空写真



Fig. 1 駒山地区県営圃場整備事業計画区域（縮尺1/16,000）

(2) 発掘調査の組織

平成元年度調査（脇山A遺跡第3次調査、谷口遺跡第1次調査）

県営脇山圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備部寄課

福岡市経済局農林水産局農業土木課

福岡市脇山土地改良組合

発掘調査主体

福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

調査統括

埋蔵文化財課 課長・柳川純孝

埋蔵文化財第二係長・柳沢一男

調査庶務

埋蔵文化財第一係・安部徹

調査担当

文化財主事・井澤洋一、

埋蔵文化財第二係・常松幹雄、野村俊之、池田祐司

発掘協力者

森部半助、緒方十代治、緒方清造、田中宣親、山口一郎、細川友吉、
松井一治、山路茂、因ヨシ子、大鶴タカ、緒方寿々子、緒方ミキ、北
崎明代、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、小柳和子、横スミ子、
佐藤みづほ、多田咲子、辻節子、富崎栄子、西嶋彰子、平川富美子、
平川史子、真名子キミヨ、真名子シズエ、三谷朗子、柳浦八重子、山
口タツエ、山田ヤス子、吉岡勝野、横溝恵美子、横溝カヨ子、諸方柳
子、結城多美子、馬男木アサエ、大鶴道代、正崎泰代、有馬千恵美、
平川伸子、平川真鈴、真子アキノ、平川土枝、鶴川きみえ、清水邦子、
中園登美子、川口シゲノ、清末シズエ、栗木和子、坂本ハツ子、高田
玉恵、谷吉美、永井鈴子、永井ゆり子、西嶋タツノ、西嶋洋子、箱田
香代子、土生喜代子、土生ヨシ子、原ハナエ、福田小菊、堀尾久美子、
森山早苗、家追千代、山下アヤ子、山内トキエ、結城千代子、吉岡光
子、吉岡直美、

整理作業

重藤俊行、吉田扶希子、有馬千恵美、倉光京子、多田映子、西嶋彰子、
福田小菊、松尾真澄、

第2章 遺跡の立地と環境

博多湾に面する福岡平野は、東の三郡山地から派生する山塊と西の長垂山の山塊及び、南側の背振山地から派生する山々によって囲まれた地域をさしている。

この福岡平野の西は、鴻巣山を中心とした山陵群が北側へ舌状に発達し、その西側の平野を迤々と走っている。この平野を狭義では早良平野と称しており、今回の報告で扱う脇山地区は、この平野の最奥部の狭隘地に位置し、周辺は扇状地の基部や山麓部に形成された棚田風景を呈している。

「筑前國續風土記」によると、江戸時代の脇山郷は椎原、板屋、小笠木、西村、脇山、内野、石並、曲瀬の八村を含んでいたが、明治22年の町村制によって椎原、板屋、小笠木、脇山の4村を以て脇山村が組織された。

歴史的背景を文書や伝承をもとに遡ると、脇山は背振山東門寺の寺領の北麓に位置しており、「門戸口」、「大門」、「上城戸」、「下城戸」などにその名跡を示す小字名が残っている。東門寺の縁起は定かではないが、奈良時代以前から高僧が入山した記事が見える。その後、中世の山岳信仰の隆盛と共に栄え、西油山にあった天福寺との争乱によって焼失している。戦国時代に竜造寺氏によって再建されたが、戦火によって灰燼に帰している。東門寺と天福寺との北側の境は現在、入部の重留に灯籠石として残っている。又、15世紀にこの一帯には「窪ノ名」が成立し、脇山字会川や谷口もこの名の内に含まれている。

この地域の田畠の開発については比丘尼様伝承がある。これは9世紀後半の貞観年間に、紀伊国熊野から来た比丘尼が、椎原の下臼に堰を築いて水路を開いたというもので、これらは機堰、樋の溝、釣溝として伝承され、現在も丘陵地帯を潤している。発掘調査においても、これらの水路に沿って集落が展開しており、少なくとも水路の開削を契機として地域開発が進んだことは否めない。脇山字谷口の西側、小高い丘の檜の大木の側には比丘尼様と称される石塔がある。これは五輪塔や宝篋印塔の一部が組み合さっており、形式は中世のものである。戦国時代の脇山は、観音堂の南に池田大牧坊の居城であった池田城が築かれ、北東山稜には大友氏彼官で早良平野一帯を治めた小田部氏の山城—荒平城が存在し、その支配下にあった。この一帯は、又、小笠木川や椎原川沿いに筑紫郡や肥前へ抜ける郡道の要衝でもあった。天正年間に、肥前竜造寺氏は三瀬畔を経て、侵入し、大友氏の拠点荒平城を落城させて、早良平野を掌中にしている。

脇山地域ではこれまでに本格的な発掘調査は少なく、第1～3次までの調査によって13～15世紀の堀立柱建物、焼土壙、井戸等が検出されているにすぎないが、脇山A遺跡4次調査や谷口遺跡調査の成果は、脇山一帯の開発状況を知らしめるものである。特に多く検出された焼土壙のほとんどが炭焼き壙と考えられ、中世都市博多や鉱工業生産との関連では看過できない遺構となった。周辺では馬立山の西側に位置する峯遺跡において、奈良～鎌倉時代の遺構が存在

し、焼土壙や堀立柱建物、土壙墓等が検出しており、山間部の開発時期を示すと同時に開発領主達の存在を伺せるもので興味深い。

又、地域史の中で特記できることは昭和天皇の即位に際して行なわれる大嘗祭に用いられた新穀を獲るための祭田(主基斎田)が存在することである。現在の祭田は、字野中にあり、2haが茶園として保存されている。

この主基斎田に近い字石上といふところは、今津誓願寺や博多聖福寺と共に栄西禅寺が帰朝後、最初に茶種を蒔いた場所の一つといわれ、中世の重要な位置を示している。



1次調査区北側の荒平山城跡を望む



葛山字会田・谷口地区全景 南から

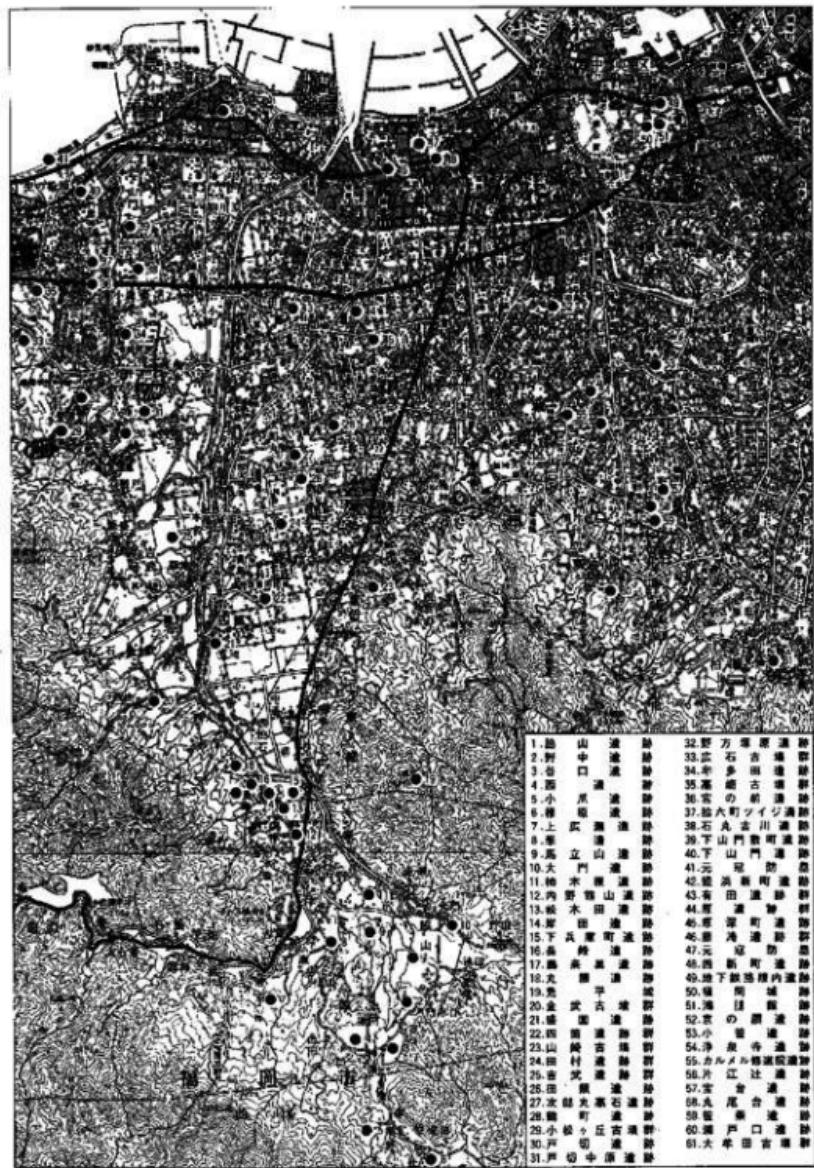


Fig. 2 周辺の遺跡の分布 (縮尺1/75,000)



Fig. 3 周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図－西部III－）（縮尺1/16,000）

第3章 脇山A遺跡4次調査の概報



第12地点 竪穴状土壙作業風景

早良区大字脇山字会田
字川原田

第3章 脇山A遺跡4次調査の概要

(1) 調査経過

平成元年度の調査地域は標高71m~78mを測り、扇状地形の中央部分に位置する。第3次調査地域は谷を挟んだ北側に位置する。地形的には過去3回の調査地域に比べれば遺存度が高く、緩やかな傾斜面が復原できる。調査地域の字名は大部分が字会田に属しており、東側の一部が字川原田に含まれる。

この地域の伝承には古くから荒平くすれの伝説が残っており、現地踏査した折にも、地元の人々より、一帯が龍造寺軍との戦さで死んだ武者たちの墓所であること又、そうした墓の一つといわれる塚や立石の幾つかを教示された。その内の塚については第11地点で報告しているので参考にされたい。

年度当初には既に大略の設計図が出来ており、農政サイドより地権者と組合との間においても換地手続きや文化財調査の承諾も済んでいる旨の連絡を受けたので、試掘調査を実施することにした。試掘調査は5月から行つたが、一部の地権者より試掘調査を拒否される事態も生じた。

旧地形は開田の際の切り盛整地による削平が比較的少なく、遺構の遺存度は良好であった。遺構面は耕作土を除くと直ぐ下に表出できる。対象地域の北東側は谷地形に含まれるので、耕作土の下に暗黄褐色粘質土の包含層が存在する。遺構・遺物の時代は縄文時代から鎌倉時代までの幅をもつが、特に弥生・古墳時代の遺物は少ない。本調査は11月から2



前面に昭和63年度圃場整備地域と南方に谷口を望む



手前に第5~7地点、東方の奥に平成3年度圃場整備地域を望む



焼土壙SX19の取り上げ作業

月4日まで実施した。



各調査地点 全景 南から



平成元年度圃場整備地域と各調査地点全景



会田地区 試掘調査トレンチT1~15、T26~29望む 北から



会田地区 試掘調査トレンチT13~24を望む 北から

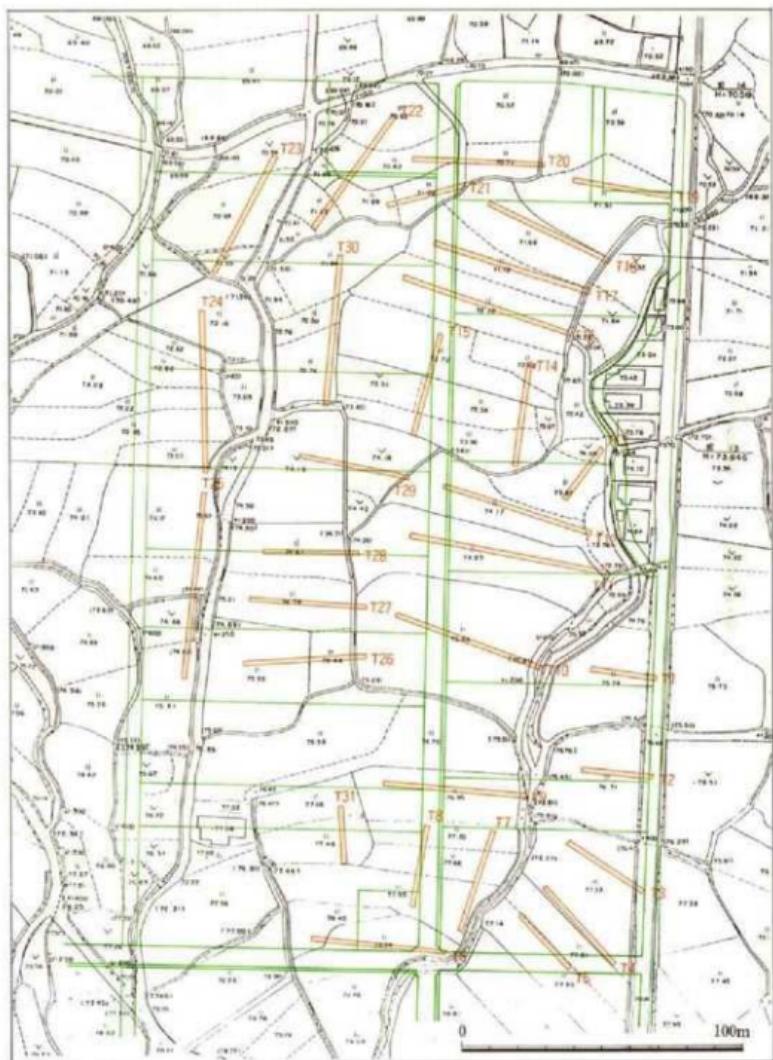


Fig. 4 試掘調査トレンチ配置図 (縮尺1/5,000) 案数字はトレンチNoを表す。

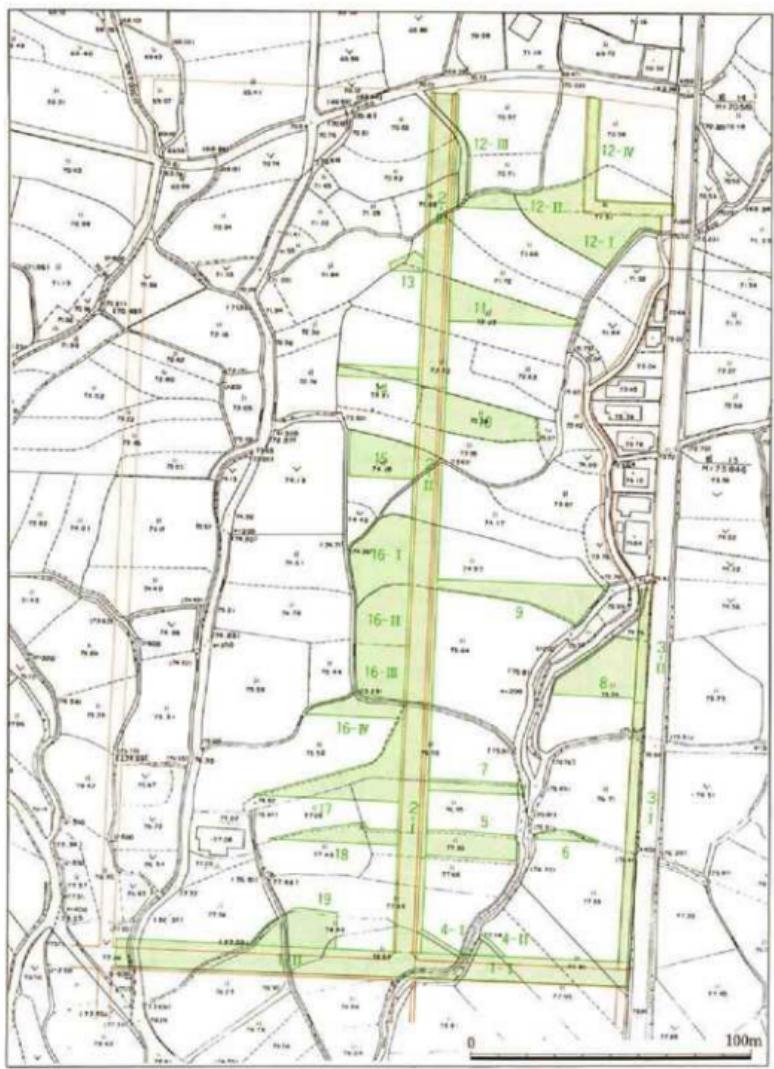


Fig. 5 調査区位置図（縮尺1/5,000）番数字は地点名を表す。

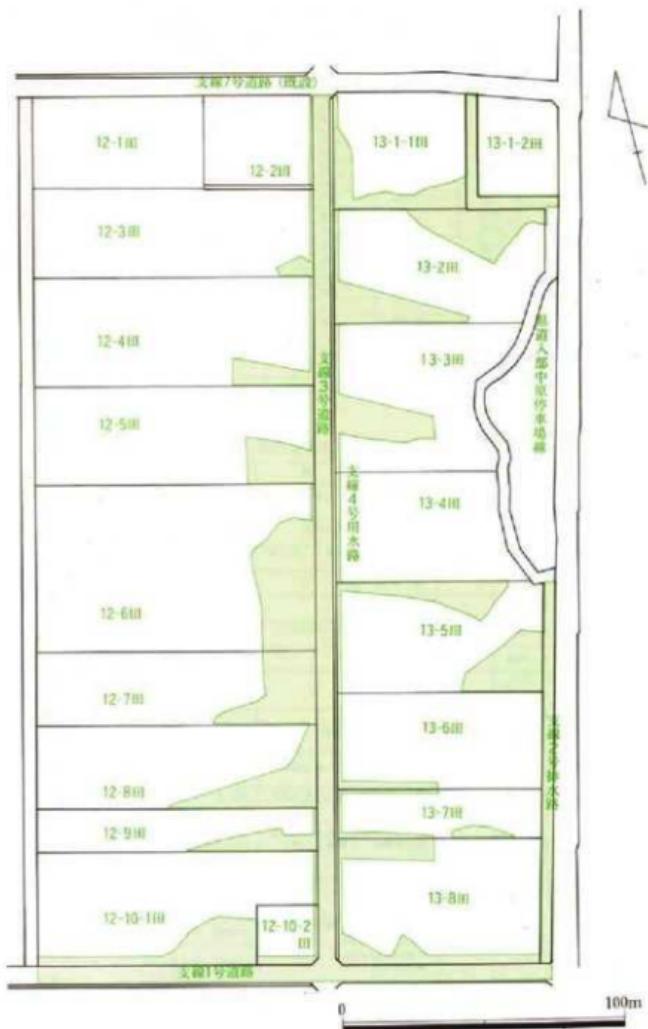


Fig. 6 園場整備計画図 (縮尺1/5,000) 「▲」は発掘調査部分。

Tab. 2. 第4次調查地點一覽表

地名	構造物・面積名	面積(m ²)	測量面積(m ²)	地図名	期	期	備考
1 支線	1号 政 公	1,110	1,096	I - II	89.11.3 - 11.18		
	4号 通 街	626			89.11.12 - 12.13		
2 支線	3号 通 街	1,660	1,680	I - III	89.11.12 - 12.13		
	2号 通 街	1,426	532		89.11.29 - 12.19		IWAKI212地点
3 支線	13- 5 A 面 積	3,232	151,5		89.12.4 - 12.9		
5 15- 7 B 面 積		292	80		89.12.18 - 12.25		
6 13 7 A 面 積			87		89.12.5 - 12.9		
7 13 5 B 面 積		2,522	66		89.12.4 - 12.7		
8 12- 5 B 面 積		2,660	440,5		90.1.5 - 1.11		
9 12- 5 A 面 積			416		89.11.1 - 12.9		
10 13- 3 B 面 積		3,080	549		89.12.16 - 12.27		
11 13 2 A 面 積		3,080	377,5		89.12. - 90.2.4		
12 支線	12- 1 A 面 積	2,860	236	IV	89.12.15 - 90.2.4		
	12- 1 B 面 積		100		89.12.6 - 90.2.4		III地点
	13- 2 B 面 積	3,000	91,5		89.12.11 - 90.2.4		AIIHはIII地点
支線	2号 構 木	11,270	276		89.12.11 - 90.2.4		I - II区は3地点
	12 3 面 積	3,167	59		90.1.16 - 1.18		
14 12 4 面 積		3,928	166		90.1.16 - 1.18		
15 12- 5 面 積		3,511	321		90.1.20 - 2.2		
16 支線	12- 6 面 積	5,270	216	I - IV	90.1.11 - 2.2		
	12 7 面 積	2,594	542		90.1.11 - 2.2		
17 12- 8 面 積		3,080	460		90.1.17 - 2.2		
18 12- 9 面 積		1,577	101,5		90.1.12 - 2.2		
19 12-10- 1 面 積		3,892	1,395		90.1.15 - 2.2		

Tab. 3. 第4次調査遺構一覧表

調査地點	地圖名	構造物・埋藏品名	遺物面積	遺 墓		遺 物	時代・時期	備考
				墓	葬			
1	I - II	文都 1号 路面	1	河川傍2、溝5、土塁6、出土 器物	圓筒瓦・石器、土器類、石器、白 陶器、石器、灰陶器、木炭、古董、 骨器	绳文時代後期 ~江戸時代	绳文時代後期	
2	I - II	文都 3号 路面	1	溝7、土塁4、出土器物	圓筒瓦・石器、土器類器、石器、白 陶器	绳文時代後期 ~江戸時代後期	绳文時代後期	
3	I - IV	文都 2号 排水溝 I区	1	河川傍2、溝2、土塁1、出土器 物5	圓筒瓦・石器、土器類器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
4	I	13-8 A 地圖	1	地下塀1、上塀1	繩文1型、瓦器等	繩文時代 ~江戸時代	绳文時代	平野奈糸
	II	13-8 B 地圖	1	汲水器3	繩文1型、瓦器等	繩文時代 ~江戸時代	绳文時代	
5	13-7 H 地圖	1	土塁2、下塀4、河川傍1、 立柱跡1	土器類、石器	绳文1型、土器類、白陶、黑陶 器、陶器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
6	13-7 A 地圖	1	汲水器3	繩文1型、土器類1	绳文1型、土器類、白陶器、黑陶 器、陶器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
7	I	13-7 防壁 (一部)	1	溝2、地上塀1	石器、土器類、黑色土器、木炭 等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
	II	13-6 防壁	1	土塁4、下塀3	土器類、石器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
8	13-5 B 地圖	1	出土器1、溝泥炭1	圓筒瓦・石器、土器類、白陶、黑陶 器、陶器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
9	13-5 A 地圖	1	河川傍1	土器類、石器等1	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
10	13-3 地圖	1	河川傍1、土塁1、出土器3	土器類、石器等、陶器、青磁、 白陶、黑陶、青白釉陶器、石器、 骨器、竹器等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
11	13-2 A 地圖	1	溝1、土塀16、壁1、出土器2	有孔穿孔器、芒硝石	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	绳文時代	
12	13-3-1 地圖	1	河川傍1、土塁12、出土器15、 立柱跡1	圓筒瓦、形、土器類、磨擦器 等、青白釉、白陶器、黑陶器、石器、 骨器、竹器等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
	III	13-1-2 地圖	1	河川傍1、土塁12、出土器15、 立柱跡1	圓筒瓦、形、土器類、磨擦器 等、青白釉、白陶器、黑陶器、石器、 骨器、竹器等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
	I	13-2 B 地圖	1	出土器1、溝2、立柱跡1、 土塁1	圓筒瓦、形、土器類、磨擦器 等、青白釉、白陶器、黑陶器、石器、 骨器、竹器等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	
	IV	文都 2号 IV区	1	出土器3	圓筒瓦、形、土器類、磨擦器 等、青白釉、白陶器、黑陶器、石器、 骨器、竹器等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	
13	13-2 地圖	1	出土器3	圓筒瓦	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	绳文時代	
14	13-4 地圖	1	土塀1、溝1		绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
15	13-5 地圖	1	河川傍1、土塀1、出土器4、 立柱跡1	土器類、石器、石器等	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
16	I	13-6 地圖	1	七塁22、施土1、土塁23、 出土器10件	土器類、陶瓦・瓦器、白陶、木 炭、灰陶器、磨擦器、土器類	绳文時代後期 ~江戸時代	绳文時代後期	
	II	13-7 地圖	1	出土器1、土塀1、鐵住器1	土器類、陶瓦・瓦器、白陶、木 炭、灰陶器、磨擦器、土器類	绳文時代後期 ~江戸時代	绳文時代後期	
17	13-8 地圖	1	出土器4、pH計	土器類、陶瓦・瓦器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
18	13-9 地圖	1	出土器1、土塀2、出土器2	鐵製品、鐵錆片、網文土器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	
19	13-10 地圖	1	溝1、土塀2、出土器2	鐵製品、鐵錆片、網文土器	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代 ~江戸時代	绳文時代	

(2) 第1地点I・II区（1号道路）

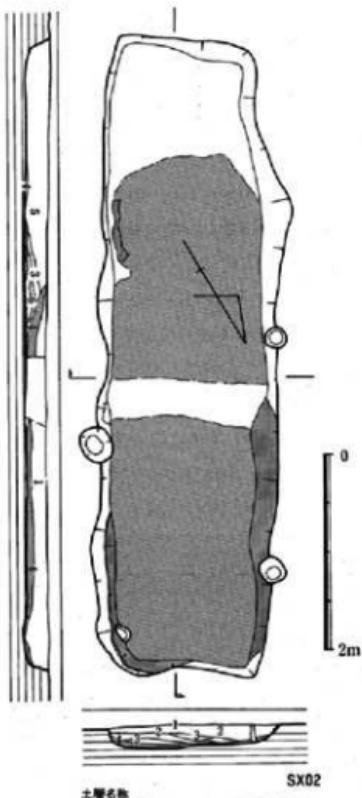
この調査区は南北方向に約185mの長さを測る。調査区の中央部は標高78.80mを測り、地山は南側と北側へ傾斜しており、計画道路は丘陵部を横断した状況を示している。調査区の中央部を現況で、幅2m足らずの水路が東方へ流下している。調査区はこの水路を境に南側をI区、北側をII区とした。I・II区の遺構は全て通し番号としたが、焼土壙はSXとし、他の土壙をSKとした。遺構は河川跡2条、溝状遺構6条、焼土壙22、土壙6を検出した。焼土壙は平面形は不定形または不整長方形を呈しているが、遺存状態の良い底面は長方形又は、隅丸長方形を呈する。周壁は焼壁を形成しており、土層の下部は木炭層が存在する。SX04・SX19は長軸方向に並べた炭化木が出土している。土壙の大きさは長さ1.2m、幅0.7mの小形から、長さ2.45m、幅2.1mまであるが、特にSX02は大きく、長さ5.0m、幅3.4mを測る。平面形は不整長方形を呈しており、底面に木炭層が存在する。溝状遺構の大部分は田畑の地割りに関連するが、溝SD05は江戸時代に属している。河川跡SD01は調査区の中央部に位置するが、上部に現在水路が存在する。この水路に直交するトレンチを設定した結果、逆梯形を呈する旧河川の肩を検出した。覆土には砂礫が堆積しており、白磁碗、土師器皿等が出土した。この河川跡は復原すると約20mの



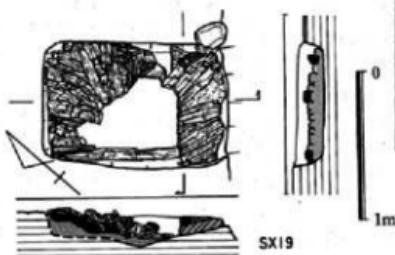
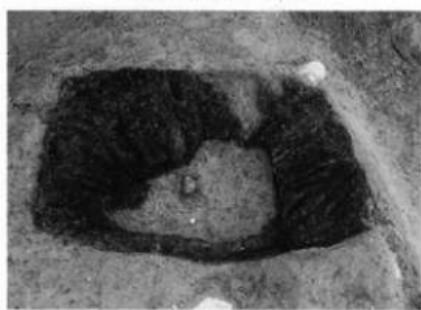
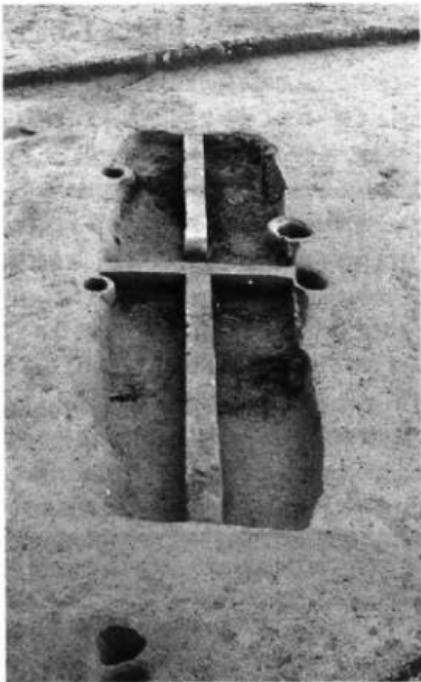
第1地点I・II調査区 全景 南から



第1地点II調査区 全景 北から



土層名
1. 黄灰色粘質土
2. 灰灰色粘質土(根多い)
3. 黄灰色粘質土(木炭多い)
4. 灰化物層
5. 黄褐色粘質土



幅を測り、上の水路はこの形様と考えられる。

Fig. 7 烧土壤SX02、SX19 実測図 (縮尺1/60、1/40)

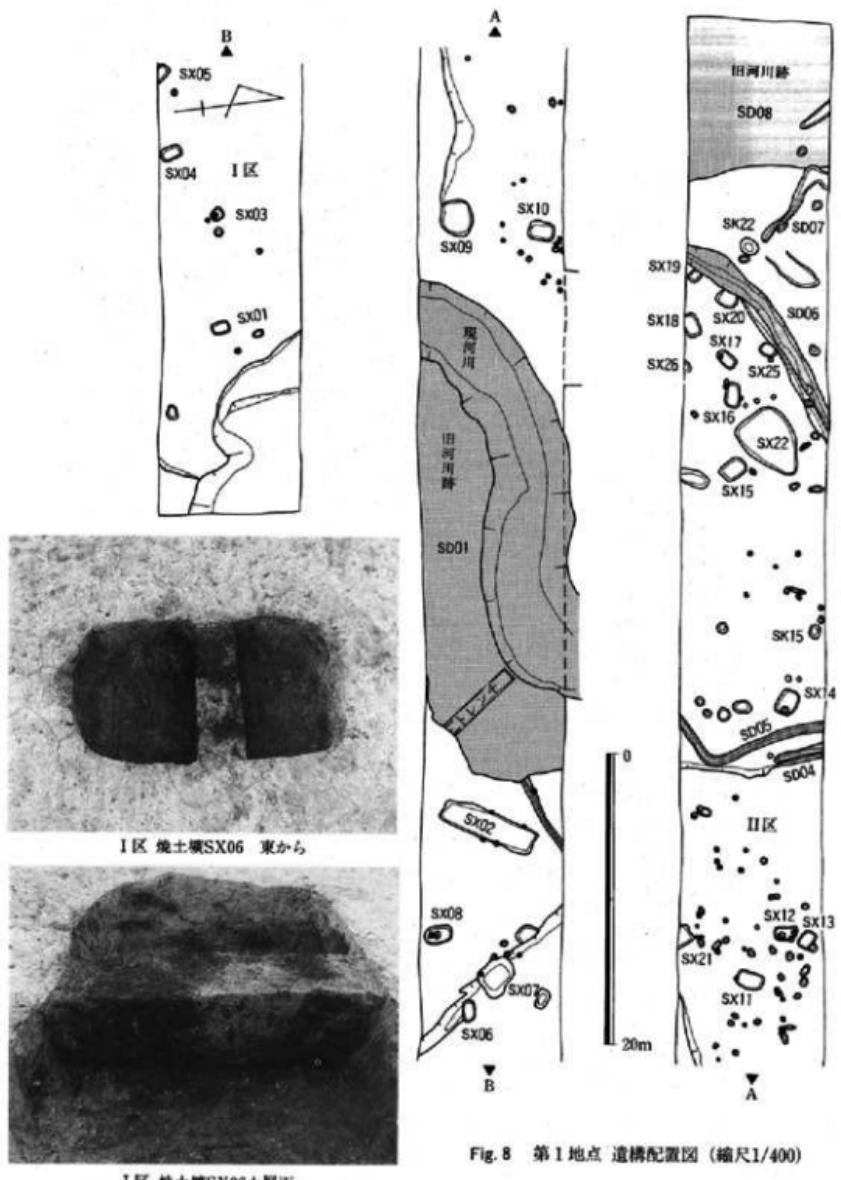
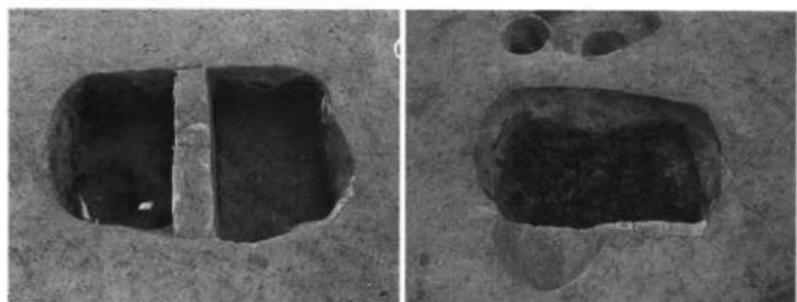


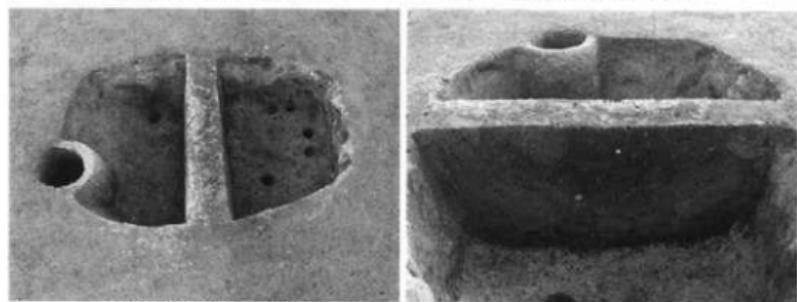
Fig. 8 第1地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

I区 焼土場SX06土層面



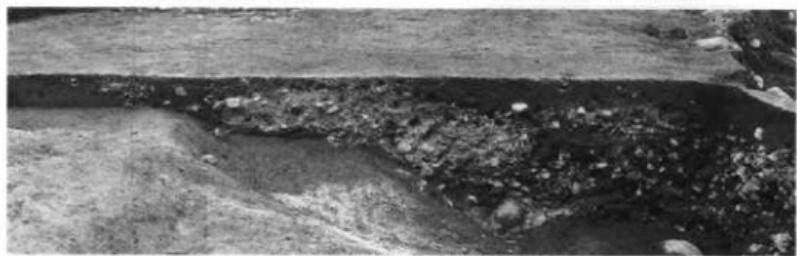
II区 焼土壌SX14 東から

II区 焼土壌SX13 北から



II区 焼土壌SX11 南から

II区 焼土壌SX11 土層状況



河川跡 SD01土層の状況 南から

L = 79.514 m

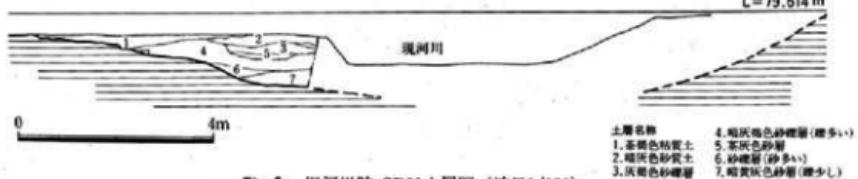


Fig. 9 旧河川跡 SD01土層図 (縮尺1/120)

(3) 第2地点 I ~ III区 (3号道路)

この調査区は幅約10m、長さ約310mを測り、東西方向に設定されている。東側に傾斜する地形で、第1地点との交差部分の標高約78.80mを最高として、東端部の標高は約70.50mを測る。遺構面は開田時の切盛りにより、場所により削平状態や土層状況が異なる。地山は西側が黄褐色粘質土、中央部分が黒褐色砂質土、東側が黄灰色粘質土である。層位的には砂礫層上に黒褐色の固く締った砂質土が堆積し、その上部に黄灰色粘質土、又は黄褐色粘質土が乗っている状況である。遺構は溝状造構7条、土塙44、焼土塙23、掘立柱建物2棟を検出した。溝状造構のSD31・32は断面形が逆梯形、又はレンズ状を呈しており、瓦器碗片や土師器皿等が出土している。土塙は平面形が円形プランと長方形プランの2形態に分けられるが、いずれの覆土も暗灰褐色粘質土を主体としている。円形プランの土塙の断面は外側に若干彫み気味である。長方形プランの断面形は逆梯形のものと、垂直形のものとに分けられる。SK37からは縄文時代晩期の粗製甕が出土している。焼土塙はいずれも周壁が焼けており、覆土には炭化物層が存在する。SX52の下部からは木炭が出土した。遺物は縄文時代後期～晩期の土器、打製石斧、磨製石斧、打製石鎌、白磁碗、土師器片などが出土している。



第2地点 I ~ III区 調査区 全景 西から



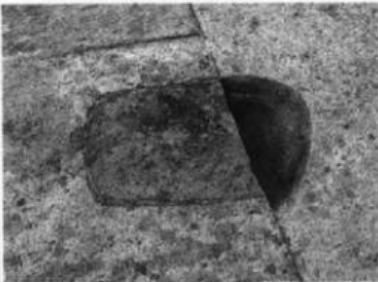
II区 全景 西から



III区 全景 東から



I区 焼土壌SX30 南から



I区 焼土壌SX32 西から



II区 焼土壌SX44 土層面



III区 焼土壌SX53 土層面

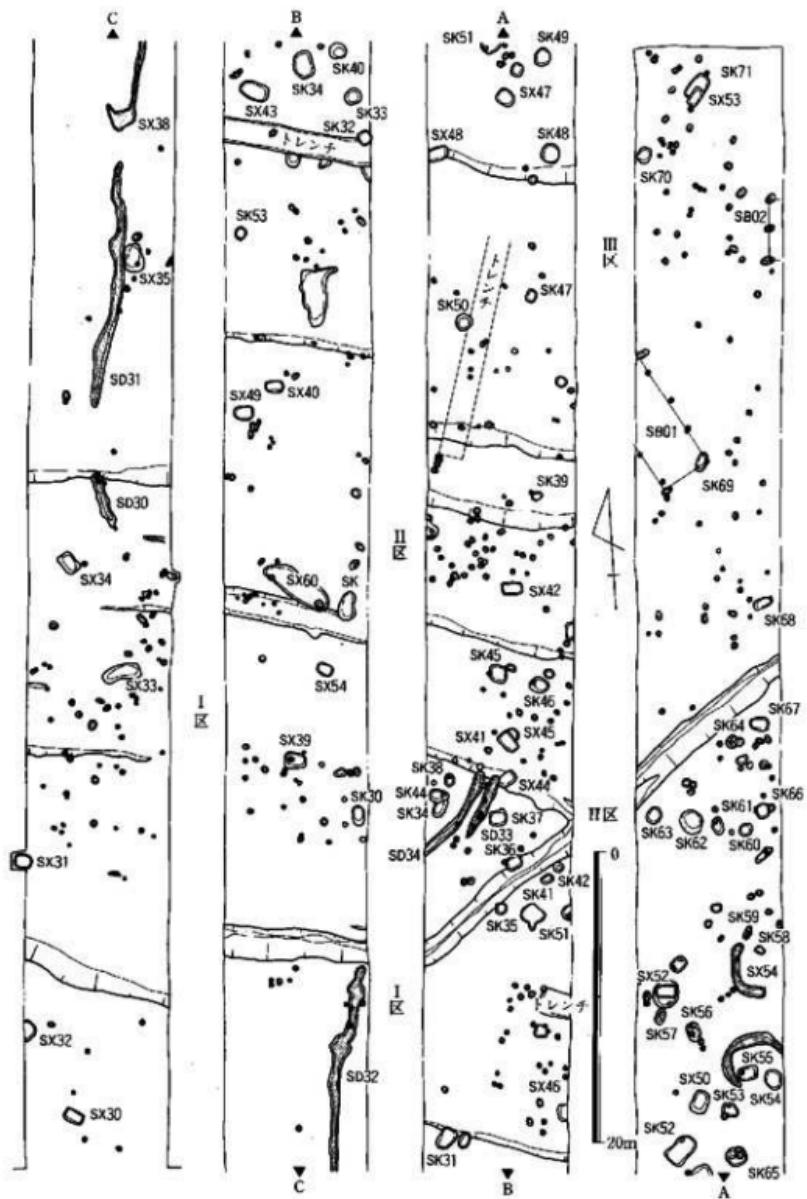
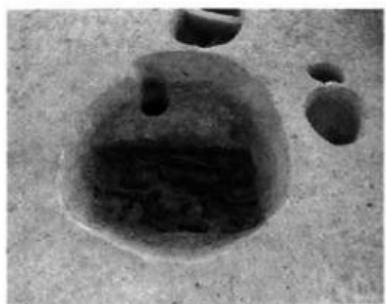


Fig.10 第2地点造構配置図（縮尺1/400）



III区 土壌SX52 北から



III区 土壌SK62 北西から

出土遺物 (Fig.11)

Fig.11は3号道路II区SK37から出土した縄文土器である。口縁部と底部を欠いた胴部の破片で、最大径は、図上の復原で40.2cmを測る。内外面とも雑にナデて、内面の一部には粘土紐接合の線が見られる。

(重藤)

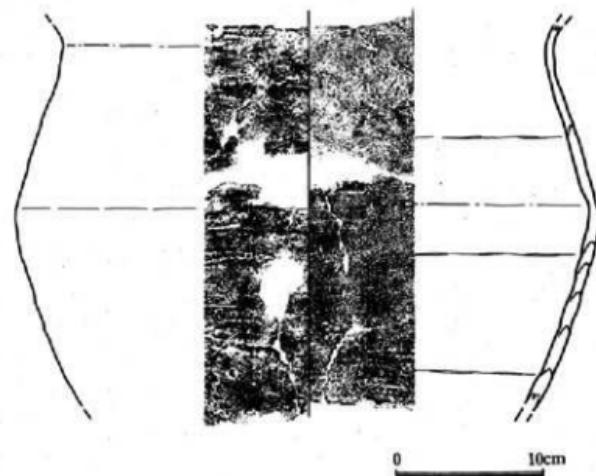


Fig.11 第2地点 SK37出土縄文土器実測図 (縮尺1/4)

(4) 第3地点I・II区(2号排水路)

東西方向の調査区で、幅4m、全長約360mを計るためにI～IV区に分けた。III区は現在の水路上に位置するため調査対象から除外した。IV区は12地点のI・II区と接しているため12地点の調査と並行して行い、まとめて報告を行うことにした。I・II区の地山は黄褐色粘土質、又は砂質土で、一部に礫が表出している。標高はI区の西側が約77.70m、II区の東側が約74.80mを測る。

遺構は焼土壙5、土壤1、溝状遺構2、を検出した。土壙は平面形が不定形を呈している。焼土壙は平面形が長方形のものと、不整円形を呈するものがあるが、不整円形の焼土壙は壁が崩壊したためである。底部の形状はいずれも隅丸長方形で、周壁が良く焼けている。規模は最大のものがSX05で、長さ2.7m、幅2.3mを測り、最小はSX04で、長さ1.3m、幅0.7mの規模である。SX04からは木炭が積み重なって出土した。その他の遺物には土師皿片、及び繩文土器片がある。



第3地点I・II区 全景 西から

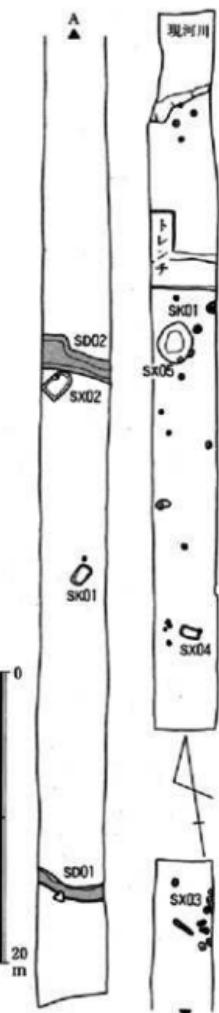
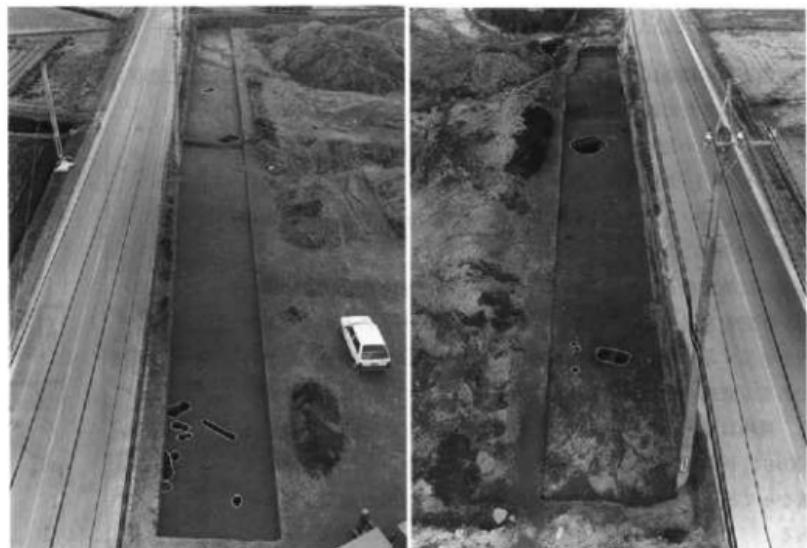


Fig.12 第3地点I・II区
遺構配置図 (縮尺1/400)



I区 全景 東から

II区 全景 西から

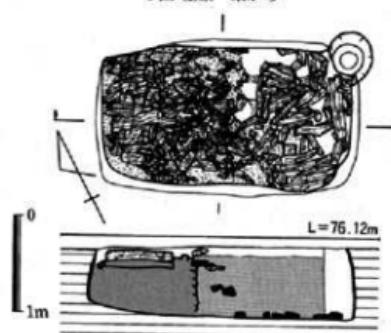


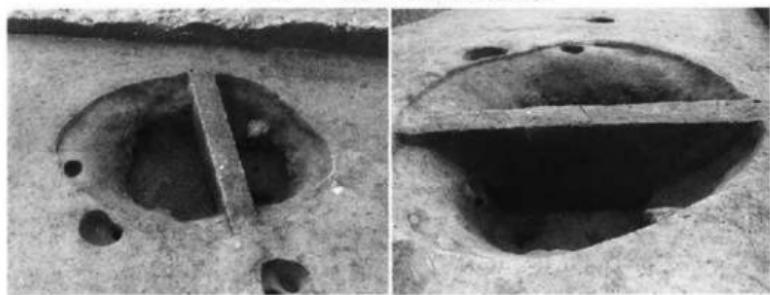
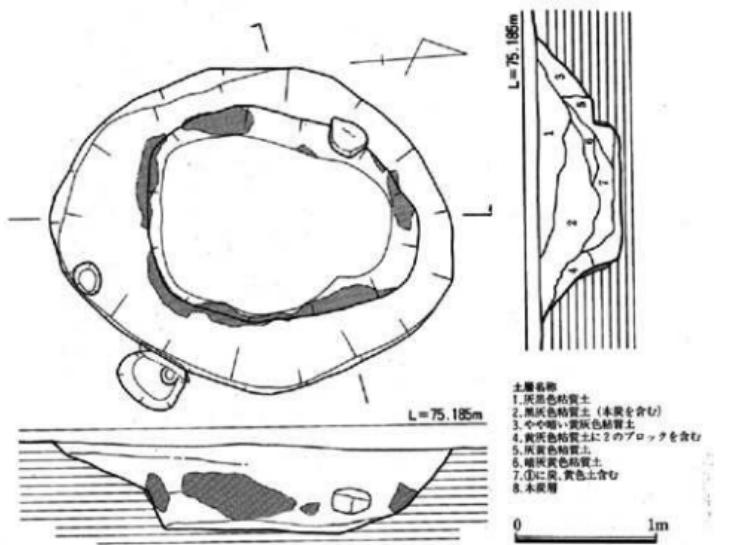
Fig.13 焼土壙SX04 実測図 (縮尺1/30)



II区 焼土壙 SX04 南から

焼土壙 SX04 (Fig.13)

長軸方向をN63°Wとする。平面形は隅丸長方形を、断面形は袋状を呈している。規模は長軸の長さ130cm、短軸の長さ70cm、深さ31cmを測る。東側隅に直径24cmを測るPitが存在する。このPitの深さは40cm以上を測り、底部はSX04の底面より10cm以上深い。SX04の覆土は暗黄灰色粘質土を主体としている。周壁は赤く焼けている。土壙内の北側半分には木炭が充填されている。木炭は直径5~6cm程度の丸木材が多く、長軸方向に伏せて、重ねられていた。厚さ約30cmを測る。



II区 焼土壙SX05 東から

SX05 土層面 北から

焼土壙 SX05 (Fig.14)

平面形は不整橿円形を、底部の平面形は不整隅丸長方形を呈している。土層面で観察すれば、土壙上部が崩壊しており、上面の平面形は旧状をとどめていない。土壙下部の周壁には焼けた部分が残っており、厚さ2cm程に達している。覆土は黒灰色粘質土を主体としている。長軸方向を略北方向にとり、土壙上面の長さ270cm、幅230cm、深さ64cmを測る。焼土壙の周壁遺存部分の長さ約200cm、幅約155cm、深さ30cmを測る。炭化物層以外に木炭の出土はない。

(5) 第4地点 I・II区 (13-8田)

この調査区は田面の地下げに伴うもので、調査区が2面に股がるため、西側からI・II区に地区分けを行った。この2地区の間には水路が東方に流下している。I区では焼土壙1、土壙1、2区では溝状遺構3条を検出した。I・II区の間では河川跡遺構が存在し、この上に現水路が乗っている。河川跡遺構は現水路とほぼ同一位置にあって、多少の蛇行による位置のズレがあるものの、現水路の旧状を示すものと考えられる。第1地点ではこの旧河川跡に入れたトレンチから白磁碗、土器器皿等が出土しており、近世、現代的要素は認められない。現在の水路には護岸状の石積みが存在するが、これは近世的な要素であろう。焼土壙SX01は削平のため遺存状態は良好ではない。長さ105cm、幅80cm、深さ50cmを測る。周壁は余り焼けておらず青く変化している。底面にわずかに炭化物層が存在した。遺物の出土はない。3条の溝状遺構は幅



第4地点 I・II区 全景 東から



I・II区間の水路石垣 西から

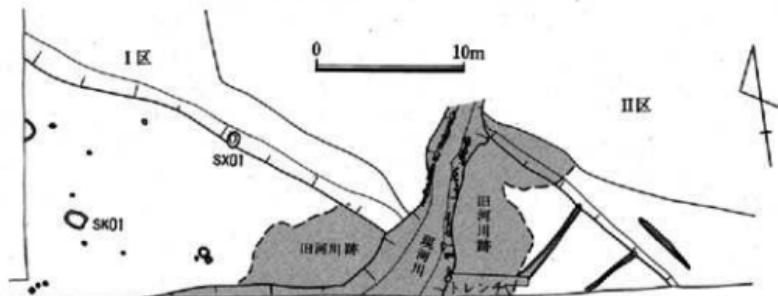


Fig.15 第4地点 I・II区 遺構配置図 (縮尺1/400)

(6) 第5地点 (13-7・8田)

東西に長い調査区で、標高約77.30mを測る。遺構面は黄褐色粘質土である。調査区の東端には旧河川跡(現水路)の肩が表出している。

遺構は土壙2、焼土壙4、堀立柱建物1を検出した。土壙SK01は中央に小Pitを設けており、平面形は隅丸長方形を呈する。長さは95cmを測る。焼土壙は平面か隅丸長方形を呈するものと、角がなく楕円形に近いものがある。長さは1.2~1.5mの範囲に収まり、小型の焼土壙に属する。断面形が逆梯形を呈するものはSX01・03、船底状を呈するものがSX02・04である。SX03の底面には直径5cmの木炭が存在した。SX01・02・04の下層には木炭を含んだ層、もしくは炭化物層が存在する。いずれも周壁の一部に焼土壁が遺存している。SX05は炭化物を含んだ層が存在するが、焼土壁が無いため、ここでは焼土壙のグループから除外する。北壁に沿って最大径60cmを測るPitが存在する。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ約1.2mを測る。土壙・焼土壙からの出土遺物は少なく、時期比定ができない。他にはPitから縄文土器片が出土している。



第5地点 全景 西から

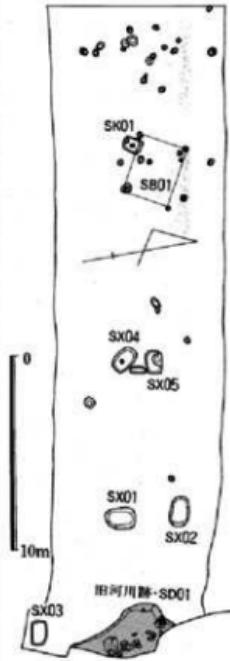


Fig.16 第5地点 遺構配置図
(縮尺1/300)



焼土壙SX01 東から



焼土壙SX01 土層面

(7) 第6地点

東西方向に細長い調査区で、標高約76.7mを測る。棚田の境界に立地するため、3条の地割り溝が存在する。現状の田面にはこの溝は存在しておらず、溝の中より古伊万里片が出土していることから江戸時代の地割溝と考えられる。焼土壙はSX01のみである。平面形は上面の壁崩壙のため不整長方形を呈する。

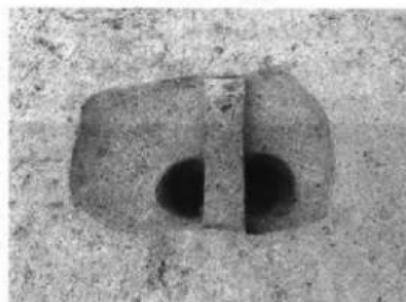
底面は隅丸長方形で、周壁には焼壁を残こし

ている。断面形は

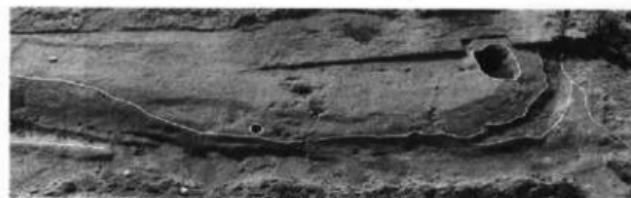
逆梯形である。長さ約1.8mを測る。

底面に木炭層が存在する。その他に出土した遺物はな

い。



土壙SX05 北から



第6地点 全景 北から

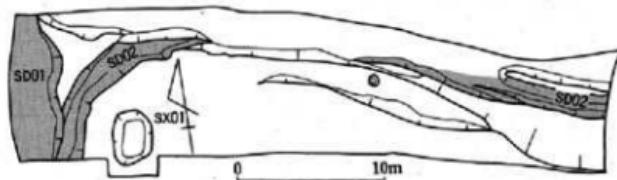
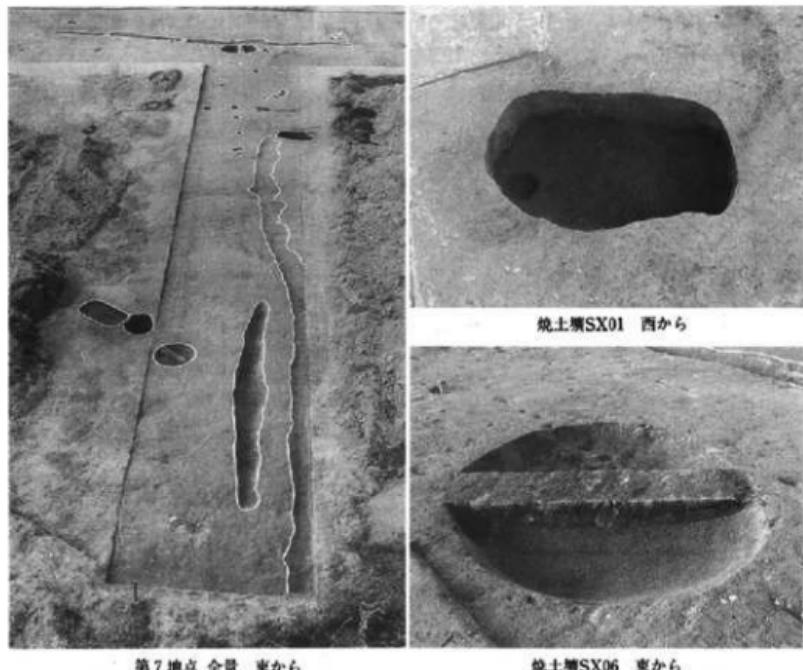


Fig.17 第6地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

(8) 第7地点 (13-6田)

東西方向の細長い調査区で、標高約76.7mを測る。調査区の東端には水路が存在する。遺構面は黄褐色粘質土で、表土・基盤土の直ぐ下に存在する。遺構は溝状遺構2、焼土壙4がある。溝状遺構は近世の地割り溝と思われる。焼土壙には、平面形が円形のもの、隅丸長方形のもの、不整隅丸長方形の3形態がある。断面形は逆梯形状を呈している。SX02・03からは大量の炭化物が出土した。SX01・03の周壁は焼けているが、SX02の焼壁は不明である。SX02の直径は約1.25m、他は長さ約1.5mを測る。



第7地点 全景 東から

焼土壙 SX06 東から

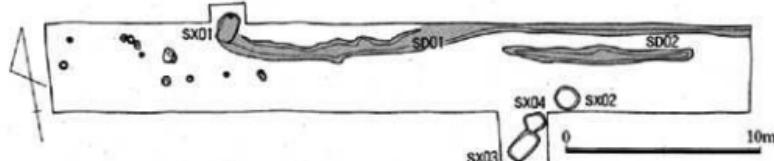


Fig.18 第7地点 遺構配置図 (縮尺1/300)

(9) 第8地点 (13-5B田)

現水路の東側に位置し、標高75.5mを測る。調査区の東側には第3地点のII区が接しており、この調査地点の検出遺構と相関関係にある。地山は黄褐色粘質土、又は砂質土である。遺構面は表土・基盤土の直ぐ下に存在する。遺構は土壙3、焼土壙6及びPitである。焼土壙上面の平面形は隅丸長方形のもの、不整橢円形のもの、不整長方形の3形態があるが、不整形のものはいずれも周壁の崩壊によるものである。周壁には焼壁が遺存している。規模は長さが1.4~1.6mのSX05・06、と長さ1.8m規模のSX01・02がある。SX02の断面形は袋状を呈しているが、他の断面形は逆梯形である。土壙は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ1.6~1.7mを測る。SK03からは炭化物が出土している。

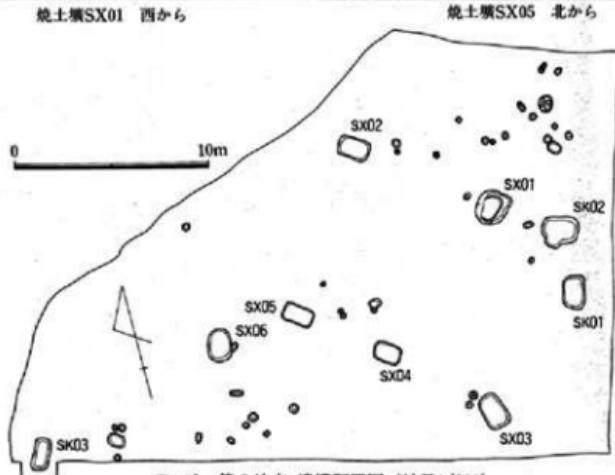
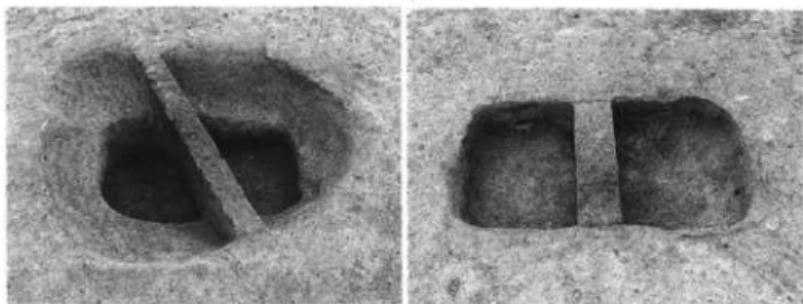


Fig.19 第8地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



第8地点 全景 東から

(10) 第9地点 (13-5 A田)

東西に細長い調査区で、東側は旧河川跡の左岸に相当する。地山は暗い黄褐色砂質土である。標高は約75mを測る。田園の境界地にあって、段下に位置しているため削平が著しい。遺構はPit、焼土壙1、溝状遺構である。焼土壙は境界にかかるため全形は不明。長さは1.6m程度であろう。平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形である。底面には木炭が存在し、一部焼壁が遺存する。



焼土壙SX01 北から

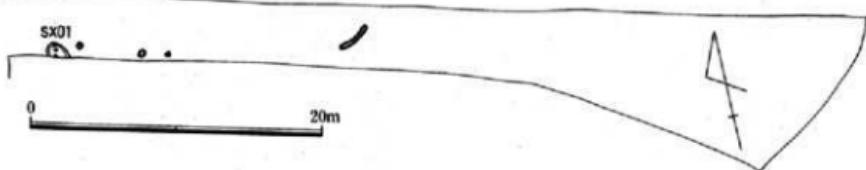


Fig.20 第9地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

(II) 第10地点 (13-3田)

東西方向の調査区で、用水路の西側に位置する。標高は約73.5mを測る。地山は黄褐色粘質土で、風化性が強い。検出した遺構は土塁3、焼土壙1、河川跡である。調査の東半分に東西方向の河川跡が広がっており、この調査区は河川跡を横断している。河川跡の現存幅は約30mで大



第10地点 全景 西から

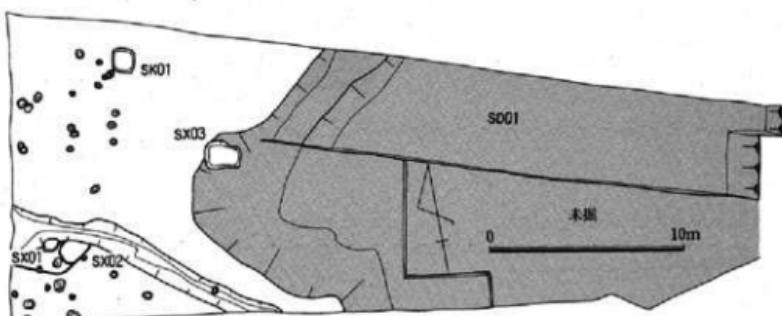


Fig.21 第10地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



焼土壙SX01 東南から

SX01土層面 北西から

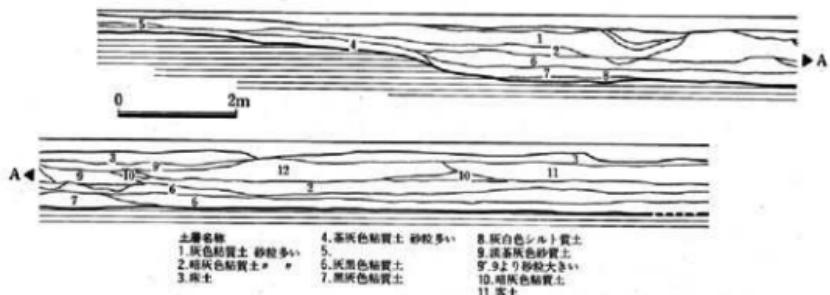


Fig.22 SD01溝断面土層図 (縮尺1/100)

きく蛇行している。断面形は逆梯形を呈し、底面は小礫が厚く堆積し、平坦面を作る。最大の深さは約1mを測る。底面、及び覆土より土師器の糸切り皿、白磁碗片が出土している。土壙SX01-02は平面形が不整円形を呈している。SX02の深さは約1m以上に及び、覆土から繩文土器片が出土している。覆土は灰褐色粘質土である。焼土壙SX03は平面形が不整長方形を呈し、底面は隅丸長方形である。周壁は良く焼けており、長さ1.9mを測る。遺物の出土は無い。

出土遺物 (Fig.23)

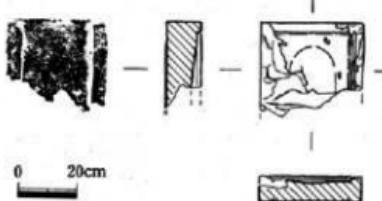


Fig.23 観察測図 (縮尺1/6)

Fig.23はSD01から出土した小豆色
灰岩製硯の破片であり、陸の部分の一部
が残り、海の形状は不明である。側面、
裏面は綺麗に研磨され、陸の部分は使用
により一部が凹んでいる。 (重藤)

(12) 第11地点 (13-2田)

第10地点の東側約30mのことろに位置するが、ここでも河川跡を東端に検出できた。遺構面は黄褐色粘質土、又は灰褐色粘質土であるが、礫群が表出している。標高は約72mを測る。遺構は土壙16、焼土壙2、溝状遺構1、塚1である。土壙は平面形が隅丸長方形を呈するものや不整



塚SX03 遺存状況 北西から



塚SX03 草木の撤去後の状態 北から



第11地点 全景 西から

円形を呈するものの2形態がある。覆土は灰黄色、又は灰褐色の粘質土である。焼土壌は長さ1.8~2.0mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。周壁は良く焼けている。塚SX03は地元では永い間荒平くずれの落武者の墓と信じられてきており、供養が行なわれてきた。直径約2.5m、高さ約1mを測り、平面形は不整円形を呈する。盛土下部には箱形の石組が存在した。

その他の遺構には、土壤内に大石を据え、その回りに小礫を詰めた遺構
(SK07・08) もある。



塚盛土撤去後の状態 西から

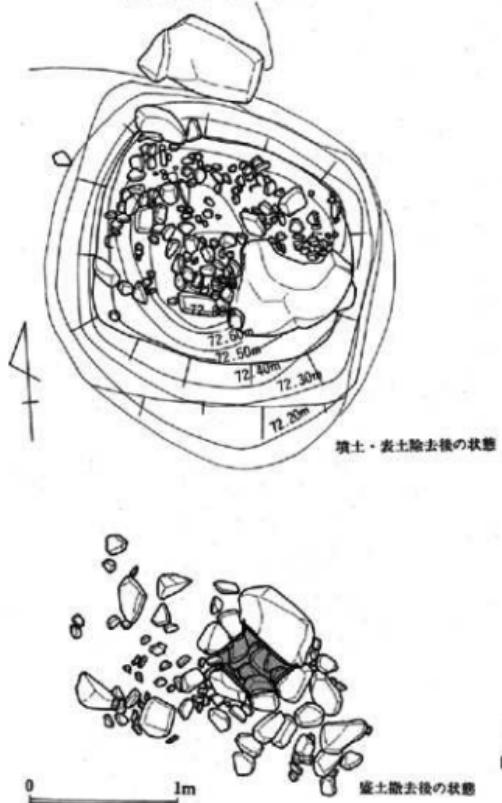


Fig.24 塚SX03 実測図 (縮尺1/40)

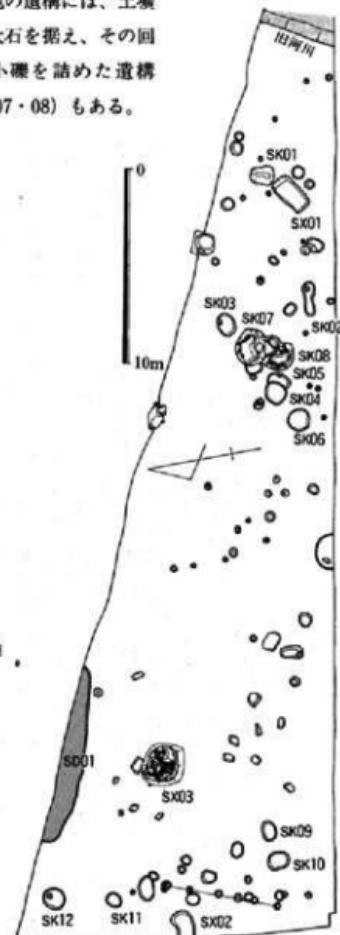


Fig.25 第11地点 遺構配置図 (縮尺1/300)

(II) 第12地点 I ~ IV区(13-1-1・2田、13-2田、2号排水路IV区)

構造物の調査1ヶ所と田面の調査3ヶ所を合せて行った。柵田の境界に位置するため、北側は比高差約0.5~0.7mの段落ちとなり、造構の遺存状態は悪い。標高は段の上面で、約71m、段の下面では約70.5mを測る。造構面は灰褐色粘質土と黄褐色粘質土である。段の下面是削平のため黒褐色砂質土が表出している。段上の灰褐色粘質土は造構面の大部分を占めており、且つ遺物を含んでいるところから整地層と考えられる。地山には礫を多く含んでいる。造構は溝状造構5条、掘立柱建物3棟、櫛1、土壤12、焼土壤13、竪穴状造構4、製鉄造構5、土壤墓1、河川跡1条を検出した。河川跡の上部には軸線を追って現水路が乗っている。河川跡は造構面より緩やかに落ち、断面形は逆梯形を呈する。第1・10地点で検出した河川跡が蛇行して流下するものである。遺物は龍泉窯系青磁、白磁碗、土師器皿、皿が出土する。掘立柱建物は2間×3間規模の建物が2棟、1間×2間規模の建物が1棟である。いずれも主軸は略北方向である。製鉄造構の内、4基は鍛冶炉で、直径50~80cmを測り、平面形が不整円形を呈している。これらは竪穴状造構SX09を切っている。竪穴状造構SX07~09・11は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ4~5m、深さ30~60cmを測る。竪穴状造構の床面はSX08は平坦であるが、他は不整である。遺物は土師器の糸切り皿、白磁碗が出土した。SX07とSX09の境には石垣状の石積みが遺存



第12地点 I ~ IV区第3地点IV区 全景 東から

している。この石積みはSX09の内側に面を揃えており、SX09に伴うものである。SX08の東壁側にも拳から人頭大の礫の転落が認められる。焼土壌は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ1~1.5mの規模と2m前後の規模がある。



河川跡（水路跡）の土層面状態 南から



第12地点 全景 西から



0
20m

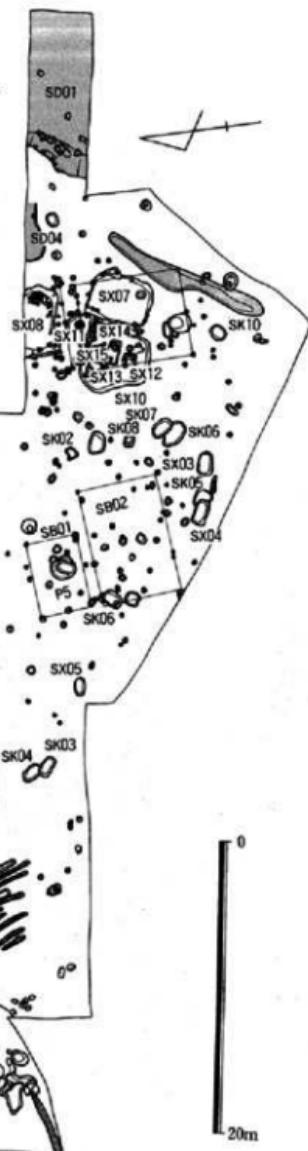


Fig.26 第12地点 I~IV区 遺構配置図 (縮尺1/400)



竪穴状遺構SX07 南から



竪穴状遺構SX08 南から



竪穴状遺構SX09 南から



土壙墓SX03 北から

土壙墓SX03(Fig.27)

削平が著しく、墓壙の遺存状態は悪い。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.58m、幅0.9m、深さ15cmを測る。床面は不整で、木棺等の痕跡は認められなかった。墓壙の中央部の床面に接して竜泉窯系青磁碗I類が2個体、北壁近くから長さ約32cmの小刀1振りが出土した。小刀は銹化著しく、且つ土圧による破損が著しい。

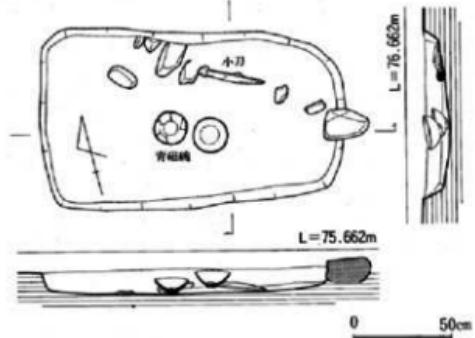


Fig.27 土壙墓SX03実測図 (縮尺1/30)

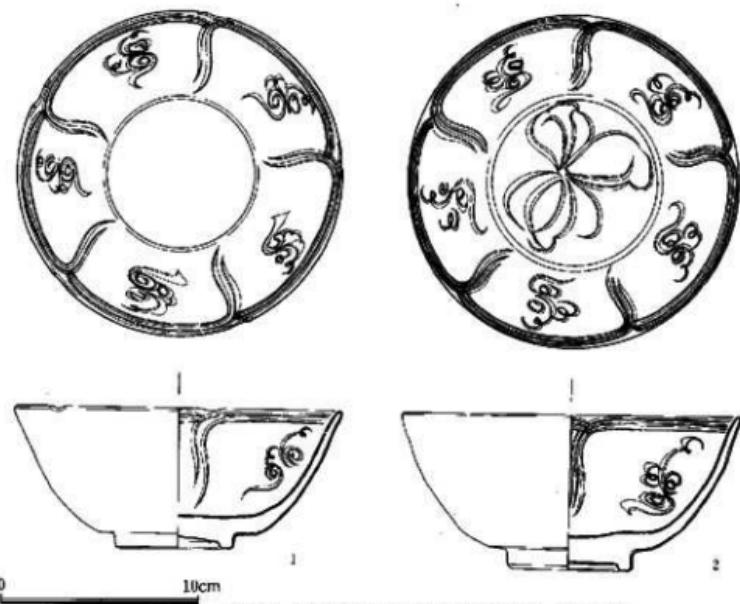


Fig.28 土壙墓SX03出土龍泉窯系青磁碗（縮尺1/3）

出土遺物(Fig.28)

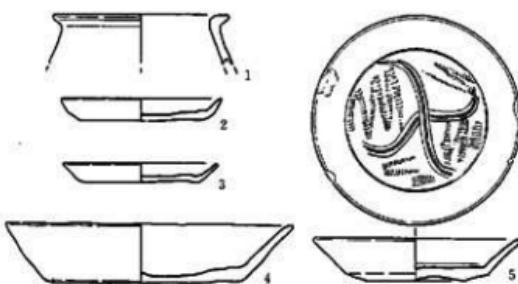
第12地点I～IV区からは、縄文時代、古墳時代の遺物も出土しているが、その中心は中世の遺物である。ここでは、中世の遺物でも特徴的なものをとりあげ説明する。

Fig.28の1・2は、土壙墓SX03から出土したほぼ完形の龍泉窯系青磁碗I類である。1は口径16.5cm、器高7.0cm、2は口径16.8cm、器高7.9cmを測る。両者の内面の片切形の施文は、文様構成・技法とも類似するが、2に見られる見込み部の文様が1ではない。

Fig.29の1～5は、SX09の出土遺物である。2・3は上師器小皿、4は土師器杯で、いずれも糸切底である。2は口径8.0cm、器高1.1cm、3は口径7.8cm、器高1.0cmを測り、図上で復原した。3は口径13.5cm、器高3.1cmを測る。1は青釉陶器壺の口縁部小片であり、復原口径7.0cmである。4は同安窯系の青磁皿である。完形品で口径10.6cm、器高2.1cmである。SX09からは、図示したものはかに上師器の环・皿片、陶磁器の破片多数と若干の調文土器が出土しているが、後者は流れこみによるものと考えられる。

Fig.29の6～11、Fig.30の1～3は構状遺構SD02出土の青磁である。SD02は、古墳時代の遺

SX09



SD02

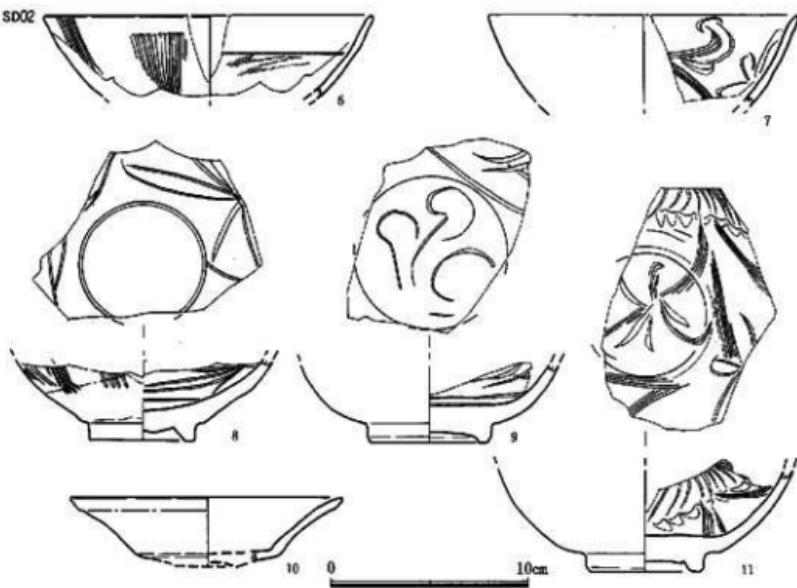


Fig.29 SX09、SD02出土上器実測図（縮尺1/3）

物を若干含むが、主体は中世の遺物であり、そのうちの青磁を図示した。Fig.29の6・8は同安窯系の青磁碗、7・9・10は龍泉窯系の青磁碗である。Fig.29の11、Fig.30の2・3は同安窯系青磁小皿、Fig.30の1は龍泉窯系の青磁小皿である。図示したもの以外のSD02出土の中世遺物には、土師器の环・皿小片、石鍋片、褐釉陶器、白磁の破片が出土している。

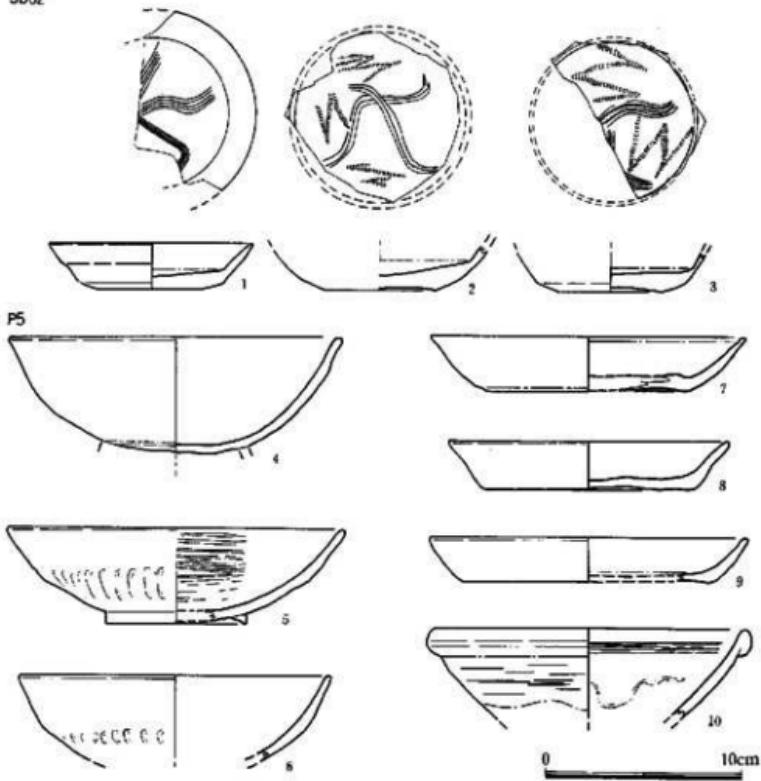


Fig.30 SD02、P5出土土器実測図（縮尺1/3）

Fig.30の4～10はP5出土土器である。4は高台が接合部から失われた黒色土器碗である。口径16.9cmを測る。5・6は瓦器碗で、两者とも体部中間より下半に指頭圧痕が帯状にめぐり、内面がヘラミガキ調整される。5は復原口径17.1cm、器高4.9cm、6は復原口径が15.8cmである。7・8・9はいずれも土師器の環片で、復原して図化した。10は白磁碗IV類の口縁片である。

第12地点の出土遺物は、土師器、陶磁器から考えて、12世紀後半に中心を置くものと考えられる。しかし、図示はしなかったが、断面三角形状の玉縁口縁をもつ、須恵質あるいは瓦質の鉢がある。これは東播系を模倣したものと考えられる。また、鎌蓮介文の青磁碗の小片がある。これらを考慮すると、13世紀にまで遺跡が存続していたと思われる。

(重藤)

(14) 第13地点 (12-3田)

第2地点Ⅲ区の西側に接している。標高約71.80mを測る。地山は暗い黄褐色粘質土であるが、礫が表出している。遺構は土壙とPitである。土壙は平面形が不整長方形又は不整円形を呈しており、遺存状態は悪い。網文土器片が出土。

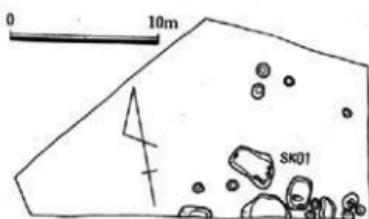


Fig.31 第13地点 遺構配置図 (縮尺1/200)



第13地点 全景 東から

(15) 第14地点 (12-4田)

東西方向に細長い調査区である。第2地点Ⅲ区の西側に接している。標高約73.50mを測る。遺構面は暗い黄褐色粘質土であるが、二次堆積土のため遺構の色別が難しい。遺構は土壙1、溝状遺構1、Pitである。溝状遺構は幅80cmを測り、断面形は逆梯形を呈する。土壙は平面形が隅丸長方形を、断面形が逆梯形を呈する。長さ1.3m、幅80cm、深さ30cmを測る。覆土は暗い灰褐色粘質土である。

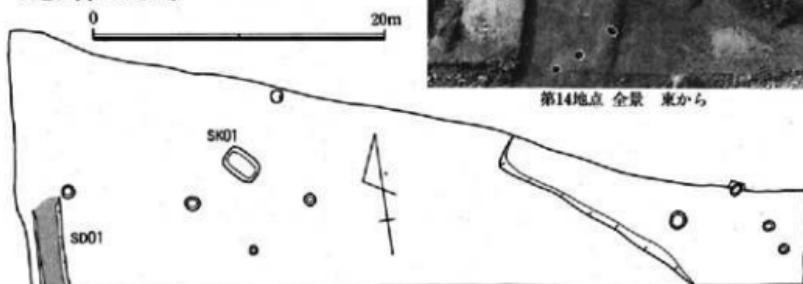


Fig.32 第14地点 遺構配置図 (縮尺1/200)

(16) 第15地点 (12-5田)

第2地点II区の西側に接している。調査区の北側は田圃の境をなし、段落ちとなっている。標高は約74.20mを測る。造構面は汚れた黄褐色粘質土であるが、この面は北側に緩やかに傾斜している。調査区の北半分はこの造構面上部に灰褐色粘質土が堆積していた。造構は溝状造構2、土壤3、焼土壤4、掘立柱建物2、Pit群である。掘立柱建物はいずれも境界地に位置するため全体形は不明であるが2間×2間、もしくは2間×1間程度の規模と思われる。溝状造構SD02は、幅約1mを測り、断面形は逆梯形を呈している。北側は消失している。第14地点のSD01と同様に近世の地割り溝であろう。溝SD01は幅60cmを測り、断面形は逆梯

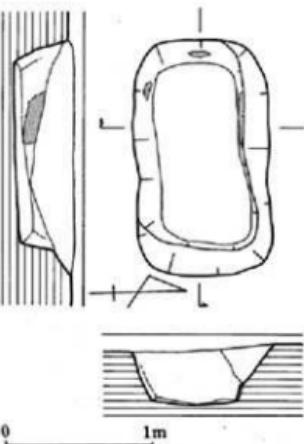
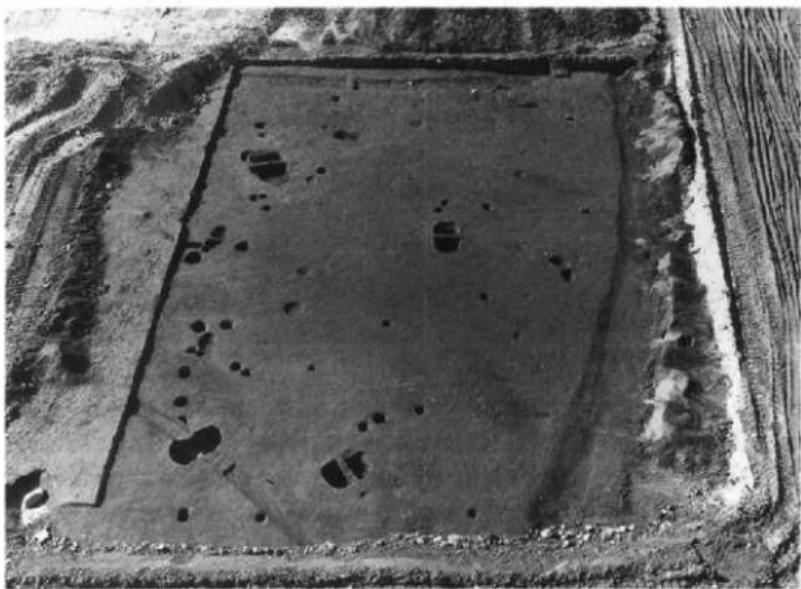


Fig.33 焼土壤SX04 実測図 (縮尺1/40)



第15地点 全景 東から

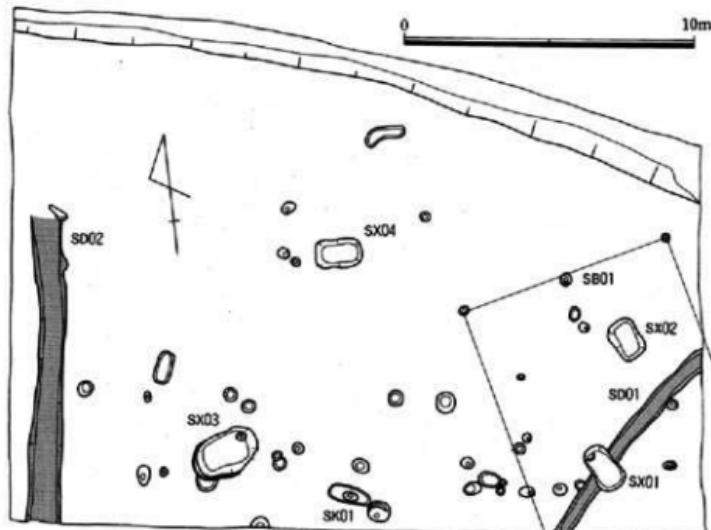
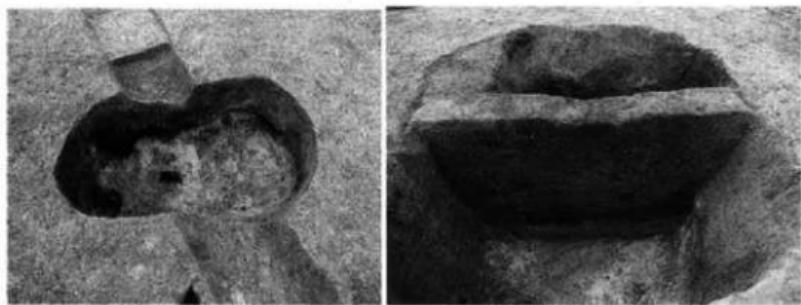


Fig.34 第15地点 遺構配置図 (縮尺1/200)



焼土壙SX01 西から

焼土壙SX02 土層面 南から

形を呈している。覆土から土師器の糸切り皿等が出土した。焼土壙はいずれも周壁が赤く焼けている。平面形は隅丸長方形と不整長方形がある。断面形は逆梯形を呈しているが、SX02は一部の壁が袋状を呈する。いずれも最下層に炭化物層、又は木炭の粉末層がある。SX03・04の木炭層は厚く堆積している。規模はSX01・02・04が長さ約1.5m、SX03は長さ約2.3mを測る。いずれも焼土壁は厚くない。SX01の北側小口部分の床面には直径25cm、深さ15cmのPitが設けられている。焼土壙からは遺物は出土していない。

(17) 第16地点 I ~ IV区 (12-6 A~C・7A・B田)

第2地点の西側に接している。南北に長い調査区で、三枚の田面に股がっている。3段になっており、標高は南側の面から順に標高約76.6m、約75.5m、約74.5mである。遺構面はやや暗い黄褐色粘質土であるが、部分的に黒褐色砂質土や砂礫層が表出している。遺構は土塙22、焼土塙23、掘立柱建物1である。土壤の平面形は隅丸長方形・不整長方形・不整円形等を呈している。長さ1.1~2mを測る。覆土は灰褐色粘質土を主体としている。焼土塙

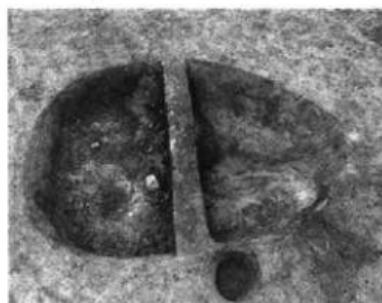


第16地点 全景 北から

0 20m



Fig.35 第16地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

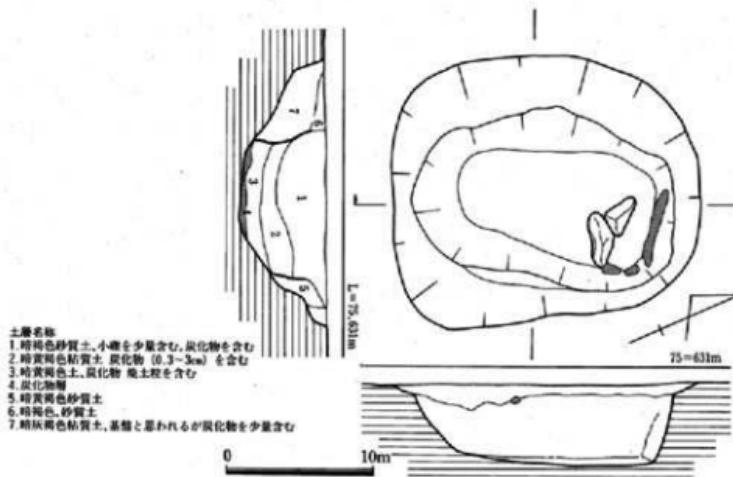


焼土壙 SX17 東から



焼土壙 SX17 土層面 北から

の平面形は隅丸長方形・不整長方形・椭円形・不整円形の各形態がある。規模は長さ1.5m以下のもの、長さ1.8m前後のもの、長さ2m以上の3グループに分けられる。SX02は平面形が不整円形を、断面形は浅い皿状の形状をしているが、この焼土壙のみ他の焼土壙と形状を異にする。底面には炭化物層が厚く堆積していたが、焼壁部分はわずかである。他の焼土壙は断面形が逆梯形を呈し、周壁が赤く焼けしており覆土の最下層又は下層に炭化物層が存在する。焼土壙SX22は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ約70cmを測る。削平のため遺存状態は悪いが、底面には木炭と炭化物がぎっしり詰っていた。又、壁も焼けている。第3地点の焼土壙SX04と同様な機能をもつものと考えられる。



(18) 第17地点 (12-8田)

第2地点I区の西側に接し、東西に長い調査区である。標高は約76.5mを測る。遺構面は黄褐色粘質土と灰褐色粘質土である。遺構は土壙1、焼土壙1、掘立柱建物1棟である。掘立柱建物の規模は2間×3間と考えられる。焼土壙は平面形が隅丸長方形を呈し、長さ2.45m、幅1.65m、深さ60cmを測る。隅丸長方形としては最大規模である。焼土壁は薄い。



第17・18地点 全景 北から



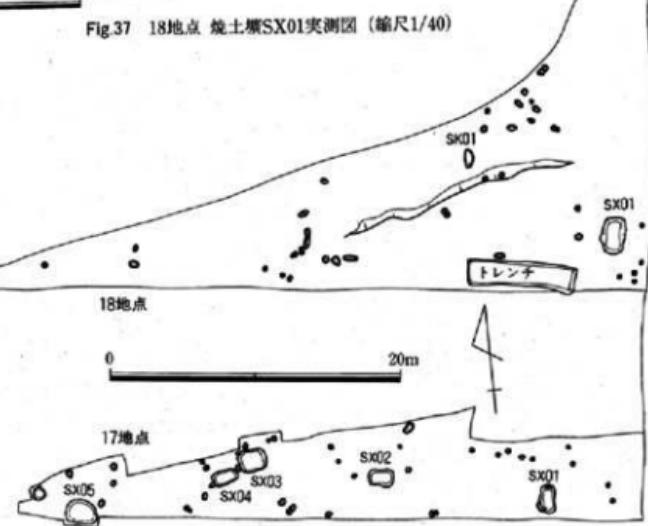
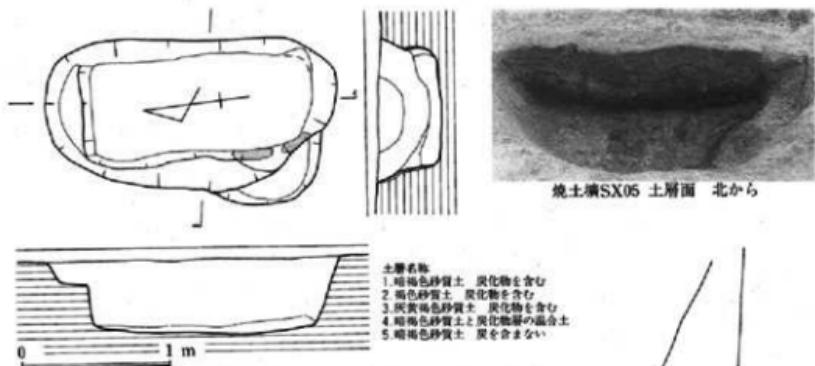
焼土壙SX03 北から



焼土壙SX01 南から

(19) 第18地点 (12-9田)

第17地点の南側に位置し、東西に細長い調査区である。標高は約77mを測る。遺構面は黄褐色又は、灰褐色の粘質土である。遺構は焼土壙4、Pit群である。焼土壙は平面形が隅丸長方形、又は橢円形状を呈しており、断面形はいずれも逆梯形である。規模は長さ1.8m前後のものと長さ2m以上の2形態がある。SX01の壁の一部は直立又は袋状を呈し、良く焼けている。



(20) 第19地点 (12-10田)

調査区は第1地点II区の北側に接している。遺構面は黄褐色粘質土、又は灰褐色粘質土である。遺構面は北側へわずかに傾斜している。遺構は土壤2、焼土壤2、Pit、近世の地割溝1条を検出した。近世の地割溝は第1地点II区の溝SD06につながる。焼土壤は2形態があり、平面

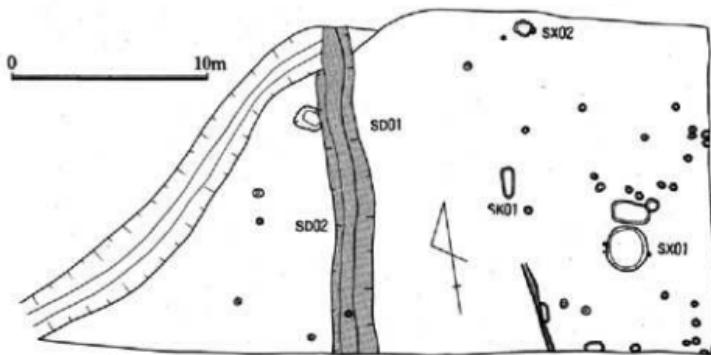
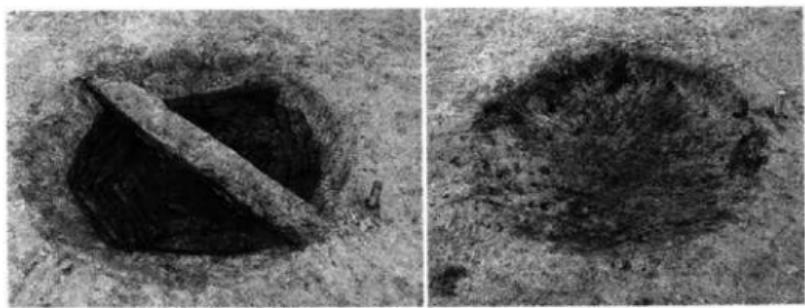


Fig.39 第19地点 遺構配置図 (縮尺1/300)



第19地点 全景 東から



焼土壙SX01 北東から

SX01の堀り方状態 北から

形が隅丸長方形と不整円形である。SX02は長さ1.4mを測り、周壁は良く焼けている。焼土壙SX01は第16地点の焼土壙SX02と共通する機能と考えられる。

焼土壙SX01 (Fig.40)

平面形は不整円形を、断面形は逆梯形を呈する。直径は約2.1m、最大の深さ25cmを測る。削平を受けているものの、遺存状態は良好である。周壁は全体に焼けている。壙内には直径5~10

cmの木炭が横積みされているが、これらは同一方向ではなく環状に廻るように積まれている。最大の長さの木炭は60~70cmを測る。

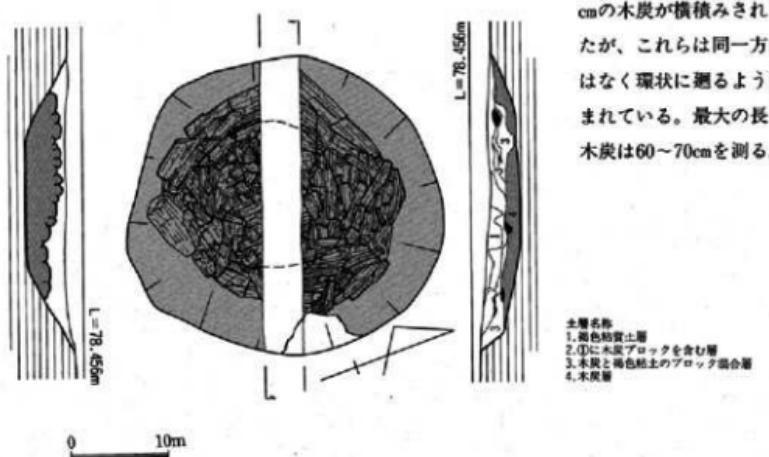


Fig.40 焼土壙SX01 実測図 (縮尺1/30)

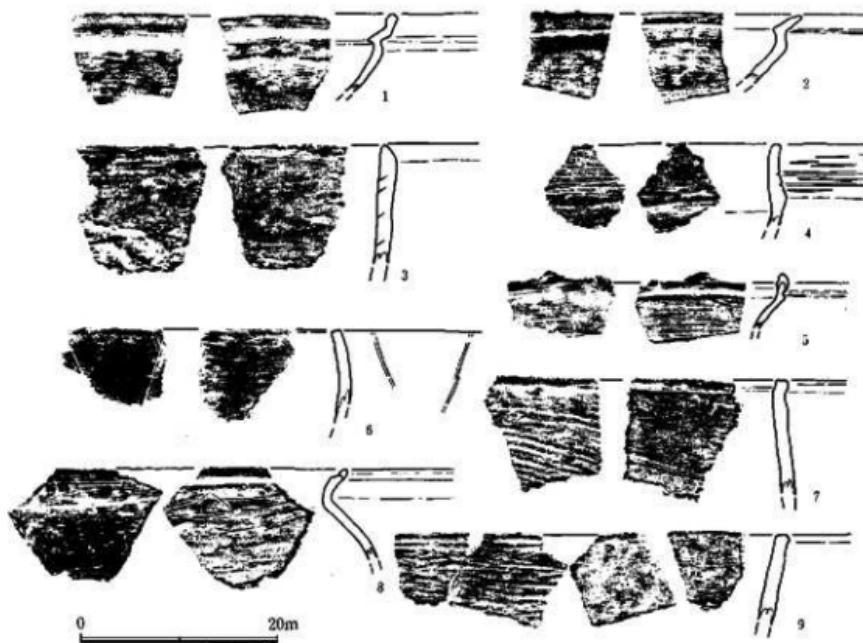


Fig.41 その他の出土遺物実測図 (縮尺1/3)

(2) その他の出土遺物 (Fig.41)

当遺跡の主体は中世であるが、明確な造構は少ないものの縄文時代の遺物も出土している。Fig.41は縄文式土器のうちで特徴的なものを図示した。1～4は第18地点出土のもので、1がP-2、2がSX04、3・4が造構面から出土した。5～8は等12地点の出土遺物で、5がSX07、6・7がSX08から出土した。9は第16地点の造構面から出土である。9はSK10出土のものである。

1・2・5・8は、浅鉢形で、内外面ともに丁寧にヘラミガキされる。3・4・9は深鉢形である。3は内外面ともにかなたテ調整で、内面には粘土紐の接合痕を残す。4は口縁部に文様帶をつくり、そこに横方向の細な沈線を施文する。7・9の外面は貝殻条痕が見られる。5は体部が丸くなる鉢状の器形と考えられるが、口縁近くには沈線を用いて施文している。

いずれも小片であり、時期について、正確な判断を示すのは困難であるが、縄文時代晩期初頭～前葉を中心とする土器であろう。

(東藤)

第4章 谷口遺跡調査報告



早良区大字鷺山字谷口

(1) 谷口遺跡調査の概要

本調査は、鷹山地区県営圃場整備事業に伴うものである。以下、平成元年度の事業対象地区のうち谷口工区5.6ha内で行った谷口遺跡の調査について報告する。

当該地は背振山系より北流する椎原川右岸の段丘上に位置する。標高128mから106mという傾斜地形を形成しており、石垣によって区画された水田が築かれている。貞觀年間には、熊野比丘尼が^{のひみつ}樋溝を開拓したといふ伝承が残っており、現在でも水田地帯の中央の谷部にこの溝が流れる。この溝は椎原川から引かれた灌漑用水で、下流の広範な地域を潤している。また、山岳信仰の中心であった背振山の北麓にあたり、関連する地名、伝承が多く残されている。中世における耕地の開発や、小領主層勢力の動向等を知る手掛りとしての文献史料も残っている。それによれば当該地周辺は「蓬名館」に比定されており、長禄4年(1459年)にはこの付近が水田として開発されていたことがわかる。^注

以上のように谷口地区では、中世以降の耕地開発を物語る遺跡の存在が予想され、平成元年5月より試掘調査を行った。原則的に各田面に1ヶ所試掘を行い、比較的広い田面に対しては等高線と平行に、狭い田面が続く場合には等高線に対して直角に試掘トレントを設定した。

(Fig.42) 重機、人力を用いたが、湧水の多い谷部では行えなかった。そして、深く削平を受けた個所を除く全域に焼土壙等の遺構を検出し、縄文、古代から中世、近代にかけての遺物を採集した。この結果をふまえ、県、市の農政との協議を重ね、盛土工法により調査対象面積を当初3haあったものを2.3haに縮小した。本調査は永久構造物と切土施工の田面に限って実施し、7月1日より2月28日まで行った。



試掘トレント

本調査は構造物の部分から行い、工事の進行状況と調整して順次行った。全体に、遺構面までの堆積は薄い。水田耕作土直下には厚さ10~20cmの砂を含む、古い水田層と思われる灰色土が堆積する。遺構面は、おおむねこの灰色土を除去した黄褐色の面である。遺構は旧道、樋溝、焼土壙81基、土壙50基等を検出した。この他、現在田面を区画する石垣を、水田開発の歴史を物語る構造物として、写真撮影による記録をとった。

今回各調査地点を16地点にまとめて報告を行う。ただし樋溝に関しては、長大で各調査地点にまたがるため、別個に取り扱った。

注) 吉良国光「背振山の所領支配と村落一揆前早良郡鷹山を中心として」
『九州史学』特集号 1987年



Fig.42 谷口遺跡試掘調査及び調査区位置図（縮尺1/3000）

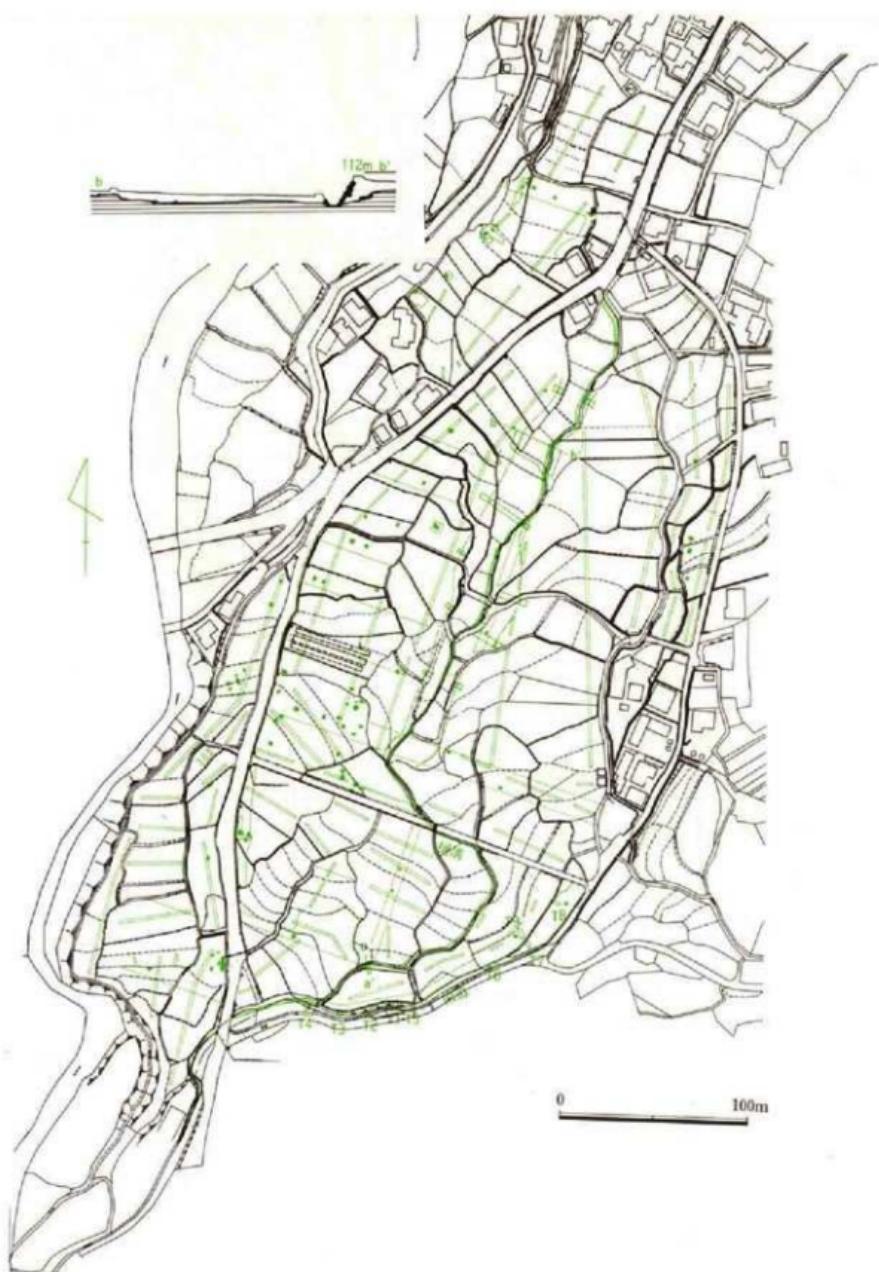


Fig.43 燃土壤の分布及び旧道、樋溝位置図（縮尺1/3000）

Tab. 4. 谷川道路調査地点一覧

地點名	構造物	面積	計画面積	調査面積	期間
7	支線	20号道路	1,170m ²	1,170m ²	89.10.23~89.12.7
1,15	支線	21号道路	3,930m ²	1,350m ²	89.7.1~89.2.2
16	支線	21-1号道路	654m ²	78m ²	90.2.6~90.2.20
2	取付	2号道路	168m ²	168m ²	89.11.24~89.12.6
4,5,7~10,12,13	支線	1号用水路	946m ²	466m ²	89.11.22~89.12.2
6	支線	2号用水路	580m ²	250m ²	90.2.9~90.2.17
16	支線	7号用水路	452m ²	86m ²	90.2.6~90.2.20
1,15	支線	1号用排水路	1,254m ²	520m ²	90.2.6~90.2.2
16	支線	3号用排水路	410m ²	48m ²	90.2.6~90.2.20
7	幹線	2号排水路	1,016m ²	284m ²	89.10.23~89.12.7
14	支線	7号排水路	1,036m ²	540m ²	89.12.19~90.1.29
3	支線	8号排水路	560m ²	204m ²	89.11.22~89.11.30
16	田面	27-2	1,820m ²	380m ²	90.2.6~90.2.20
16	田面	27-3	1,203m ²	50m ²	90.2.6~90.2.20
16	田面	27-5	1,700m ²	219m ²	90.2.6~90.2.20
13	田面	28-2	2,000m ²	424m ²	90.1.31~90.2.6
12	田面	28-3	2,000m ²	452m ²	90.1.30~90.2.7
11	田面	28-4	2,000m ²	25m ²	90.1.30~90.2.7
10	田面	28-5	1,061m ²	425m ²	89.12.19~90.1.13
9	田面	28-6	3,258m ²	882m ²	89.12.19~90.1.5
8	田面	28-7	2,719m ²	454m ²	89.12.8~89.12.23
7	田面	28-8	2,943m ²	837m ²	89.12.5~89.12.18
15	田面	30-4	2,000m ²	68m ²	90.1.29~90.2.2
15	田面	30-5	2,000m ²	263m ²	90.1.29~2.2
15	田面	30-6	2,000m ²	164m ²	90.1.29~2.2
15	田面	30-8	826m ²	73m ²	90.1.29~2.2
5	田面	31-1	764m ²	130m ²	89.11.17~89.11.30
5	田面	31-2	1,500m ²	343m ²	89.11.17~89.11.30
2	田面	31-4	2,613m ²	138m ²	89.11.24~89.12.8
2	田面	31-5	1,678m ²	515m ²	89.11.24~89.12.8
1	田面	32-3	1,422m ²	232m ²	89.7.1~89.11.16
1	田面	32-4	1,100m ²	116m ²	89.7.1~89.11.16
1	田面	32-5	1,200m ²	63m ²	89.7.1~89.11.16
1	田面	32-6	599m ²	21m ²	89.7.1~89.11.16
7	田面	33-1	900m ²	210m ²	89.10.23~89.12.7
6	田面	34-2	1,987m ²	525m ²	90.2.9~2.17
6	田面	34-3	1,761m ²	697m ²	90.2.9~2.17
6	田面	34-4	2,931m ²	873m ²	90.2.9~2.17

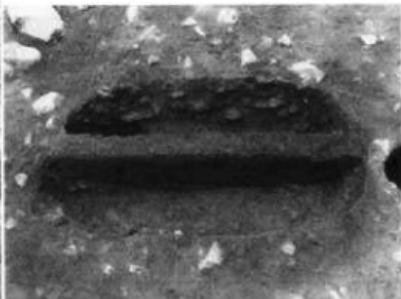
(2) 第1地点

調査対象地北側の山裾部に位置する。現行の舗装道路に沿って約2m下に石垣によって築かれた旧道が走る。調査は面的に広げ得た第1-I地点の他は、主にこの旧道の調査を行った。

1-I地点は耕作土直下の灰色土を除去した黄褐色砂質土上に遺構を検出した。全体に大小の礫が露出し、かなり削平を受けたものと考えられる。その礫中に焼土壙1基と土壙2基、そしてピット群を検出した。遺物の出土は少ない。遺構検出時には近代染付片を探集した。各ピットからは、土師皿片が出土している。小片のため詳細は不明である。明確に近世に下るものはない。また、規則的に並ぶものはない。



第1-I地点 全景 北から



焼土壙SK01 南から

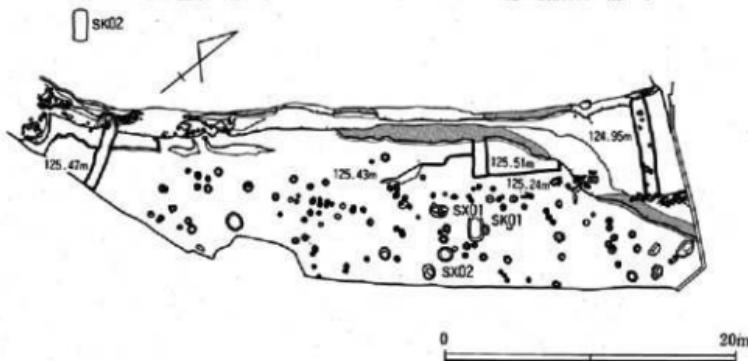


Fig.44 第1-I地点 遺構配置図 (縮尺1/400)

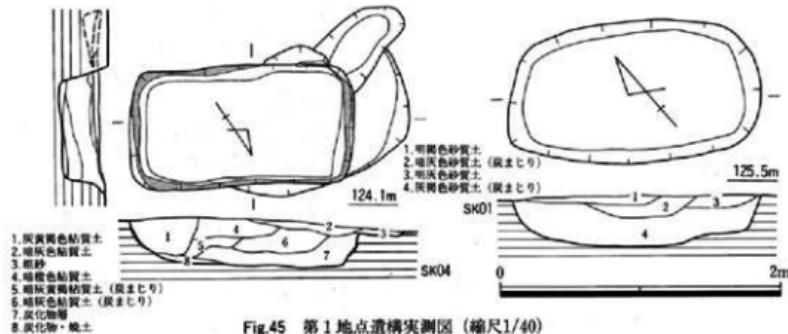


Fig.45 第1地点遺構実測図（縮尺1/40）

I - II 地点の田面では、焼土壙 1 基を検出した。この SK02 は長方形を呈し、通常の焼土壙と同様だが、西側角に浅い溝状の窪みを持つ。焼土壙の性格に関連する何らかの施設と考えられる。また、I - III 地点でも焼土壙を 1 基検出している。

旧道は谷口工区北側のバス通りから工区東側の集落の西を通り、第1地点に沿って板屋峠に至る道へ続く。現在でも一部使用されており、石垣で補強される。調査は表土の除去、石垣の清掃を行い、9本のトレンチを設け、土層の観察を行った。第1 - I 地点では田面調査区の西端に石垣が並ぶ。たびたび水害の影響を受ける地点であるためか、積み代えが行われており、



第1地点 全景 西から

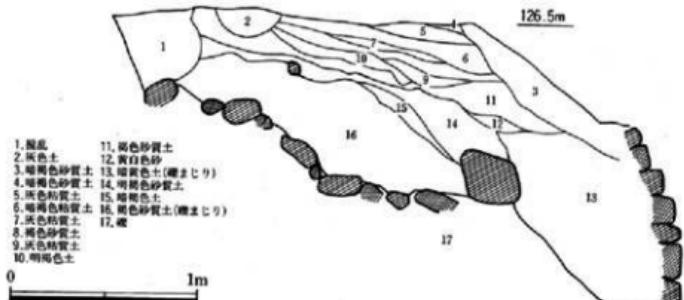


Fig. 46 第1地点トレンチT3西壁土層図 (縮尺1/30)



割石、野石等数種類の石が用いられている。I - II地点では大小の野石を乱積みした石垣が築かれている。崩壊した個所には裏込めの10~40cm大の礫が露出する。I - III地点は石垣が残っていない個所が多い。Fig.46に第3トレンチの土層を図示した。旧道は礫、砂質土の互層、小礫による裏込め、そして石垣の隙で築かれている。この旧道はI - III地点の西端で石敷きの登り口(右図版)が築かれ、現行の舗装道路に重なり、吸収される。

トレンチ内の遺物の出土は少ない。土鍋、土師皿の小片等の中世遺物が多い。伊万里系の染付片も少量であるが出土した。

遺物は主に、石垣清掃時に石垣の表面から多く出土した。時期幅が広く中世から近代に至る。1 - 11は備前系の陶器である。1は変形土器で外面胴部および内面頸部に灰釉を施す。2は土



旧道登り口部分 北から

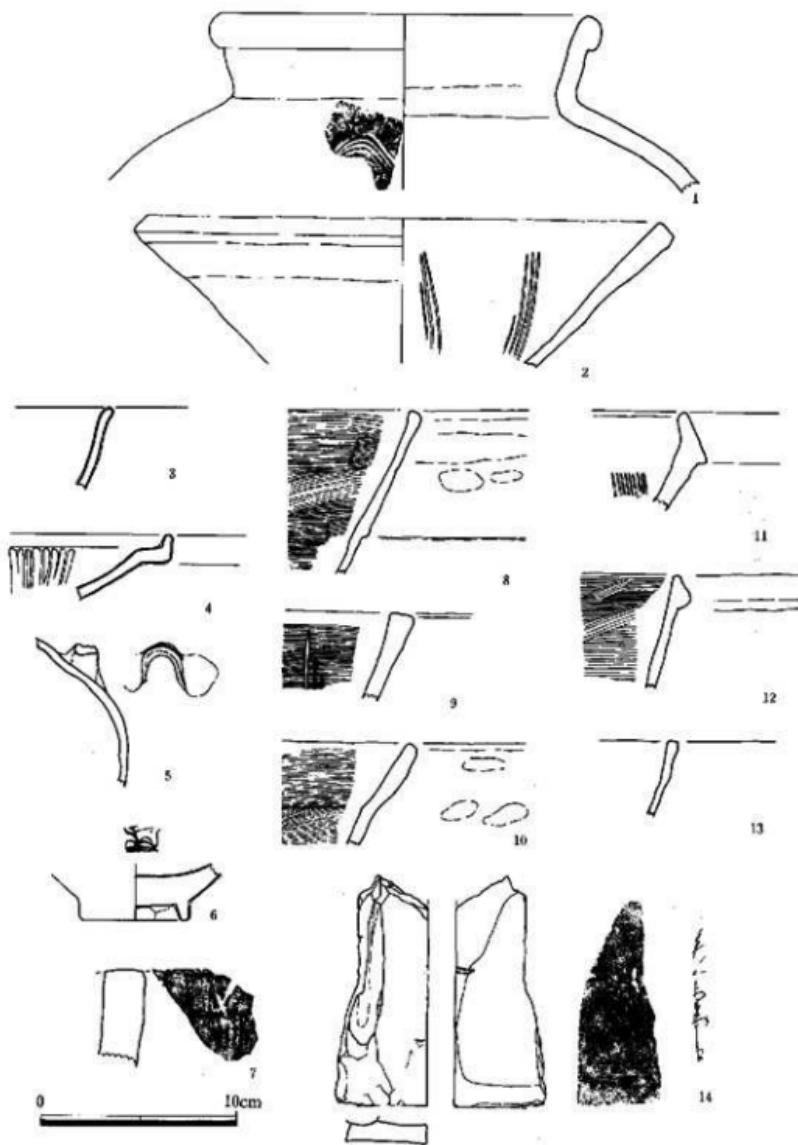


Fig.47 第1地点出土造物実測図（縮尺1/3）

師質のすり鉢である。内面には、やや右斜めの方向のすり目を持つが、ごく浅い。内面は刷毛、外面はナデ調整をほどこす。3～6は青磁である。4は口縁を跳ね上げ、内面に菊弁を陰刻する。5は四耳壺の肩部で淡い緑色の釉がかかる。6は碗の底部で見込みに花文を陰刻する。貢入が著しく、高台内は無釉である。7は滑石製石鍋片で、再加工を施す。やや灰色を帯びた茶褐色を呈し堅い。8・9・10・12・13は土鍋である。いずれも土師質で外面にススが付着する。8は外面口縁下に段を持ち、10は口縁部内面で稜を持つ。12は外面に突帶を持ち、口唇部を取りする。9は土師質のスリ鉢で口唇部に強いナデを施し、内面にはすり目がみられる。13は土師質の土鉢で外面にススが付着する。14は石製硯である。やや緑色を帯びた灰色を呈す。石材は頁岩である。欠損しており、全形は不明だが長方形を呈すと考えられる。表面が剥げた面には、よく擦れた溝がある。その反対の面には、ごく細い線刻がみられる。1は第10トレンチ、12が第2トレンチ、他は石垣の表面および表土から出土した。この他、近世陶磁器、鐵滓等が出土している。

(3) 橋溝



橋溝全景 北より

谷口遺跡中央の谷部を縱断し、石垣によって区切られた溝が走る。この溝は樋または橋溝と呼ばれ、貞觀年間に熊野比丘尼が築いたという伝承を持つ。溝は椎葉川の約450m上流に築かれた樋堰手と呼ばれる堰で取水し、谷合に屈削された溝を通り、第1～IV地点に至る。溝を流れる水は、谷口工区内の水田のみでなく、さらに下の小ノ原、会田などの扇状地形上に位置する水田をも潤す。この地域の水田開発において、欠かせない存在である。

調査は溝が長大であるため特に地点を設けず、各地点を調査した際に順次上流から行った。まず石垣を清掃し、測量、写真による記録をとり、数ヶ所トレンチをあけて土層確認を行った。上流から記述する。

現在第1～IV地点でコンクリートで固められた溝は、1～III地点西端に石で築かれた出水口を1mほどおち、石垣で築かれた水路を流れる。

(大貢図版) この出水口は、現在コンクリートで補強されているものの、根石に2m大の巨石

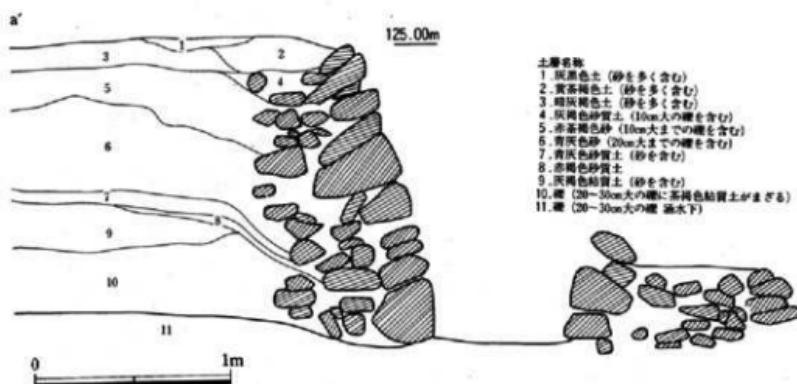


Fig.48 桶溝トレンチ土層図 (縮尺1/30)



桶溝トレンチ土層 (a-a')

桶溝取水口 北西から

を用いて積み上げており、最近のものではないと思われる。また4m東には旧道の登り口があり、道が出水口を避けていた可能性もある。

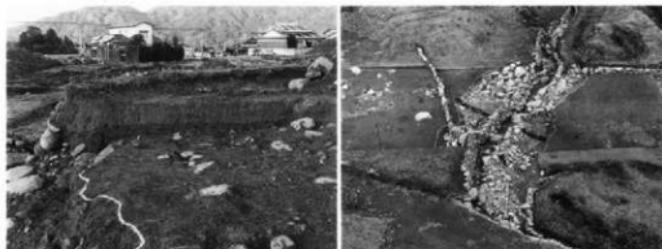
a-a' (Fig.43) は第2地点調査時、石垣にトレンチを設けた。(Fig.48、図版) この個所は最も石垣の残りが良く、高さ1.5mを測る。自然石を積み重ね、裏込めに10~50cm大の礫を詰める。7層は灰色の粘質土で、石垣を現在のように築く以前の水田層と考えられる。その上の6層は多くの礫を含む砂質土で、土砂崩れ等で埋まった可能性もある。いにせよ現地形は、人の手により水田が築かれた結果形成された景観である。遺物は少なく、6層で土師質の土器小片が出土したのみで詳しい時期の決め手にはならない。

第7地点では、溝を区切る石垣が調査区を横断する。(66頁図版) その両側には黄褐色砂質土の地山からの落ち込みが検出された。落ちの内には大小の礫が散乱し、幅7mの河川が石垣により1mに縮小されたことがうかがえる。石垣の裏には水流により物が流れ込みやすく、裏込めの



第5地点 横溝石垣 北から

第7地点 横溝石垣 北から



第14-III地点 横溝段落ち 南から

第7地点 横溝石垣

遺物では時期を断定できない。遺物自体少ないが、左岸の埋土中より大正時代のコインが出土している。

第14地点では10本のトレーナーを人力、重機により開け、谷部の段落ちを確認した。第14-IV地点では人力でトレーナーを拡張した結果、幅17.5mの谷部を検出した。(Fig.43) この谷部は、丁度溝左岸に設けられた小区画の水田部分にあたる。この水田は黄褐色の客土の上に築かれ、溝の石垣を築くことで開田し得たものである。この客土からは、瓦質の土鍋の他、近世の染付片が出土している。また右岸最下層の礫層からは明治期の染付片が出土している。この他、重機により両岸にトレーナーを設け、段落ちを追い、Fig.43のように谷部を復元した。以上の調査の結果、溝の石垣は水田の拡張に伴い、谷を狭めた結果形成されたものと考えられる。

(4) 第2地点

第2-I地点は浅い谷部の西側に位置する。南から北に傾斜する礫群に灰黄褐色砂質土の整地層がかぶり、平坦面を形成している。整地層からは土師器皿、青磁片等の小片が出土した。

焼土壙1基、土壙1基、溝1条とPitを検出した。土壙(SX-01)はレンズ状で浅く、灰茶褐色土を埋土とする。溝はSX-01と同じ埋土で、断面V字形で他の水田に伴う溝とは異なる。Pitは柱窓を持つものが、1.2m間隔で4つ並ぶが広がらない。北側、東側には石垣を配すが1m大の巨石を多く用い、やや特異である。

第2-II地点では、特に遺構を検出しなかった。

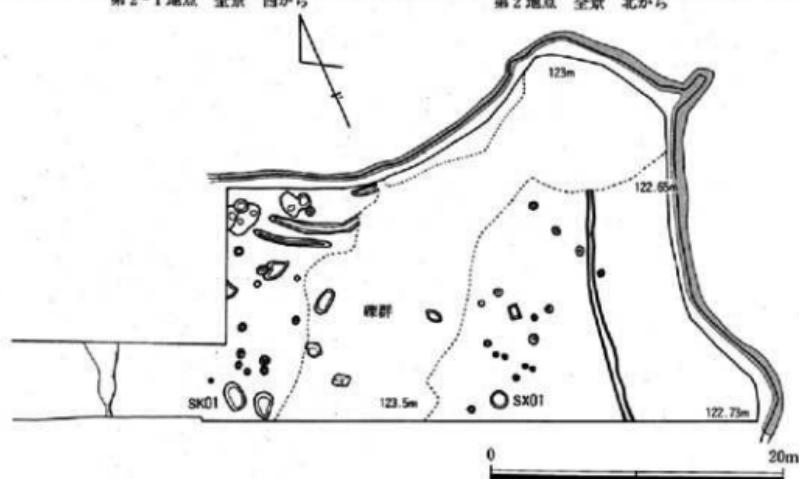


Fig.49 第2-I地点 遺構配図 (縮尺1/400)



第3地点 全景 北から

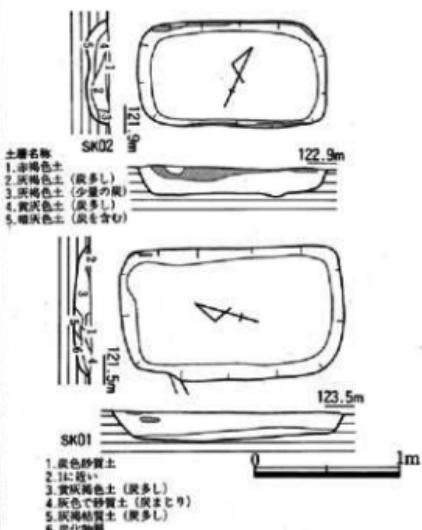


Fig.50 第3地点遺構実測図 (縮尺1/40)

(5) 第3地点

事業地南側中央に位置し、南北方向の傾斜地である。灰色土直下の黄褐色土の面で焼土壙2基を検出した。この斜面中には、現在の水田区画に伴う段が3ヶ所みられる他に、溝を伴う浅い段が検出された。溝の埋土は灰色土である。2基の焼土壙は浅くほぼ同じ規模をもつ。北端約13mからは傾斜が急になり、しだいに谷部へと落ちていく。遺物は少なく、糸切り底の土師皿の小片が数点、遺構検出時に出土したのみである。

(6) 第4地点

丘陵状部分を走る道路に沿って位置する。調査区は現在の水田石垣により3つの段に分かれ る。灰色土直下の黄褐色砂質土の面で焼土壙を3基検出した。

焼土壙は、ほぼ同規模のものが1ヶ所に集まる。全体に浅く残りが悪い。かなりの削平を受けたものと思われる。SK-01・03は床に粉状の炭が堆積する。壁はほとんど焼けていない。遺物の出土は少なく土鉢が1点表土中より出土したくらいである。

土鉢は、鉢および体部の半分が欠けている。淡橙色を呈す。鉢

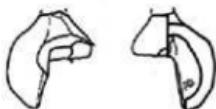


Fig.51 第3地点出土遺物実測図 (縮尺1/3)

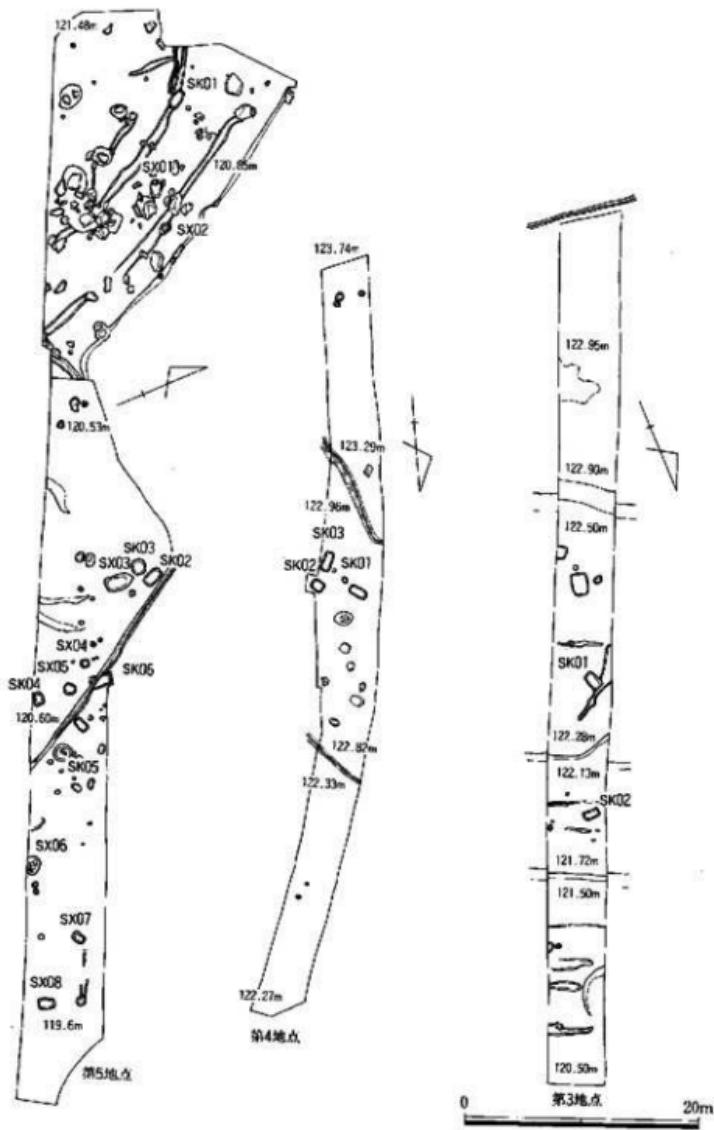


Fig.52 第3・4・5地点遺構配図 (縮尺1/500)



第4地点全景 北から



Fig.53 第4地点遺構実測図 (縮尺1/40)

部分に白色塗料が残っており、全体が白く塗られていたものと思われる。

(7) 第5地点

東西に延びる調査区は、谷部に向って北東にゆるやかに傾斜する。現在の田面区画によって3つの段に分かれる。灰色土直下の黄褐色土の面で溝、焼土壙6基、土壙8基を検出した。

西側の田面では多くの巨礫がみられる。2mに及ぶものもあり、大きなものでは遺構面より30cm露出する。巨礫のいくつかには、周囲20~40cmを堀り込んだ跡がある。埋土は灰色の水田床土で、耕作時に石を除去しようとした痕跡と考えられる。また、等高線に沿って幅約0.7m、深さ10cmの浅い溝が2本走る。埋土は灰色土である。田面が、現在の区画に広がる以前の、小区画水田の溝等の性格が考えられる。

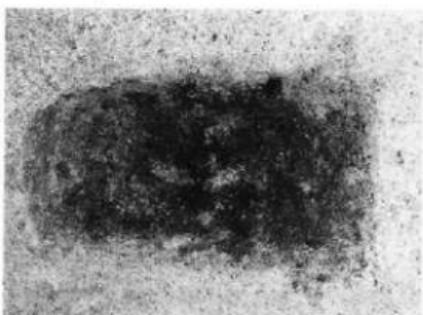
焼土壙は調査区の中心付近に集まる。SK-03・06は深さ約50cmを計り、比較的残りが良い。またいずれも壁が良く焼け、床に炭層が残っている。SK-04は方形で小形。壁の焼け、炭のまじり具合共に少ない。SK-05は浅いが炭層が一面に残る。SK-03は円形で、やや袋状の断面形を持つ。埋土はやや砂質の灰黄褐色土で下層に若干の炭を含む、土師器片が出土しているが小片のため詳細は不明である。SK-07・08は、ほぼ同規模の長方形を呈す土壙で、黄褐色粘質の均一な土を覆土とする。

西端には径30~40cmの礫が集まる。礫間はすいており、すぐ東の樋溝に面した石垣の裏込めの一部と考えられる。石垣はこの個所で1.4mと最も高い。

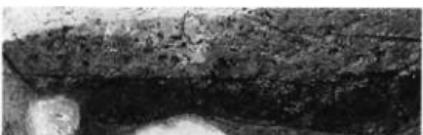
遺物は少なく、遺構検出時に糸切土師皿の小片、近世染付片等を採集している。



第5地点 全景 東から



第5地点 焼土横SK05 南から



第5地点 焼土横SK02土層

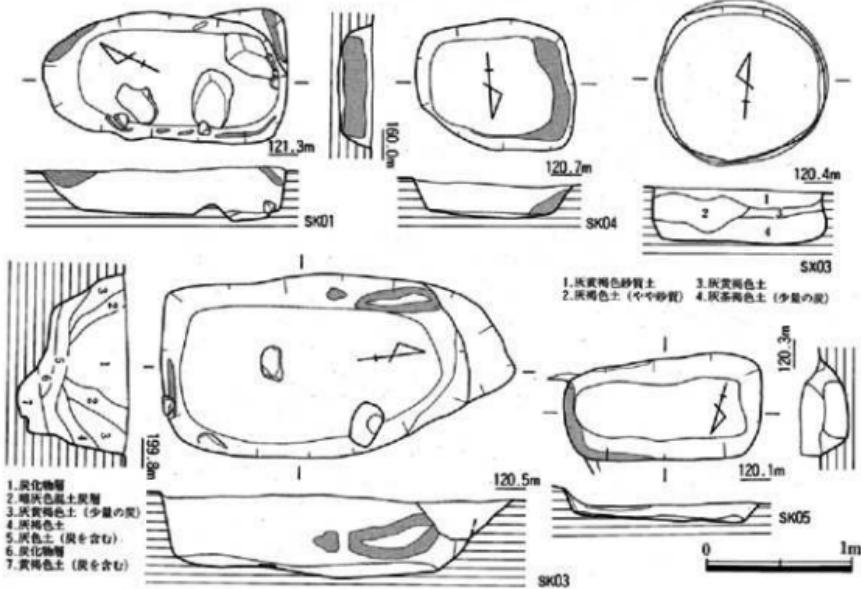


Fig.54 第5地点遺構実測図 (縮尺1/40)

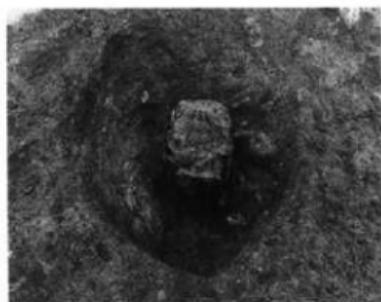
(8) 第6地点

事業地南西の丘陵状の高まりの西側に位置する。調査区は石垣により2段に分かれる。北側の下段は20~40cm大の礫が一面に広がり大きく削平を受けている。一部黄褐色土が広がる北隅に焼土壙を1基検出している。

上段は現在の水田区画3面に渡るが石垣はない。調査区西寄りには20~40cm大の礫が露出する。灰色土直下の黄褐色土で焼土壙、土壙等の遺構を検出した。

SX-01は礫群中に埋り込まれた1.5×1.6mの土壙で、中央に弥生時代後期の變形土器が1個体埋置される。甕は長胴の体部でレンズ底を持ち、口縁部は「くの字」状に強く外反し内面に鋭い稜を持つ。淡茶色で外面は全体にススが付着する。外面は上から下へ輻方向の刷毛調整が

施され、口縁屈曲部に木口痕が見られる。刷毛目は1cmあたり5~6本で深く残る。口縁部は後に横ナデ調整を施す。内面は1cmあたり4本の刷毛目が残る。下より上方向に施される。口



SX01 西から

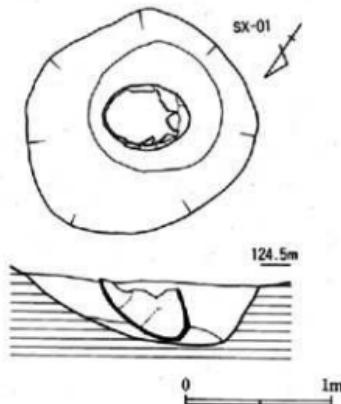


Fig.55 土壙 SX-01実測図 (縮尺1/40)

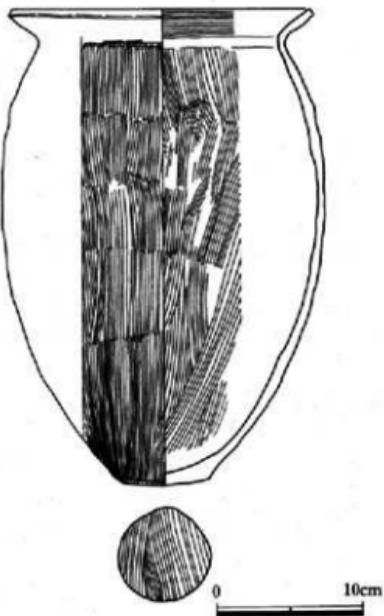


Fig.56 SX-01出土遺物実測図 (縮尺1/4)



第6地点 全景 北から



焼土壙SK06・07 東から



焼土壙SX04 北から



第6地点 全景 東から



焼土壙SK13 南から

縁部は横方向の刷毛調整が施される。

焼土壙は7基検出した。調査全体に分布するがSK-06周辺に5基が集まる。SK-06は円形を呈し、大型の長方形を呈すSK-07を切る。同様の組み合わせを持ち、炭化物を覆土とする遺構が3次調査においても検出されている。SK-06の埋土の方が炭を多く含む。SK-07は一部床面が焼けている。これらも焼土壙に関連した遺構と考えられる。いずれも長方形ではなく同じ規模の掘り方を持つ。SK10は梢円形を呈し、炭まじりの覆土を持つ。SK-08・09・10・12は梢円形

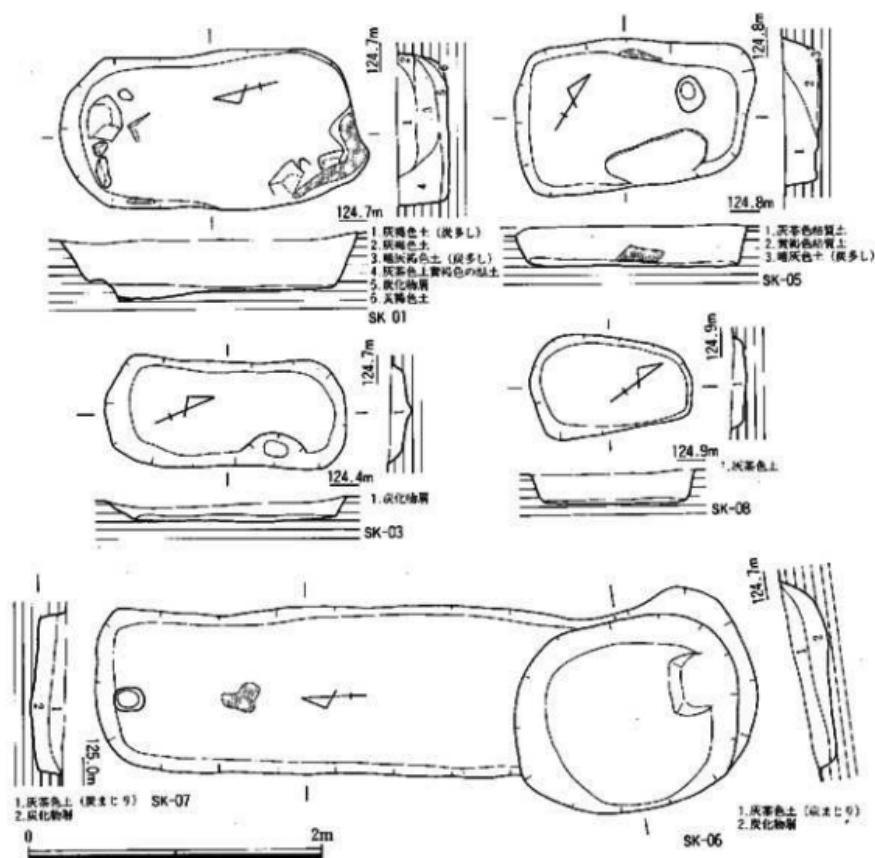


Fig.57 第5地点遺構実測図 (縮尺1/40)

を呈し、灰茶色土を覆土とする浅い土壇である。炭は含まない。

全体に遺物は少なく、遺構検出時に唐津系陶器片、土師皿片を採集した程度である。

(9) 第7地点

調査区は事業地の中心を東西に横断する。既設の道路、橋溝により3区に分けて記述する。

第7-I地点は既設道路の西、椎葉川が流れる谷への落ちぎわに位置する。灰色土下20~50cmの黄褐色土の面で焼土壇6基、土壇5基を検出した。この地区は、水田整形時に盛土したためか焼土壇も残りが良い。SK01・02は深さ65cmと深くやや大型である。上端は崩落しており原

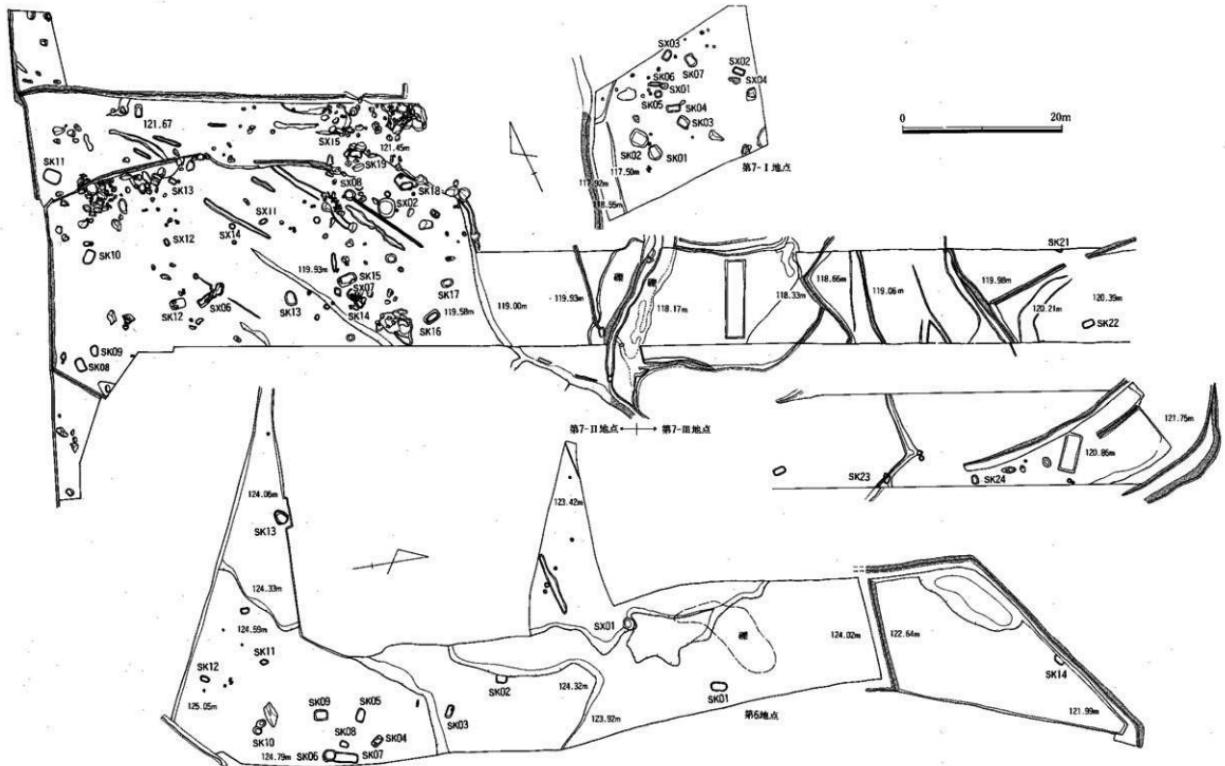


Fig.58 第6・7地点遺構配置図 (縮尺1/500)



第7-I地点 全景 南から



第7-III地点 全景 東南から



第7-I地点 全景 西から



第7-II・III地点 全景 西から

形を留めないが、長方形の規格を持つ。覆土は炭を含む黄灰色、暗灰色土でレンズ状に堆積する。炭層は床直上のみである。SK04は北東隅より浅い溝状の張り出しを持つ。SK05は円形でレンズ状の断面形を呈し、覆土は粉状の炭である。

第7-II地点では焼土壙12基、土壙11基を検出している。遺構面は灰色土直下の黄褐色土層で、巨礫が露出する。焼土壙は深さ40~60cmで比較的よく残っている。やや浅めのSK08、09、11も削平が最も著しいと思われる石垣直下にあり、他と同様の深さを持つものと考えられる。覆土は炭まりの灰黄色、暗灰色土で、床に炭層が堆積する。SK16は最下層および中間層に炭層および炭を多く含む覆土を持ち、その間にはほとんど炭を含まない層が入る。複数回の使用も考えられる。覆土中より糸切板目压痕を持つ土師皿小片が出土している。SK22からは瓦質で摺り目を持ち、底に板目のつく摺鉢片が出土している(Fig.61-19)。SX08、09、10は円形を呈し、レンズ状の断面形を持つ。覆土は長方形の焼土壙と同様である。土壙はいずれも長方形を呈し、暗黄褐色を呈す。性格は不明である。

極溝から東の第7-III地点では黄褐色上に焼土壙3基を検出した。この地区は、やや傾斜が

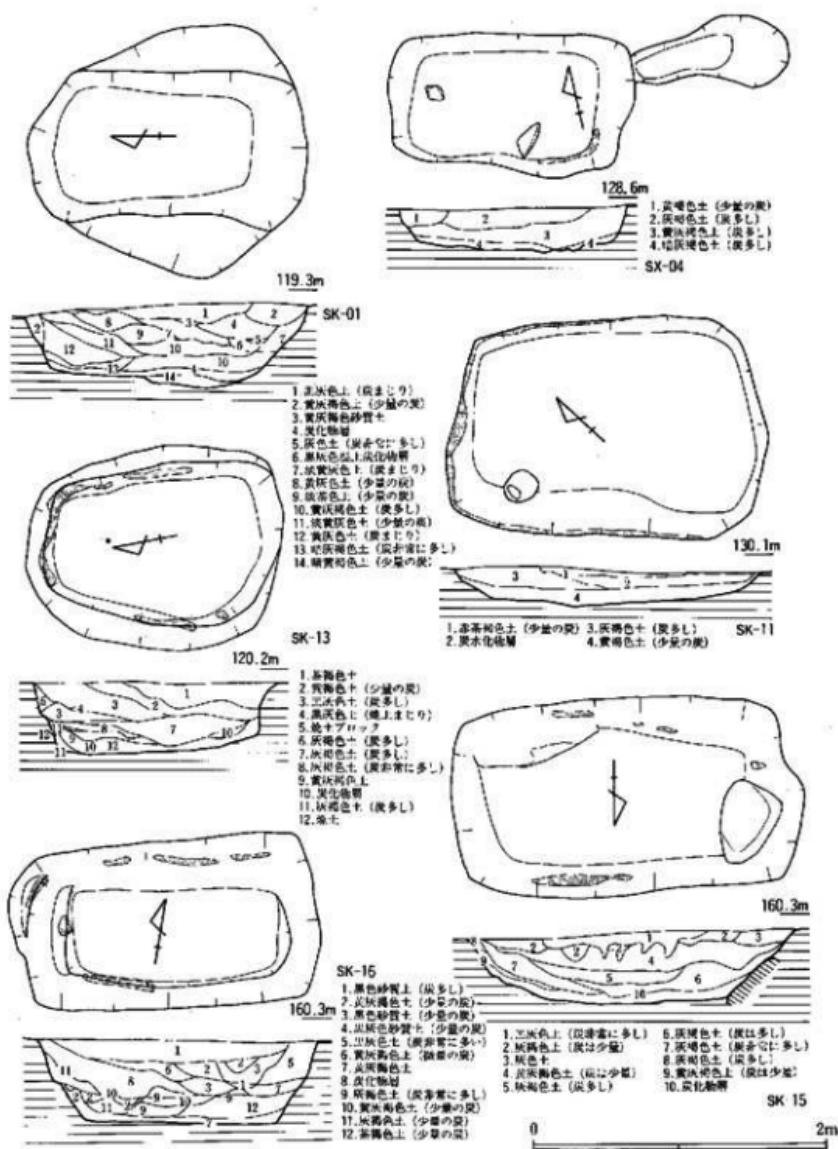
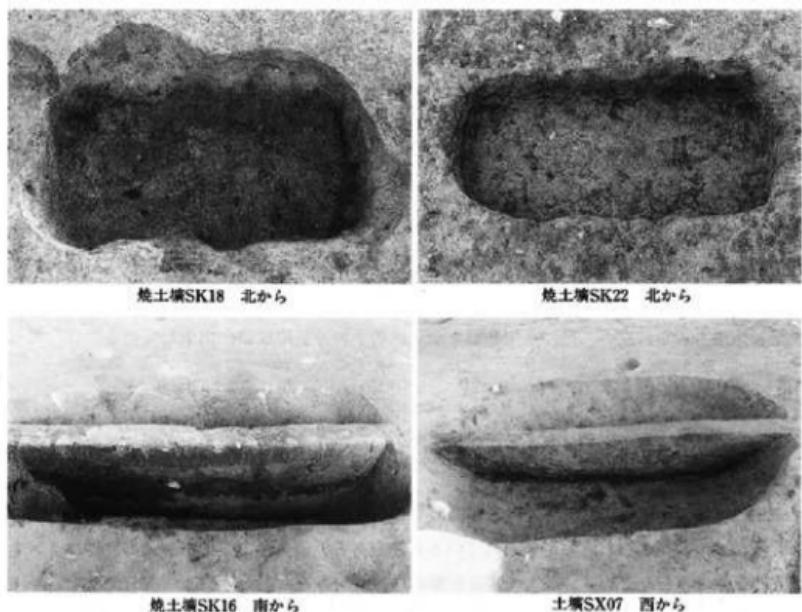
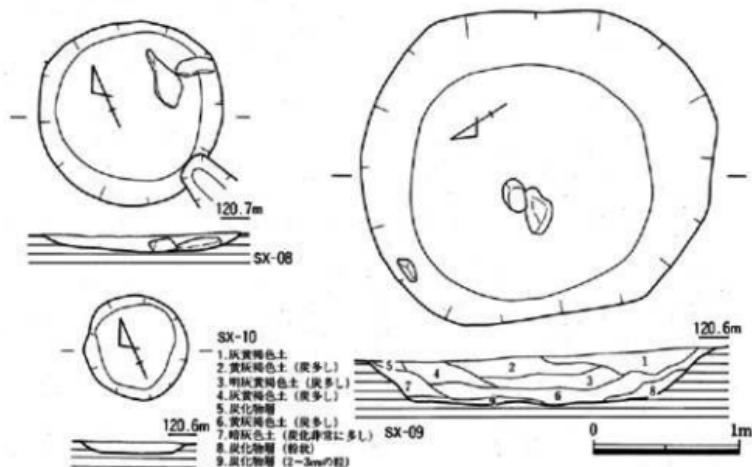


Fig.59 第7地点遺構実測図① (縮尺1/40)



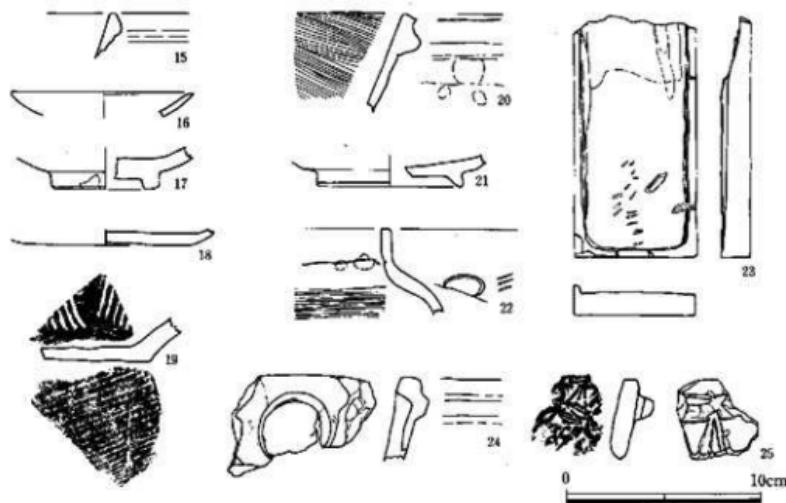


Fig. 61 第7地点出土遺物実測図（縮尺1/3）

強く、石垣により水田が区画される。石垣の裏には1m強の堆積があり、盛土により水田の整形が行われている。焼土壙はいずれも小さく残りもよくない。

遺物は主に灰色土と石垣の表裏から出土している。15、16は白磁である。15は玉縁に縁を持つ碗、16はロハゲで皿である。17は青磁碗の底部である。貫入が著しい。高台内は無釉である。18はヘラ削りの上師皿である。20は土鍋である。外面突帯下にはススが付着する。口唇部ならびに突帯下に強いナデを施す。21は瓦器碗片で2次燃成を受け、暗茶褐色を呈す。22は瓦器鍋である。外面肩部に浅い円形の陰刻を持つ。23は頁岩製の硯である。表は側壁が欠ける。24、25は滑石製石鍋の再加工品である。25は内面に花文を陽刻する。外面は鋸に伴5mm弱の穴が開く。24は内面に径3.5cmの円形の堀り込みがある。外面にはススが付着する。22、23共に青灰色を呈し気泡もみられない。他に水田基盤土からは若干の近世陶磁器が出士している。

(10) 第8地点

第7-11地点から田面をはさんで北に位置する。灰色土直下の黄褐色土の面で焼土壙3基、土壙3基を検出した。

遺構面には2mから30cm大までの礫が露出する。北側隅は特に多くの礫を含む。巨礫の中には、そのまま石垣の根石として使われているものもある。調査区の中央やや東寄りには2×1m大の巨礫のまわりに40~50cm大の割石を集めた個所がある。覆土はやはり水田床上である。

調査区中央西寄りには深さ約20cmの段落ちと、それに沿った溝がみられる。覆土はいずれも

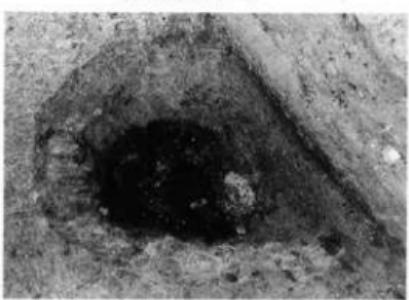
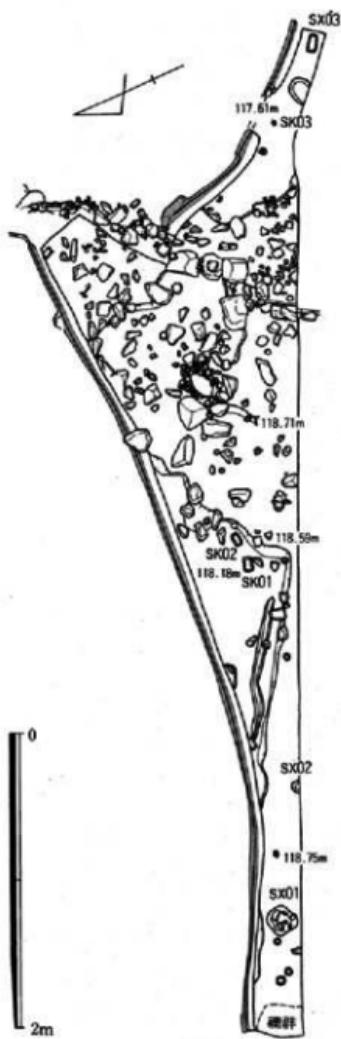


Fig.62 第8地点造構配置図（縮尺1/400）

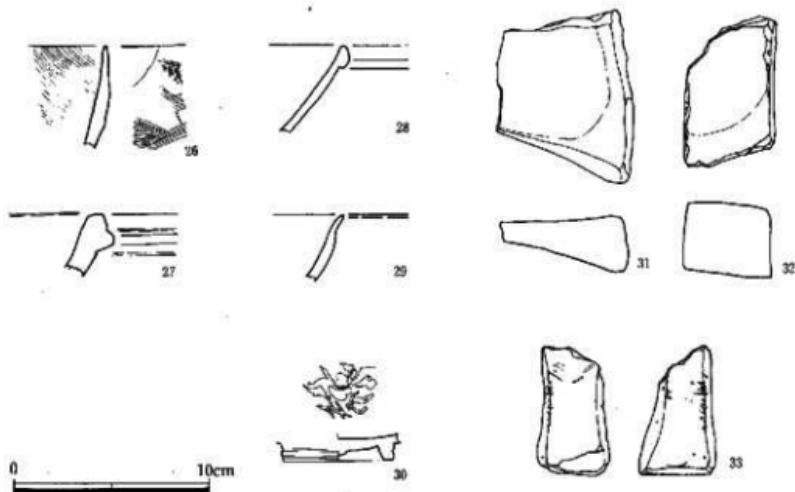


Fig.63 第8地点出土遺物実測図（縮尺1/3）

灰色上で、古い水田区画の痕跡と考えられる。遺物の出上はない。

SK-01、02は小さく浅い焼上壙である。SK03は床一面に炭層が残り、壁も焼ける。SX01は黄茶褐色砂質土を覆土とし、水田の土を含まないが、石を抜いた痕跡の可能性もある。

遺物は水田床土より若干出土している。26は土師質の土器片で外面は暗灰色、内面は灰茶色を呈す。いずれも1cm弱幅の刷毛目調整痕がみられる。7は滑石製石鍋である。口縁部直下に低い断面台形の鉗を持つ、外面にはススが付着する。石材は密でやや青味がかった灰色を呈し、某褐色の貫入が入る。28、29は白磁である。28は玉緑口縁を持ち緑色がかる。29はやや青味が強い。30は青磁の底部で見込みに花文を陰刻により表わす。疊付きには釉を施さない。31は表裏共に磨かれており、砥または石臼と考えられる。石材は荒い砂岩である。32、33は砥石で4面とも使用されている。石材は天草石である。32は棱に細い傷が多く見られる。他に灰色上より唐津系陶器片、染付片等が出土している。

(II) 第9地点

水田の石垣により3段に分かれる。第9-1地点では灰色土直下の黄褐色土の面で焼土壙3基を検出した。遺構面には多くの礫が露出する。SK01は深さ60cmと残りが良い。最下層に炭化物が堆積し、側壁は焼ける。南辺を黄褐色土および水田の土を覆土とするさらに深い堀り込みに切られる。この堀り込みは、中の1.5m大の巨礫を埋め込んだ時のものと考えられる。SK02、03は同規模で炭層が堆積する。調査区の中央やや東寄りの3m大の巨礫の北東には割石が集ま

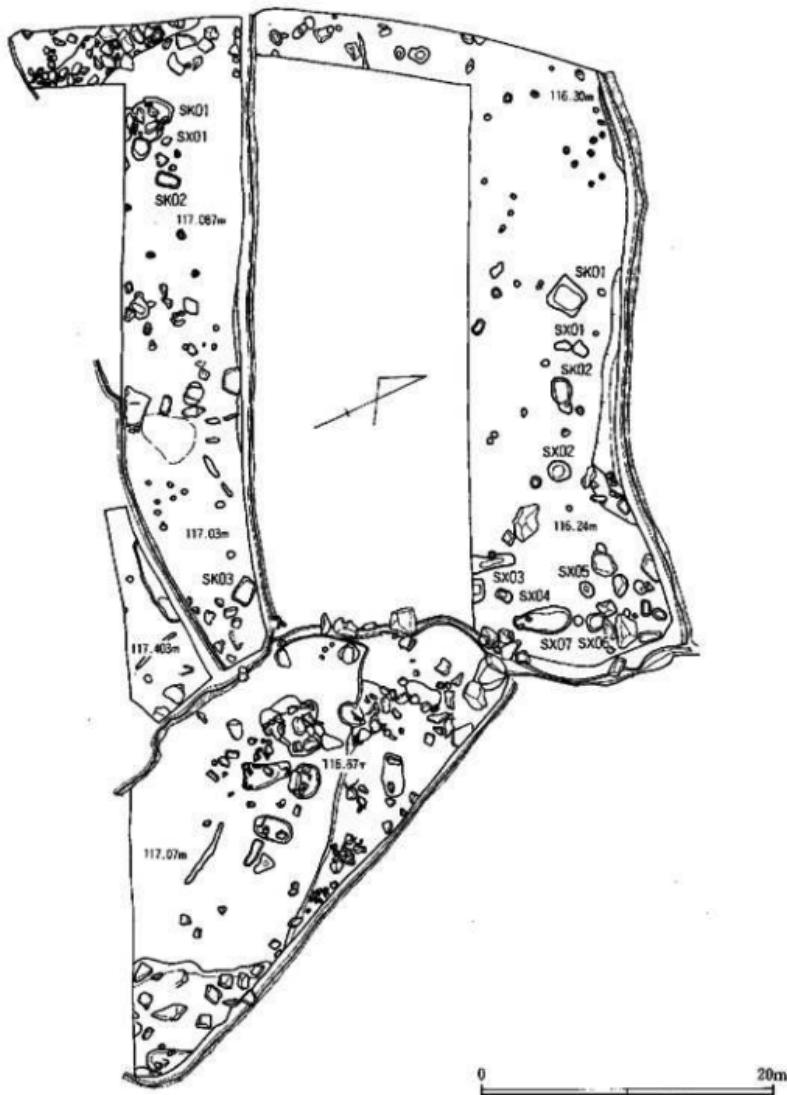


Fig.64 第9·10地点造構配置図 (縮尺1/400)



第9・10地点 全景 西から



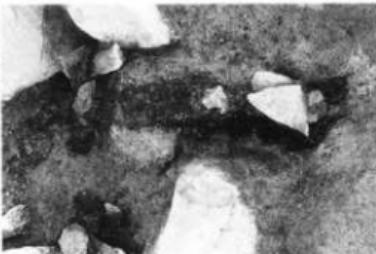
第9地点 焼土塙SK01 西から



第9地点 焼土塙SK02 東から



第9地点 焼土塙SK03 東から



第9-II地点 割切および塙 北から

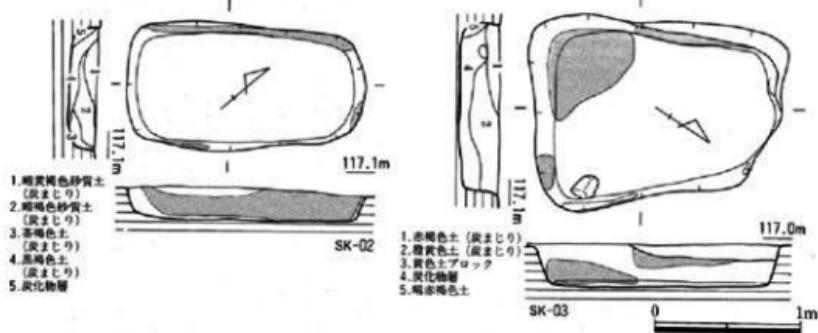


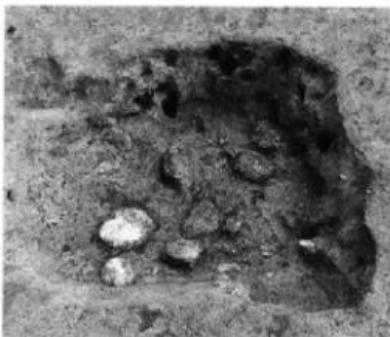
Fig. 55 第9地点造構実測図（縮尺1/40）

る。巨礫には矢の痕跡が残る。割石は、巨礫が碎かれ埋められたものと思われる。覆土は灰色土である。遺物は、石垣表土、灰色土より土師皿片、唐津系陶器片等と少量採集している。

第9-II地点も黄褐色土上に巨礫が露出する。巨礫の中には上部を割られたものや、周囲を塙りこぼめたものがある。割られた巨礫には周囲に炭が多く含むものもある。調査区のはば中央には東西に走る深さ40cm程の段落ちがある。覆土は灰色土で、石垣を築いての水田拡張の際に埋められたものと思われる。覆土中の礫には明らかに投げ入れられたものがある。この下層には伊万里系の染付片が含まれている。

(12) 第10地点

第9地点の北側の田面に位置する。さらに下の田面とは1.5mの高い石垣により区切られる。灰色土直下の黄褐色土上で造構を検出した。SK01は焼土壤で、礫層まで塙り込む。SK02は東側



第10地点 焼土壤SK01 西から



第10地点 焼土壤SK02 南から

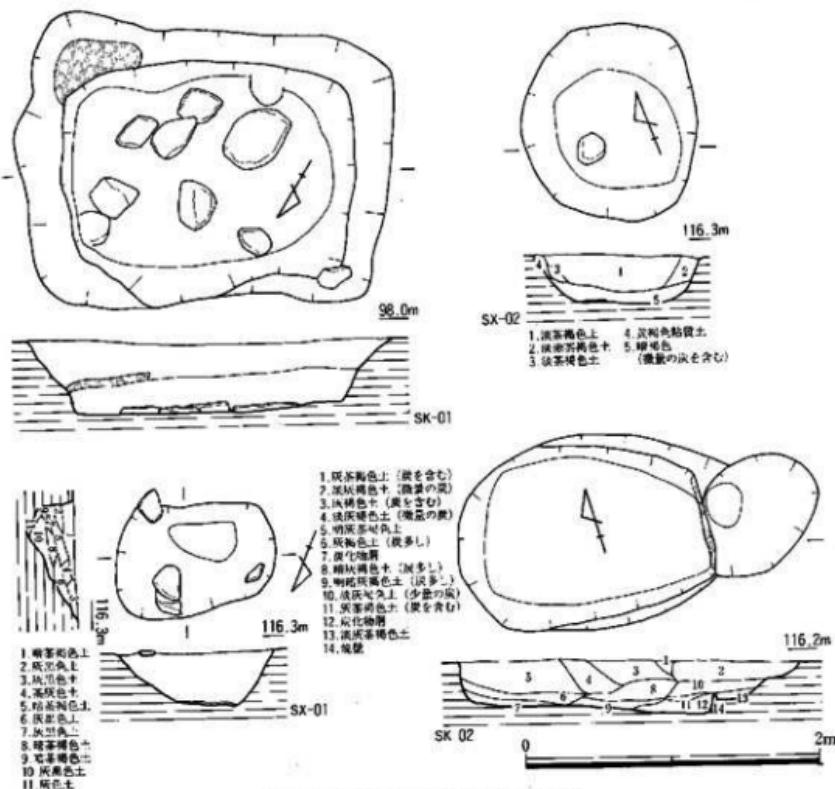


Fig. 66 第10地点遺構実測図 (縮尺1/40)

の壁が壊損する。この東壁は焼けが著しく厚さ2cm程が赤変する。SX01は灰黒色土、暗茶褐色土が互層となって堆積する。SX02は地山に近い淡茶褐色のしまりのない覆土上で、最下層には少量の炭を含む。SX03、04、05、06は浅い底みに灰茶色のやや砂質の覆土が堆積する。SX03からは陶器片、SX04からは瓦質土器片が出土している。SX07はレンズ状の底みに少量の炭を含む黄褐色の土が堆積する。調査区北側の石垣裏には段落ちがみられ、灰色土が堆積する。石垣以前の水田区画を表わすと思われる。糸切りの土師皿片が出土している。遺構検出時に繩文土器片を探集したためトレンチを設定したところ、晩期と思われる条痕上器片を検出した。調査期間の制約でそれ以上の調査は行っていないが、顕著な遺構、含包層は予測し難い。



第11地点 焼土壙SK01 土層

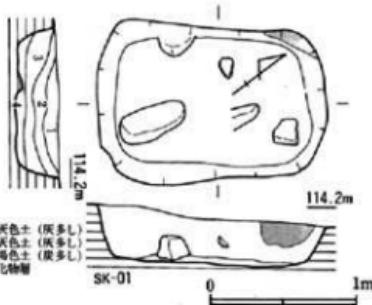


Fig.67 第11地点遺構実測図 (縮尺1/40)

(13) 第11地点

切土される田面を調査予定であったが、施工業者との行き違いで調査前に削平を受けた。表土剥ぎの段階で、焼土壙4基を検出していたが、削平を免れた焼土壙2基を調査するに留まった。調査地点は黄褐色土の遺構面に大小の礫が露出する。SK01、02は同規模で01が02を切る。長方形を呈す焼土壙が切り合う例は今回の調査で唯一のものである。両者とも壁の一部が赤変する。

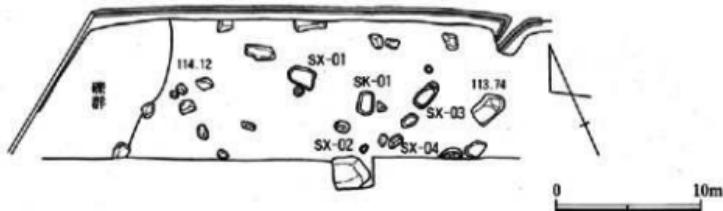
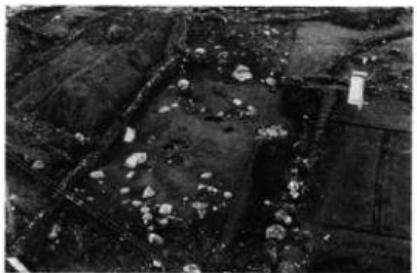


Fig.68 第12地点遺構配置図 (縮尺1/400)



第12地点 全景 西から



第12地点焼土壙 SK01

(14) 第12地点

灰色土直下の黄褐色土の面で遺構を検出した。遺構面上に巨礫が露出し、調査区東半、西端は礫層が広がる。SK01は焼土壤で、一部側壁が赤変する。床直上には炭層が堆積する。SX01は茶褐色土と20cm大の礫を覆土とし、床面には多くの礫が露出する。SX02は橢円形を呈し、若干の炭を含む灰色土、黄褐色土を覆土とする。SX03は細長い長方形を呈し、よくくまつた黄褐色土と灰色土の混土を覆土とする。床には礫が露出する。SX04は灰色土、黄褐色土を覆土とし、瓦器小片を出土している。調査区中央北側には、2m大の巨礫の周りに割石を詰めた堀り込みがみられる。覆土は灰色土である。

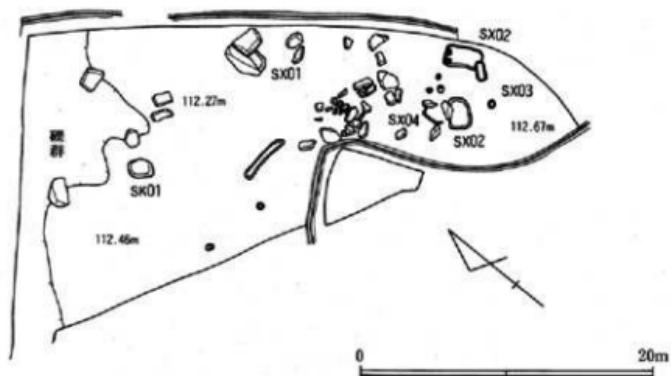


Fig.69 第13地点遺構配置図（縮尺1/400）



第13地点 全景 北から



土壤 SX02

(15) 第13地点

灰色土直下の黄褐色土層上面で遺構を検出した。西端は緩やかに落ち、大小の礫が露出する。SK01、02は丸みを帯びた長方形を呈す焼土壙で、炭化物層が堆積する。壁の焼けはみられない。SX01は2辺を巨礫に挟まれた土壤で50cmと深い。側壁は亦変する。茶褐色土を含む炭が覆土で、しまりがない。明らかに焼土壙の炭とは異なる。水田の土は入っていない。SX02は炭を多く含む黒色土を覆土とする浅い土壤である。西壁に接してPitが3つみられる。SX03に切られる。SX03は暗茶灰色土を覆土とする楕円形を呈す土壤である。SX04は、礫を除こうとした灰色土を覆土とする堀り込みに切られる。暗茶灰色土を覆土とする。遺物の出土は少ない。

(16) 第15地点

事業地の東側斜面の裾部に位置する。灰色土直下の黄褐色土の面で遺構を検出した。調査区は現在の水出区画により4段に分かれる。SK01は焼土壙で正方形に近い。覆土に炭を多量に含む。36はSK01から出土した土師皿片である。底部は糸切りで板目压痕を残し、立ち上がりに枝

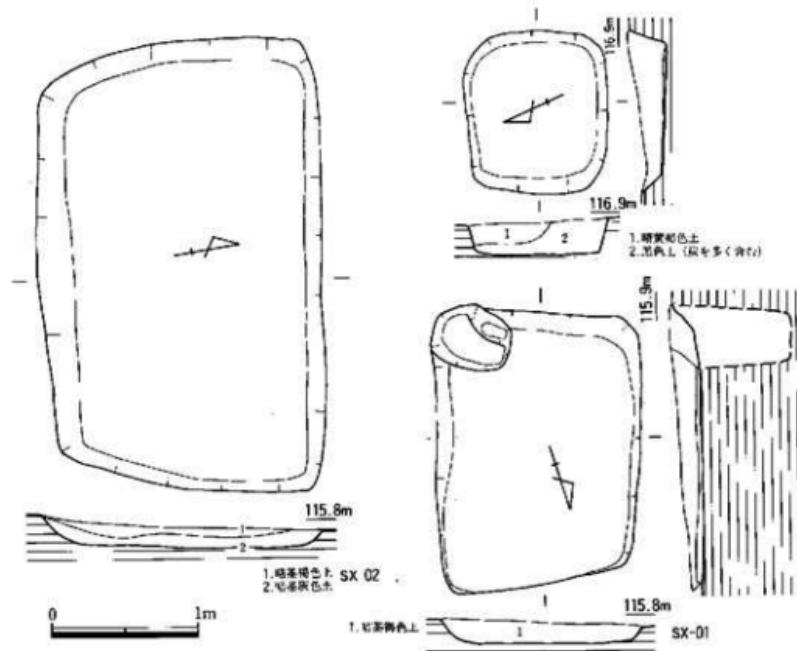


Fig.70 第15地点遺構実測図 (縮尺1/40)

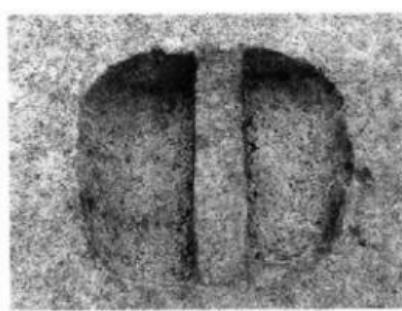
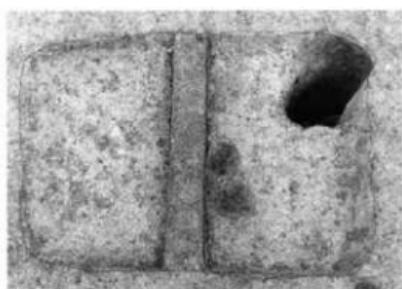
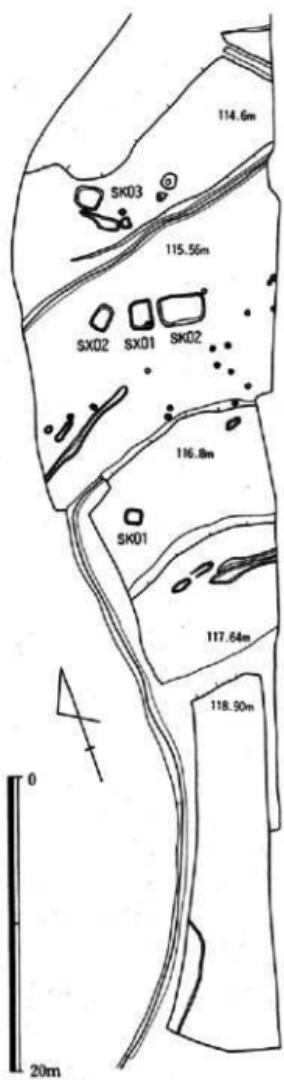


Fig.71 第15地点遺構配置図 (縮尺1/400)

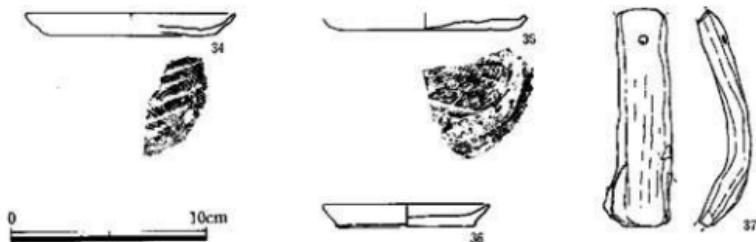


Fig.72 第15地点出土遺物実測図（縮尺1/3）

を持つ。復元口径8.6cmを測り、淡い橙色を呈す。SK02、03は長方形の焼土壙で多量の炭化物を覆土に含む。SX01、02は長方形を早土壤でいずれも暗茶褐色土を覆土とする。炭は含まない。20cmの間隔をおいて並んでおり、互いに関連した施設と考えられる。SX01は北東角にピットを持つ。34はSX02より出土した。両者とも糸切り底で板目压痕を持ち、淡い黄茶色を呈す。34は復元口径10.8cmを測る。35はピット下位からの出土である。

南から2段目の調査区では段落ちとそのやや上に溝を、3段目では溝を検出した。溝の覆土は灰色土である。

ピット群より糸切底の土師皿片が出土している他、石垣中より染付片が出土している。37は耕作土中からの出土である。土師質で碗曲した取手状を早し、径4mm弱の穿孔を持つ。

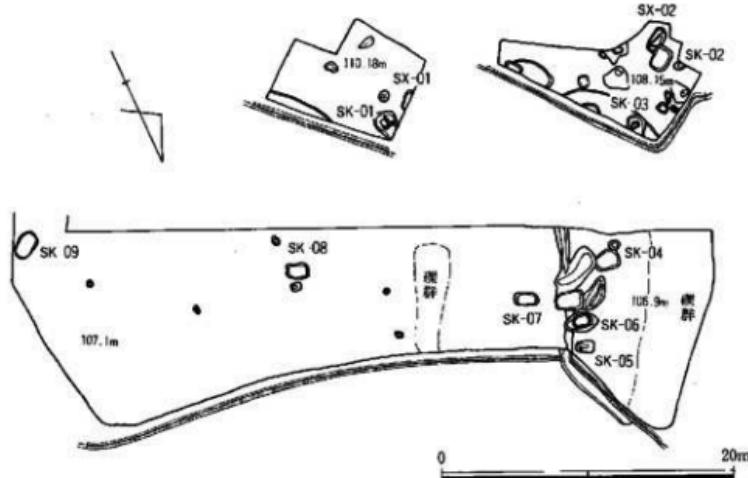


Fig.73 第16地点遺構配置図（縮尺1/400）

(17) 第16地点

第15-I 地点では焼土壙1基、土壙1基を黄褐色土の面で検出した。SK01は長方形を呈す焼土壙で多くの炭を含む。SX01は調査区外に広がり全体は不明である。覆土最下層は多くの炭を



第16-II地点 全景



第16-III地点 全景

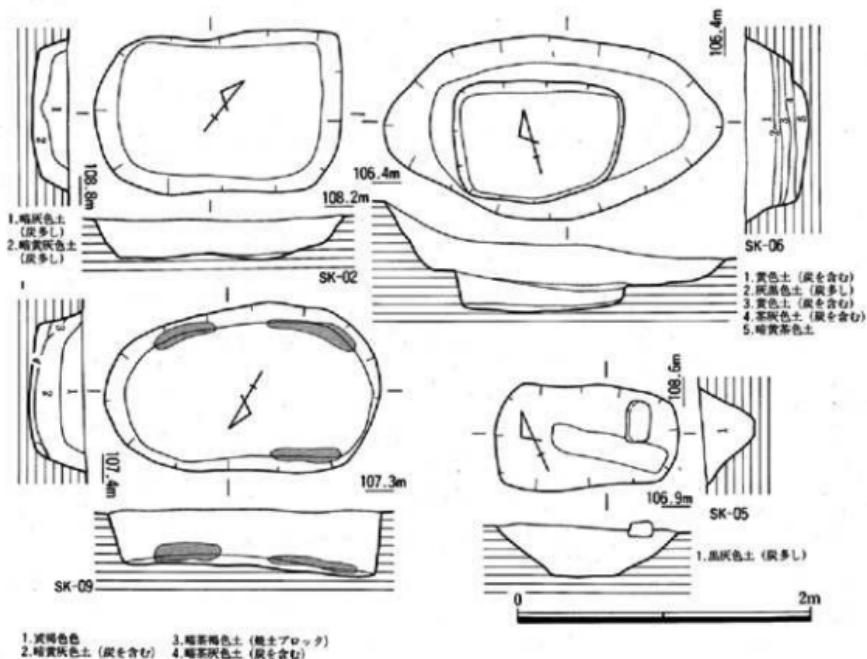


Fig.74 第16地点遺構実測図 (縮尺1/40)



第16-III 焼土壙SK04 南より



第16-IV 焼土壙SK06土層 東から

含み、焼土壙の可能性もある。

第15-II地点は黄褐色土上で焼土壙2基、土壙1基を検出した。SK02は焼土壙でSX02を切る。長方形を呈し覆土に炭を多く含む。SK03は北側段落ちの内で検出した焼土壙である。壁と床の一部が焼け、床には炭層がある。調査区外に延びるが長方形を呈すと思われる。床中央に13cmの深さの堀り込みがある。SX02は梢円形を呈す。

第15-III地点は耕作土下の堆積が厚く、30~60cmの灰茶色砂質土が堆積する。黄茶色の砂質土上で遺構を検出した。SK04、07、08、09は長方形を呈す焼土壙である。08、09は壁と床の一部が赤変する。SK05は横断面逆三角形を呈し、炭を多く含む黒灰色土を覆土とする。SK06は梢形を呈し内に長方形の堀り込みを持つ。覆土は黄色土と炭を多く含む黒色土が交互に堆積する。遺物の出土はほとんどない。

第15-IV地点では遺構を検出しなかった。

(18) 試掘調査出土遺物 (Fig.75)

38は白磁碗の口縁部で、内面に沈線がまわる。39から45は青磁である。39は見込みに「金玉満堂」の陰刻を持つ碗である。褪せた緑色を呈し、貫入が著しい。目込みには目あとがみられる。40は深い緑色を呈す碗で、外面に幅3~4mmの沈線が施される。41は明るい緑色を呈す碗で、外面に単弁の蓮弁文を施す。高台まで施釉される。見込みには花文が陰刻される。42、45は外面に雷文帯を持つ碗である。42は内面にも陰刻が施される。43、44は口縁部が鋭く外反する杯である。43は淡い青緑色を呈し、外面に蓮弁の削り出し文様がある。44は深緑色を呈し、無文である。46はヘラ切りの土師器で杯と思われる。内面は丁寧なナデ調整である。47は糸切の土師杯である。48から50は瓦器で椀の底部である。51は土鍋の口縁部で断面逆L字状を呈す。淡い茶色で口縁部外面のみ暗灰色である。52は土鍋の口縁部で内面に棱をもって外反する。ナデ調整で黄灰色を呈す。53は暗灰色を呈す頁岩製の石硯である。側壁等が欠損する。表側の側

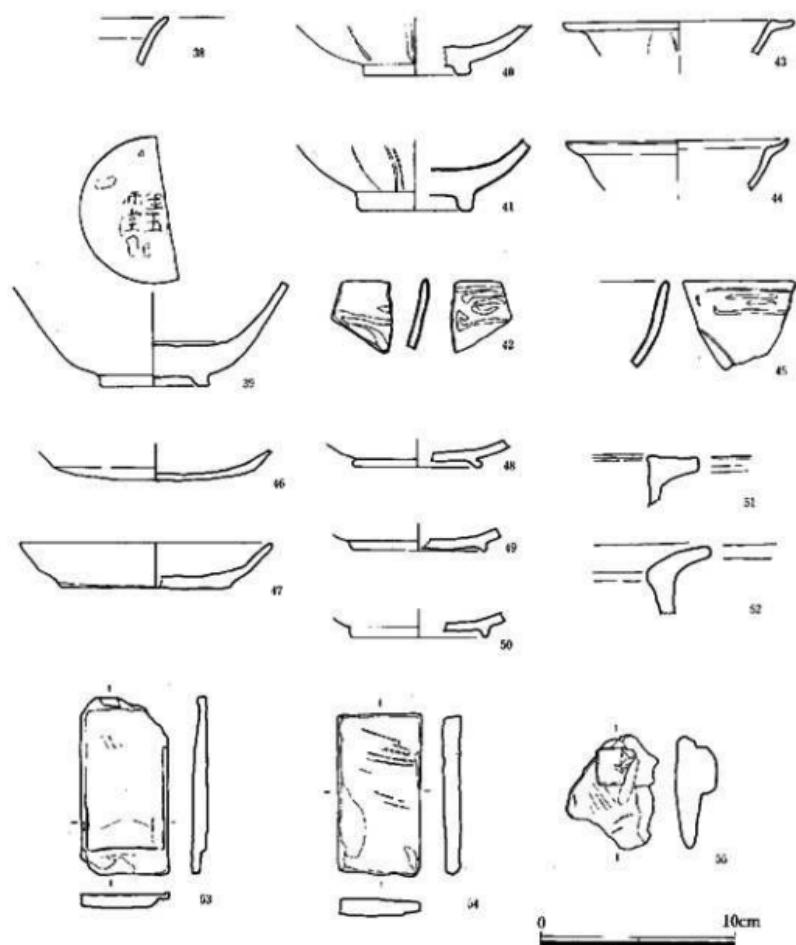


Fig.75 試堀調査遺物実測図（縮尺1/3）

壁沿いには浅く細い沈線がまわる。浅いが陸、海が分かれる。54は淡い黄茶色を呈す頁岩製の
砾石である。裏面は剝離している。幅3mm深さ2mm程の顕著な傷がついている。55は滑石製の
加工品である。つまみ状の突起がつき、その反対側は凸面鏡状を呈す。

まとめ

谷口遺跡の調査では、中世より現代に至る耕地開発の過程の一端を知る事ができた。

開発以前の当地は、段丘上の中央に谷部を持つ傾斜地であったと思われる。そして、その斜面を削平し、平地を作ることで耕地が形成された。現在の耕作土直下には、水田基盤土で旧水田層と思われる灰色土が堆積し、その下は巨礫を含む黄褐色土である。灰色土は、中・近世遺物を含んでおり、中世以降の開発を窺わせ、現在の水田基盤土の整地が近世以降に行われた事を示す。また、地割り溝や段落ちの方は現在の水田区画の形成過程を物語ると同時に、さらにそれ以前の耕地の存在を示す。焼土壌は、黄褐色土の上面で検出される。水田の土を含まず、かなりの削平を受けているものもあり、耕地開発以前のものと考えられる。焼土壌は伴う遺物が少なく、糸切板目压痕の土師皿、瓦質の擂鉢片が数少ない時期を示す資料である。これらが遺構に伴うものであれば、13世紀から14世紀頃に焼土壌が作られ、当地の開発が始まり、それ以降大規模な耕地開発が行われたと言えよう。この事は、文献史料の研究から、灌漑用水である樋溝の成立時期を遅くとも長錆4(459)年とする見解に矛盾せず、さらに溯り得る可能性がある。

次に、樋溝は当初、14地点の段落ちにみられるように、南側斜面から雨水を集める谷部に、灌漑用水を流したものと想定できる。現在の石頭を用いた形態は、水田を拡大していく過程で築いた石垣が谷部を狭めた結果形成されたものと考えられる。

旧道については、中世から現代に至るまで、耕地の拡大、補修と同様に、築造、整備されたものであろう。この道は、博多から輸入陶器、備前陶器、石鍋等の品々をこの地にもたらし、さらに佐賀方面に運ぶ路線であった可能性も考えられる。

焼土壙は、昨年度の報告で木炭、草木灰等の生産遺構である可能性を示されている。谷口遺跡の調査でもほぼ同様の認識を得た。分布図(Fig43)のように調査地点全体にみられ、特にその立地を特に選んではいない。しかし、部分的に集中して作られる個所がある。形状は長方形で、ほぼ一定の大きさを意識して削削されたものと思われる。久田地区のものと比較すると、壁の焼け具合は弱く、埋土の炭は少ない。また、昨年度と同様に、大型のものと円形の平面形を呈するもの、浅い溝状の溝を持つものもある。

中世以前の遺物、遺構は、弥生時代、縄文時代に遡る。弥生時代では、後期の土器埋置遺構を報告したが、他に後期の竈形土器と思われる破片が1点出土している。縄文時期は、押型文、磨消縄文、条痕文、黒色磨研土器、石斧、石鎌を採集しているが遺構に伴うものではない。地山とした黄褐色土に若干の条痕文土器を含む個所があったが調査を行っていない。これらの弥生、縄文土器は、図版に示している。詳細については来年度まとめて報告する予定である。

注) 吉良国光「背後の山の所領支配と村落一氣前田良都駿山を中心として」(九州史学特集号) 1987.

Tab. 5 蔵構一覧①

地 点	遺構番号	遺構の種類	平面形	規模(長さ×幅×奥)	埋 土	焼上の位置	備 考
第 1 地点	SK-01	焼土壙	長方形	130×102×40	炭まじり	側壁	
	02	焼土壙	長方形	155×86×32	炭化物層	側壁	
	03	焼土壙	(長方形)	(200)×200×70	炭化物層	—	
	SX-01	土壙	長方形	123×65×21	—	—	
	02	土壙	円形	106×94×29	炭化物層	側壁	
第 2 地点	SK-01	焼土壙	長方形	185×116×29	炭まじり	—	
	SX-01	土壙	円形	108×96×14	青灰色土	—	断面レンズ状 浅い
第 3 地点	SK-01	焼土壙	長方形	150×90×19	炭化物層	—	
	02	焼土壙	長方形	80×70×15	炭まじり	側壁	
第 4 地点	SK-01	焼土壙	長方形	116×80×20	炭化物層	—	
	02	焼土壙	長方形	124×90×18	炭まじり	—	
第 5 地点	SK-01	焼土壙	長方形	115×85×21	炭化物層	—	
	02	焼土壙	長方形	165×80×35	炭化物層	側壁	
第 6 地点	SK-01	焼土壙	長方形	153×95×37	炭化物層	側壁	
	03	焼土壙	長方形	240×135×52	炭化物層	側壁	土師器片
第 7 地点	SK-01	焼土壙	長方形	110×86×22	炭化物層	側壁・床面	
	05	焼土壙	長方形	135×83×31	炭化物層	側壁	
第 8 地点	SK-01	焼土壙	長方形	204×118×38	炭化物層	側壁	
	SX-01	土壙	長方形	150×90×6	暗黄褐色土	—	
第 9 地点	02	土壙	不整形	123×73×30	暗黄褐色土	—	
	03	土壙	円形	115×110×40	灰黄褐色土	—	断面透視状
第 10 地点	04	土壙	円形	66×66×37	茶褐色土	—	
	05	土壙	円形	85×73×46	茶褐色土	—	条切土師器直片
第 11 地点	06	土壙	円形	160×(103)×72	深茶色土	—	
	07	土壙	長方形	112×71×36	黄色粘土	—	
第 12 地点	08	土壙	長方形	125×90×38	黄色粘土	—	
	09	焼土壙	長方形	210×105×40	炭化物層	側壁	土師器片
第 13 地点	02	焼土壙	長方形	130×(105)×10	炭化物層	側壁	
	03	焼土壙	長方形	165×70×14	炭化物層	—	
第 14 地点	04	焼土壙	長方形	153×83×45	炭化物層	側壁	土師器片
	05	焼土壙	長方形	162×100×28	炭まじり	側壁	Pitあり
第 15 地点	06	土壙	円形	150×130×23	炭化物層	—	
	07	大型土壙	長方形	450×115×40	炭化物層	床面(わずか)	Pitあり 土師器片
第 16 地点	08	土壙	長方形	110×70×20	灰茶色土	—	
	09	焼土壙	長方形	182×135×41	炭化物層	—	
第 17 地点	10	丸泥丸分	不整形	115×90×10	炭まじり	—	
	11	土壙	不整形	105×71×15	炭化物層	—	
第 18 地点	12	土壙	長方形	121×69×13	灰茶色土	—	土師器直
	13	焼土壙	長方形	96×78×34	炭まじり	—	
第 19 地点	14	焼土壙	(長方形)	127×(55)×21	炭まじり	—	
	SX-01	煙窓	円形	77×75×21	茶褐色土	—	新牛後湖窓
第 20 地点	SK-01	焼土壙	長方形	190×172×50	炭化物層	—	土師器片
	02	焼土壙	長方形	190×130×70	炭化物層	側壁	
第 21 地点	03	焼土壙	長方形	140×97×37	炭まじり	側壁	
	04	焼土壙	長方形	170×98×33	炭まじり	側壁	浅い溝がつく
第 22 地点	05	土壙	円形	95×98×20	炭化物層	—	上師器片
	06	土壙	濃状	168×75×23	炭まじり	—	断面透視形
第 23 地点	07	焼土壙	長方形	152×130×40	炭化物層	—	土師器片
	08	焼土壙	長方形	165×110×28	側壁	—	

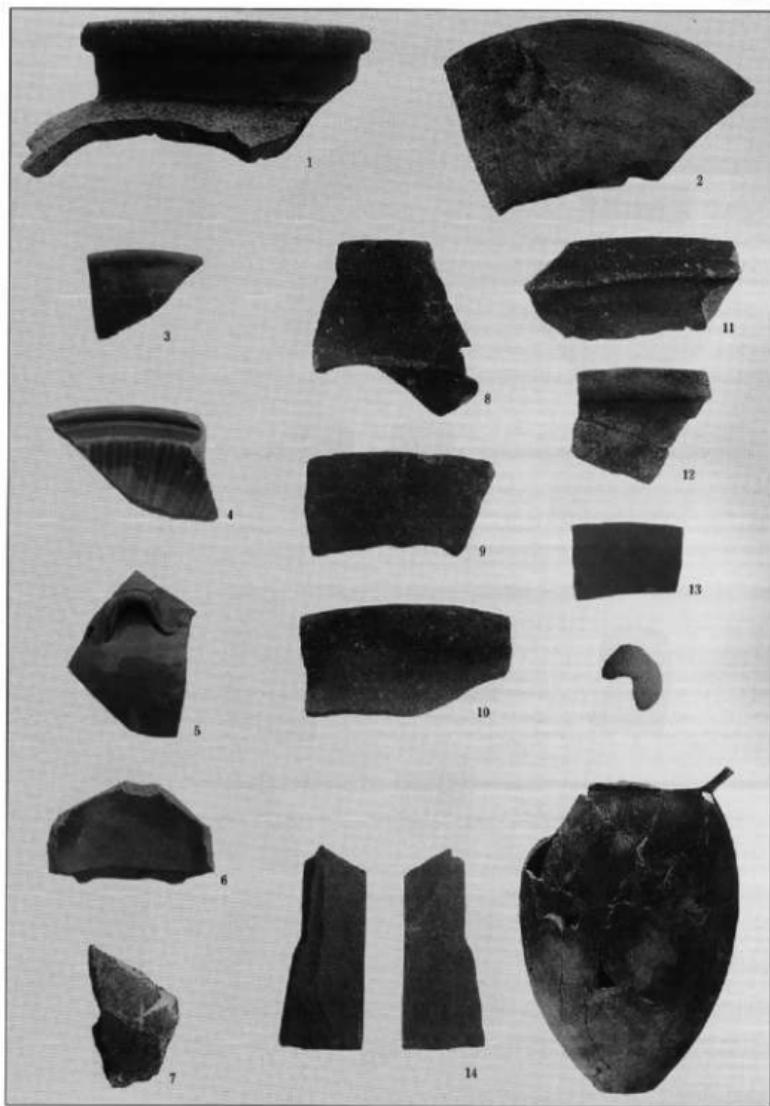
()は未確定を示す

Tab. 6 遺構一覧②

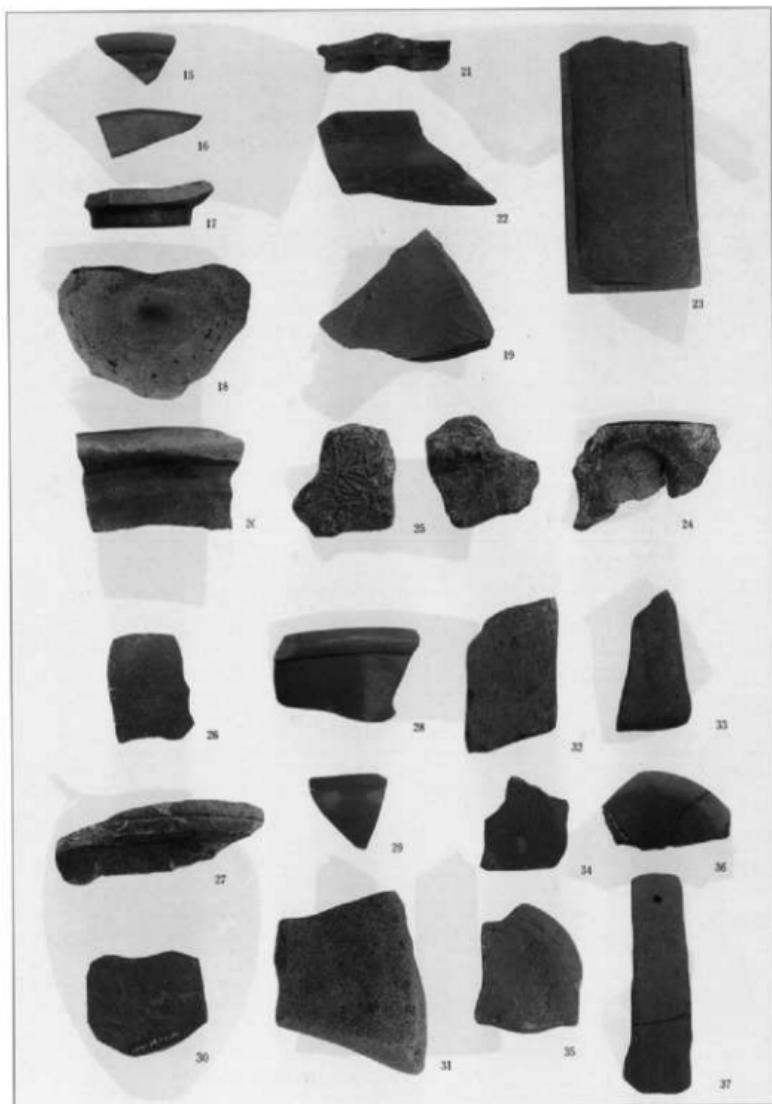
地 点	遺構番号	遺構の種類	平面形	規模(長さ×幅×深)	埋 土	施土の位置	備 考
第7地点	09	焼土壙	長方形	125×82×20	炭化物層	側壁	
	10	焼土壙	長方形	183×119×63	炭まじり	側壁(ごわづか)	
	11	焼土壙	長方形	256×145×23	炭化物層	側壁	
	12	焼土壙	長方形	180×113×58	炭化物層	側壁(わづか)	
	13	焼土壙	長方形	172×140×50	炭化物層	側壁	
	14	焼土壙	長方形	155×110×50	炭まじり	—	
	15	焼土壙	長方形	241×133×31	炭化物層	側壁	
	16	焼土壙	長方形	210×113×55	炭化物層	側壁	未切削口压痕器皿
	17	焼土壙	長方形	144×93×40	炭化物層	—	
	18	焼土壙	長方形	171×95×40	炭まじり	—	
	19	焼土壙	長方形	140×85×18	炭まじり	—	
	20	焼土壙	—		炭まじり	側壁	
	21	焼土壙	(正方形)	(115)×(95)×42	炭まじり	側壁(わづか)	
	22	焼土壙	長方形	155×80×35	炭まじり	—	瓦質スリット片
	23	焼土壙	長方形	(123)×85×20	炭化物層	側壁	
	24	焼土壙	長方形	120×84×24	炭化物層	—	
SX-01	土壤	円形	111×117×10				断面レンズ状
	02	土壤	長方形	155×84×30	黄茶色土	—	
	03	土壤	楕円形	153×98×32	黄茶色土	—	糸切土器器皿片
	04	土壤	不整形	110×110×62	灰褐色土	—	
	05	土壤?	長方形	61×48×13		—	
	06	土壤?	長方形	246×83×78		—	糸切土器器皿片
	07	土壤	円形	110×118×27	茶褐色土	—	
	08	土壤	円形	123×125×10	炭化物層	—	
	09	土壤	円形	240×210×30	炭化物層	—	
	10	土壤	円形	70×71×8	炭化物層	—	
	11	土壤	楕円形	105×50×22	暗灰色粘質土	—	
	12	土壤	長方形	55×100×46	黄褐色砂質土	—	
	13	土壤	長方形	57×95×13	黄褐色粘質土	—	
	14	土壤	楕円形	73×60×8	黄灰色粘質土	—	
	15	土壤	(円形)	73×35×8	炭化物層	—	
第8地点	SK-01	焼土壙	長方形	89×53×4	炭まじり	側壁	瓦質土器片・土器器皿
	02	焼土壙	長方形	100×58×14	炭化物層	—	
	03	焼土壙	楕円形	(174)×158×45	炭化物層	側壁	
SX-01	土壤	円形	193×190×39	黄茶色砂質土	—		
	02	土壤	楕円形	(54)×88×31	茶褐色土	—	
	03	土壤	楕円形	120×55×30	暗黄色粘土	—	
第9地点	SK-01	焼土壙	長方形	245×145×60	炭化物層	側壁	
	02	焼土壙	長方形	163×90×21	炭化物層	側壁	
	03	焼土壙	長方形	175×134×28	炭まじり	側壁、床	
SX-01	土壤	楕円形	(157)×70×52	炭まじり			
第10地点	SK-01	焼土壙	長方形	252×195×53	炭化物層	—	
	02	焼土壙	長方形	250×135×40	炭化物層	側壁	
SX-01	土壤	楕円形	105×78×37	暗茶・暗灰色土	—		
	02	土壤	楕円形	134×120×21	暗茶・暗灰色土	—	
	03	土壤	(長方形)	141×(70)×26	灰色砂質土	—	陶器片
	04	土壤	楕円形	115×68×20	暗茶褐色土	—	瓦質土器片
	05	土壤	楕円形	110×68×14	炭まじり	—	
	06	土壤	不整形	(140)×113×20	暗褐色砂質土	—	焼土粒を少量含む
	07	土壤	不整形	400×178×38	炭まじり	—	炭はごく少量

Tab. 7 造構一覧(3)

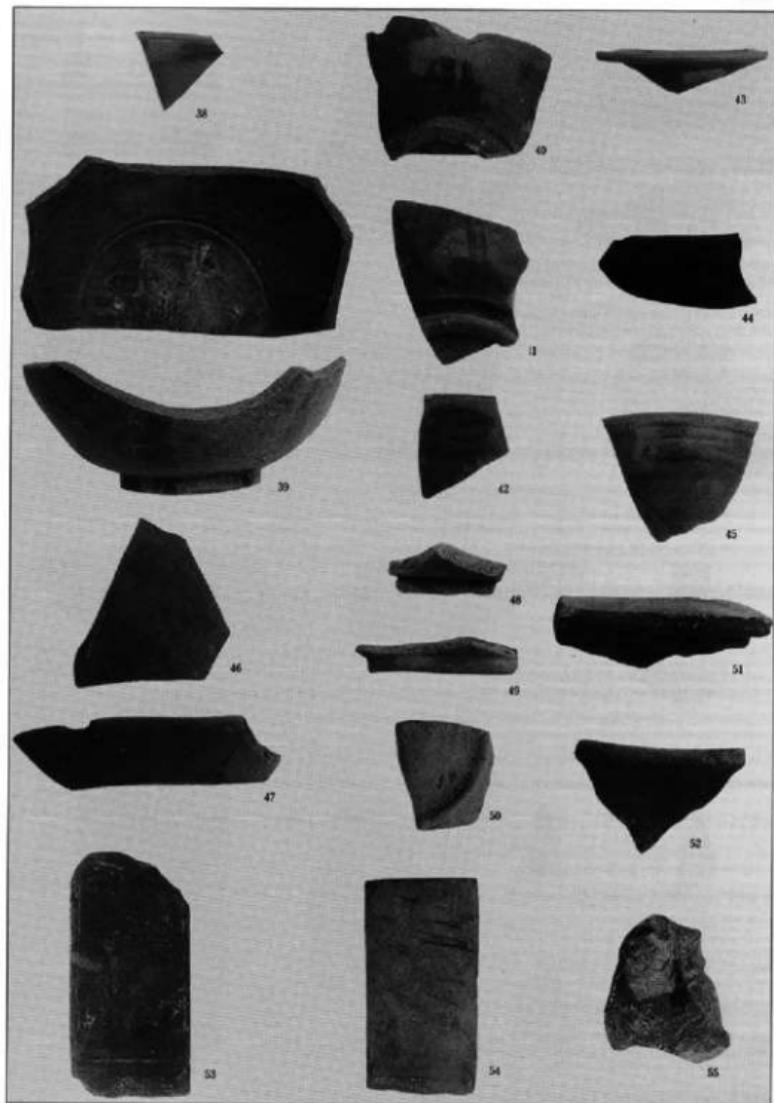
地 点	遺構番号	造構の種類	平面形	規模(長さ×幅×高)	埋 土	焼上の位置	備 考
第11地点	SK-01	焼土壙	長方形	168×100×25	炭化物層	側壁	
	02	焼上壙	長方形	158×113×20	炭化物層	側壁	
第12地点	SK-01	焼土壙	長方形	157×110×35	炭化物層	側壁	
	SX-01	土壙	長方形	178×130×50	茶褐色土	—	
	02	土壙	梢円形	95×72×35	黃褐色土	—	
	03	土壙	梢円形	200×90×20	黃褐色土	—	
第13地点	04	土壙	(梢円形)	(155)×(70)×26	灰黑色土	—	瓦器片
	SK-01	焼上壙	梢円形	168×120×67	灰まじり	—	
	02	焼土壙	長方形	210×143×30	炭化物層	—	
	SX-01	土壙	(梢円形)	136×75×50	炭化物層	側壁	遺土壙の底とは異なる
	02	土壙	長方形	237×148×20	灰まじり	—	内にPteあり
第15地点	03	土壙	梢円形	130×73×13	暗灰褐色土	—	
	04	土壙	(長方形)	150×(50)×21	—	—	
	SK-01	焼土壙	長方形	110×93×25	灰まじり	—	
	02	焼上壙	長方形	171×120×40	灰まじり	—	
第16地点	03	焼土壙	長方形	173×150×40	灰まじり	—	
	SX-01	土壙	長方形	185×140×17	暗茶褐色土	—	Pteあり
	02	土壙	長方形	305×195×18	暗茶褐色土	—	
	03	焼土壙	(長方形)	136×115×36	炭化物層	—	
第17地点	04	焼土壙	長方形	170×132×50	灰まじり	—	
	05	土壙	長方形	124×73×35	灰まじり	—	断面淡三角形
	06	焼上壙	梢円形	230×125×43	炭化物層	—	内に長方形の覆り込み
	07	焼土壙	長方形	160×80×32	灰まじり	—	
	08	焼土壙	長方形	156×105×45	炭化物層	側壁、床(一部)	
	09	焼上壙	梢円形	187×113×42	炭化物層	側壁、床(一部)	
	SX-01	土壙	不整形	128×(15)×30	灰まじり	—	
	02	土壙	梢円形	170×83×31	—	—	未切柵目压痕土薄片



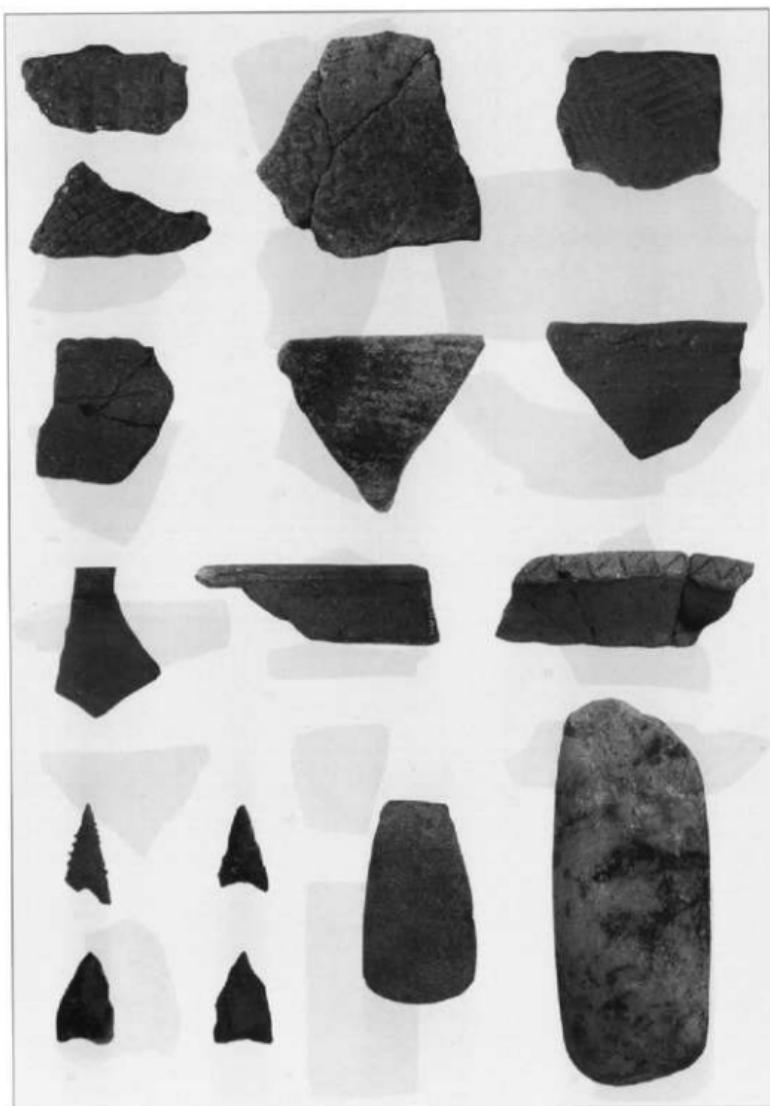
谷口遺跡出土遺物



谷口遺跡出土遺物



谷口遺跡 試掘調查出土遺物



縄文・弥生時代遺物

リ川水ヲ東南開ト云所マテノ間、凡長三百間、幅五尺許アリ、此溝ハ、昔紀伊國熊野ヨリ來リシ比丘尼財ヲ始功ヲ起メ始テ作りシト云、絶壁断岸ノ所ヲモ功智ヲ盡シ疎築シテ水ヲ引き、溝底ニハ石ヲ敷ミタレハ、圓密ニシテ永世頗堵ノ患ナシ、此村ノ内、神ノ原、上原田、下原田、寺地、中山ハ水乏ク、荒蕪ノ煩ヒアリシカ、此溝アルヲ以テ耕作ノ滋潤ヲ得、此村ニモ水利ヲ施セリ、尼カ功大ナリト謂ヘシ甘ニアリ

00『筑前國続風土記拾遺』西村・鷲山村の条鉤溝

釣溝

上原の南に在、椎原スルより川水をせきうけて村内の田地にそゝく、此溝昔紀州熊野より來りし比丘尼財を捨、功を起して始て作りしといふ、其長ハ數百間、絶壁断岸の所をも功智を盡し、溝を構へ水を引しかかる、溝引勢皆仰の想に依故に名とせらる也、出田多く開けて、村民今に至りて、其利潤をうく、尼か功大なりと謂つへし

(中略)

十一所権現

谷口に在、谷口並西村の内上原・原田・寺地の產神也、往古一尼あり、紀州熊野より來り、初生松原に棲、暫居り、後此地に移住し、出田を整開し、稼穡を勤しか、西村の内に釣権を構へ、水を引て大に種植ノ功を起せり、此尼宅の邊に祠を建て、己が本土の神を齋祭する。此社是也、村里に於て尼か不易の利を與しけるゆゑ、後人其靈

をも神に祝ひ、本社の相殿に祭り恩徳を報謝するとか

(8) 曲淵房助感状 (23×32) 楢紙 堅紙 掛幅表

主水事、雖爲無足、連々逃走之段、無比類候、然者平河名字之儀、

筋目之上、望之趣得其心候、扶持等之儀者、追而可賀与候、先

以此旨跡、奉公可爲下要之狀如^(花押)件、

永祿十二年一月九日

平河主水充殿 房助(花押)

○桐箱立表墨書「曲淵房助公御直筆 平川氏」

○益表墨書「祖先ノ遺風 改表表昭和十年三月達城書」

○早良区大字石笠字東七〇一、平河一道(光明寺住職)所有

天正貳拾年六月五日

「方主税九(花押)
平河孫左衛門
烏飼神三郎
平河新左衛門
烏飼原左衛門
上野新左衛門

以上

外野之儀ハ草かしき斗相語候、此外於向後□連乱之儀、被仰間數

候、仍爲後日之□□□□

一谷はたハ楠木かふ

一川はたハ古屋

一田ノ水口ハさしのまえ

一屋敷ノ下ハわれ石
一瓦はし石を境

一屋敷ノ上ハ楠ノ木ノ上は

○桐箱立表墨書「筑前町村書上帳」四早良郡の条

「下ノ烟村 従名中」

長門守殿

「馬男木土佐守」

平河長門守殿

種吉(花押)

「方主税九(花押)
平河孫左衛門
烏飼神三郎
平河新左衛門
烏飼原左衛門
上野新左衛門

以上

下畠名之内山境、兄弟口論之条、各々爲裁判、任先例之質 其境

歩分中之事

一かぶり石を境

一殿橋梅ノ木

一桶ノ木

一辻ハほり切り

一北ひらハ松あまかしの木

(9) 下畠名山堺定書 「筑前町村書上帳」四早良郡の条

釣溝

神ノ原ノ南五十間許ニアリ、釣堀共云、長数百間、溝ノ形勢岸壁ノ傍ニ掛ルカ如シ、故ニ名ケシナルヘシ、村ノ南十二町、矢瀬ノ上日

治田殿

山田殿

小笠一村旦那

諸旦那

爲現世安穩後世

天文七年八月八日 敬白

以上左欄中
所なり

天文七年八月八日 敬白

善處

井殿

「筑前國統風土記拾遺」にも載せてあるが、宇奈中殿が、宇奈

井殿となっている。この大日如来は今も池田の大日堂に鎮座しているが林内の銘文は見ることができない。

(6) 木造大日如来坐像林内墨書銘文

「筑前町村書上帳」甲良郡

の条

常樂坊　「海
惠海　榮海　秀慧
永賀　良曉　眞海
貞有　賢榮　眞賢
長曉　堯海　中納言

以上左欄中
所なり

○「筑前國統風土記拾遺」にも載せられている。現存するか否かは確認していない。

箱田殿

藤山内旦那

(7) 木像大日如来坐像林内木札墨書銘文

「筑前町村書上帳」早
良郡の条

大村兵庫助多々良興宗（花押）
氏女多々良平歲



八月九日

長遠（花押）

連祐（花押）

長益（花押）

（3）木造來師如來坐像々底墨書銘

謹

奉新造

藥師瑞光如來

一朴爲現世安穩後

世善處也、

丁時文明三^{辛卯}年六月十一日

願主旦那^{正五歳}

石^口山雲守家人

○藥師堂（早良区大字石蓋字下ノ烟、平河一氏管理）に鎮座。

○「筑前町村苦上帳」にも収められている。

- 卷目裏に花押あり
- 袖を切除
- 庄崎雅樂丸殿
要事略

（六）その他の資料

（1）「筑前國統風土記捨遺」鷺山村の条

經塔 谷山に在、宝形の所に梵字三つあり、基石に奉造立塔婆一基事、右

志趣者、爲阿闍梨安^口卅二^{同音}苦提證善^口妙經三部亦奉造立供

養^口如件明德五年^{庚午}正月廿七日孝子敬白と銘あり

（4）大内家々臣連署状 聖福寺文書

早良郡内當守鷺山三町分山之口札錢事、去文明十三年、於左鷺山御故橋

筑前國早良郡鷺山二町分地頭職、同郡小田郡地頭職并主船司名七町、旨永
庄内成貞名、同久富名、同國那珂郡内廊子村八町、同國深江

三町^井草場^{一郎}事、任本領貢、知行領掌不可有相違之狀如件、

候、仍彼札錢事、如前^口可被仰付候、恐懼謬言、

九月十八日

閉行（花押）

庄崎彦三郎候

弘相（花押）

○大宰督内志では、「嘉吉三年二月」となっている。

嘉吉三年五月三日

弘知（花押）

大宰少武^{（花押）}

弘詮（花押）

印法印永賀他二名連署宛行狀（26×37.4）堅紙 墓紙

〔證文之狀〕

東門寺」

天正八年 かのへ 一月廿六日

佐久間の名目 墓紙
永海（花押）

筑前國早良郡之内背振山東門寺領 橫山六十多町之内、圓覺坊領中
山村之内北田「下」^{ヨリ}貳反之地之事、与四郎代^レ拘來候處、「田中左衛
門尉与申結子細、於都職、東門寺」相決候處、与四郎申分者、去永
正七年十一月七日秀準^レ通 同享祿三年（寅十二月）八日長曉一

通 同天文九年十一月五日同「長曉一通被兩三通明白之上者、与四
郎申所」無紛者也、於然者、任地頭安堵狀之員、年貢^レ公事諸天役
以下堅固達其沙汰、可相拘也、仍爲後代證文之狀如件

天文廿年五月十日

永賀（花押）

秀兼（花押）

長曉（花押）

与四郎所

印長遠・連祐・長益連署狀（27.6×96.4）猪紙 雜紙（三紙）

〔西署〕

〔西署〕

〔西署〕

<div data-bbox="680 5214

筑前國早良郡 背振山圓覺坊 領中山之村大辻名園田壹段、森之」

下貳反、合參段井三町分半田半、屋敷共、官丸か子六郎太郎「裏渡所」実也、然者年貢少納所「万石」公事等、相懇仕、無地之好、可相拘者也、右參段之内、西川壹段年貢之事、當社まつり當候する歳、為御供米可指置候、如此相定候上八、六郎太郎子「孫」至、無相違可相托候、自然此方為子孫、違亂煩之儀候者、此證文・任之旨、御役及も致披露、無相違可相拘者也、仍為後代一筆如件

天文參年四五月十五日

長晚（花押）

(8) 成就坊秀兼安堵狀 (25×37.6)
楮紙 壓紙
筑前國早良郡背振山東門守成就坊領小笠木之村 山頭拾壹町貳反半、此內為分地四反、丈小中新左衛門、一反半平兵衛尉、何歲年貢、諸當以下差其沙汰、代々任筋目、無他妨、可相拘也、若對地頭於不儀者、可新者也、仍為後日 證文如件
天文十四年己上二月一日
小笠木 山頭源太郎所
秀兼（花押）

(7) 大式房秀方安堵狀 (25×42.6)
楮紙 壓紙
大式房秀方安堵狀

(9) 東門寺政所坊請取狀并与四郎注文 (25.4×37.9)
楮紙 壓紙
東門寺政所坊（花押）
請取中畢
「天文書」注文
以上

「仙道源太郎所へ
堺滿」

為祝儀壹石請收也

筑前國早良郡背振山領、小笠木之村之内仙道分之事、近年八四反之土貢納候、然處、當時東門寺政所坊依給候、大教坊賣地之分、本主仙道進退候間、七段之土貢納候上八、於後代重而少も違亂、煩之儀不可有候、子孫之至、無他妨相拘、有限土貢少納所以下、堅因懇仕可相拘者也、老師秀慶威定上八、我^主一通望之由候間、為後代一筆、如件

天文五年戊午十月十七日

堺滿（花押）

以上
米登石
与四郎（花押）

一所 売丈 (ひらき)

田島一丈 (ひらしま いっしやう)

長祿一年 (かのと) 二月廿七日 六郎三郎 (略押)

「彼坪付合所披見也」

長祿一年 (かのと) 二月廿七日 英準 (花押)

長祿一年 (かのと) 二月廿七日

(3) 大教坊真恩光券案 (25×32.2)
楮紙、堅紙、
背振山上官領

筑前國早良郡鷺山之内小笠木之村專道名之内名類分之事、專遣先
祖者、大教坊「永代賣渡所也」雖然、依當專道源左衛門所望候、彼
名頭分半「分之事、代六貫伍百文、預置所」矣也、若自然對大教坊、
不儀緩急「儀候する時者、彼本物返候て、此方より、知行可致也、
見門高家如何成德世」與行候共、相違有間數候、山道子「孫」
可相拘者也、仍狀如件

明應九年 (かねのと) 二月十七日 真恩有判

(4) 源五左衛門尉・某連署安堵料請取狀 (26.6×32)
楮紙、堅紙
源五左衛門尉

筑前國早良郡之内、背振山領中山之村之内上原田武段之事、爲

(5) 稲田和泉守長安・積善坊菊千代九速署宛行狀 (25.8×37.5)
楮紙、堅紙
一筆 石谷村新兵衛尉所へ 稲田和泉守

筑前國早良郡背振山領之内、中一賣殿免深渡之村之内、原田參反
田參段、赤一郎作貳段一丈、土之原之前畠地一丈、庭七丈、原渡
漸上之口七丈、寺之上壹段、以上九段、二丈、此内離之内二丈屋敷
除田數、八段武丈相當之年貢諸納所等、人足以下、堅固、馳走候て、
無他妨、「永代可相拘者也、如此雖定置候、年貢」諸濟物於無沙汰
者、町政者也、仍爲後日」一筆如件

享禄五年 (かねのと) 二月廿六日 石谷新兵衛所へ遣也
菊千代丸 長安 (花押)

(6) 円覚坊長曉讓狀 (31.8×51.7)
楮紙、堅紙
江名讓狀 六郎太郎所へ 圓覺坊長曉

(8) 鳥銅万休銀子請取狀 (24.4 × 12.0) 緒紙 積紙

且納

新

緒紙 積紙

合銀百六十五文由者

右、為正月・二月・三月分、所謂取申」如件、

永祿二年三月廿六日 鳥銅萬休 (花押)

庄屋宮内丞殿

(9) 鳥銅後久・馬田久次・結城寅実署申状案 (24.8 × 86.8) 緒紙 積紙
〔案文〕

「00 鳥銅後久・馬田久次・結城寅実署申状案 (24.8 × 86.8) 緒紙 積紙
〔案文〕

(9) 鳥銅万休賃錢請取狀 (24.4 × 12.5) 緒紙 積紙

且納鳥銅之村漁錢之事、

合銀七十八文由者

右、為春納、所謂取申如件、

永祿二年四月廿日 鳥銅萬休 (花押)

庄屋宮内丞殿

00 与三郎書狀 (22.5 × 88.5) 緒紙 積紙

(前欠)
(様)
可申候、其方さま□我等かため大事の御旨人之事にて」御座候、
此方之客來之儀も、「智人之儀候間、外分実候」にて候間、奉行申
候やう奉」領候、昨今被若ニます持せ 進候、万恐惶謹言、

卯月廿一日

鳥銅對馬守

後久

緒紙 積紙

(案文)
「執行出雲入道殿人々中 御百姓中」

結城刑部丞
寅実

三月七日

与三郎 (花押)

(英ウワ書) (切封要引) (博多)
鳥銅對馬入道殿多 与三郎

人々御中

人々御中

一

一筆者石之口村新兵衛所 守方 箱田和泉 守方

(5) 曲韻氏助名字書出
(24.8
×
32.4)
楮紙 穎紙

筑前國早良郡背瀬山領之内、中う」□賣殿免深渡之村之内、原田
參反」田參段、赤二郎作貳段一丈、上之原力之前畠地二丈、深七丈

鳥制名字之事、帝認文、」數年令無望、至向後子供。」一作、彌參公
緩有間數之由」申候之案、令存知所也、

天文十六年三月五日
氏助（花押）

走候て、「無地妨永代可相抱者也、如此雖」定置候、年貢諸濟物於拘

(令) 箱田和泉守
長安 (花押影)

（6）
石谷新兵衛所へ遣也
第千代丸
（6）
（6）東京移居外語社
〔譲狀〕道後五郎左衛門
〔譲狀〕道後五郎左衛門

進候

(4) 管長度状
24.0
32.5

卷之三

卷之三

守先の田地之事者、一新兵衛□万ニ永太（相傳）にわたらし候所

定かの地ニ」つき、いつかたより「迷乱」之儀候ハ、同時も我ハ

（彼在）所ふわん候、おかへの「こ□へ申付候、

萬葉集

天文十年二月廿

鳥飼刑部丞殿

弘治三年
三月九日

(曲都)
氏助 (花押)

(7) 曲照氏助安堵狀
(28.4
X
34.8)
楷紙 積紙

(7) 曲潤氏助安堵狀 (28.4 × 34.8)
常郡入部庄之内貳町「地之事、重久知行」不可有相違者也。恐々

かのさし所ふわん候、おかへの「こ□へ申付候、

當田泉□

天文十年二月廿

鳥飼刑部丞殿

曲解
氏助（花押）

99 付断簡 (25.8 × 6.0) 楷紙

一所二丈 神宮寺灯油免
とくらこう みやびじとうゆめん

付断簡

楷紙

ヨリ

鳥飼佐渡守宿所

アリ

。裏にも墨跡あれど読めず

(四) 明光寺文書

(1) 楠善坊英旦勘料請取状案 (24.0 × 28.0)

楷紙 積紙

東八道をかきり、西八河をかきり、北者大(應)をかきり候、然者、彼一屋敷土貢之事、申かけ候處、あまり信言^ノ申候間、無余候^シをき候条、かんれう^シ文請取申候、殊河瀬等屋敷之内たるへく候、「同七丈田」者土貢をさんし^シあるへく候、かくのことく申付候上者、子^ノ・^ノ孫^ノ・^ノも相拘あるへき事かん^シよう候、仍為後日一筆如件、

長禄四年かのとの三月廿七日

楠善坊 英隼 (花押)

一反之内、河なり二丈・徳田三丈之事、「めいけん候間、本主としきし^シねき候、」さ候間、かんれう文^シくわんうけとり候、「しき^シねき候」(至^シ迄^シ)^ノにいたるまで、かたくか^シゑ^シ候^シく候、^シんち^シか^シい^シの事、ひかしハ^シミ^シらをかきる、ミ^シみハ^シるのいたや^シか^シき^シ

(3) 徳田長安、楠善坊第千代丸連署安堵状写 (24.5 × 88.5) 楷紙 積紙

一(西)河(應)にしハ^シかわをかきる、きたハ^シる「わたせ」をかきる候、仍為後日如件

長禄二年かのとの三月廿三日

楠善坊 英亘 在判

。前欠、最初の一行は欠損しているが、同家所蔵の写真により判読した。

(2) 楠善坊英隼勘料安堵状 (28.7 × 27.8) 楷紙 積紙

一くほ

楠善坊

くほの屋敷之驛引進(候)カ

東八道をかきり、西八河をかきり、北者大(應)をかきり候處、あまり信言^ノ申候間、無余候^シをき候条、かんれう^シ文請取申候、殊河瀬

等屋敷之内たるへく候、「同七丈田」者土貢をさんし^シあるへく候、かくのことく申付候上者、子^ノ・^ノ孫^ノ・^ノも相拘あるへき事

卯月六日

安重（花押）

凶法金書状（26×34.6） 横紙 縦紙

連：可得御意候間、□状にて申入候、「畏入存候、各々中
難未申通候、以次令申候、仍上ことは□」弘瀬村牛方民部丞相
論地御座候て、當時一御策之由其聞候、如何候哉、理非之段、謹而
御「役人様へ何ケ度も御愁訴申候て、可然候」理非之儀者、定而
六十三丁御老中可被御「存知候、尤自此方、山上御役人様へ御伝言
申度候へ共、時儀不知案内に候間、万事事」御老中頼存候て、愁訴可
申候、民部丞江各々中被加御意候者、自此万越可申付候、「万御
心得頼存候、所仰候、恐々謹言、

十一月廿四日
田中左衛門尉殿
鳥飼新兵衛尉殿 御宿所
○破損甚しく原形をとどめざるにより法量は参考まで、
十六日者、預御懇札候、其時分致他行、御返事不申候、「誠所存
之外候、幾日無音候共、「於心中ニ非如花之儀候、爰元ヘ」相應之
儀共不可有無沙汰候、「然者去年善兵衛尉方、以口入を」出子申置
候、去年のハ請取申「^(カ)」たて子細承候間、八木七斗程御使へわたり
申候、將又前日見斗の焼塙送給候、數」體届申候、恭畏入候、何
様御礼可申入候、「秀敷者」（紙縦自ヨリ後次）
○端ニ切封アリ。

04 寄合中各々書状等（24×44.3） 横紙 縦紙

牛方民部丞与上ノ古波新三郎申むすふ論地之儀ニ付而、寄合中へ
預御状候、拜見仕候、「則可致御報候之處ニ、昨日まで山上へ御愁訴

申より、致無沙汰候、於山上御衆中者、多分」無余儀様ニ難仰候、
永賀法喻一圓ニ無」御分別候、清段之由被仰候間、民部丞幸ニ存
候、「以定日、早々被仰付候へ之由申候、定而可被仰付候哉、「乍
去、先御都代二代以御分別、□渡江付被」置候事、めいはくニ候之
處、于今上ノこは」新三郎として、御給主へ六力敷被申事、「各々

不及分別申候、万事為御心得候、恐惶」謹言
十一月二日
船越備後守人道殿御返報
おの（各々）判

凶某書状（25×42.8） 横紙 縦紙

腰締同□長入候、「返此□之儀候間、連：」可申承候
成、題目無御取ま、申後候、「口借教候、世上相静候ハ

、申入可得御意候、

先日者、預御懇札候、其時分致他行、御返事不申候、「誠所存
之外候、幾日無音候共、「於心中ニ非如花之儀候、爰元ヘ」相應之
儀共不可有無沙汰候、「然者去年善兵衛尉方、以口入を」出子申置
候、去年のハ請取申「^(カ)」たて子細承候間、八木七斗程御使へわたり
申候、將又前日見斗の焼塙送給候、數」體届申候、恭畏入候、何
様御礼可申入候、「秀敷者」（紙縦自ヨリ後次）
○端ニ切封アリ。

一熊
小松原貳段之内

壹段反神壹斗六升
壹段德貳斗四升

馬飼彦若との
參いる

英賢

一トヨラキ
一トヨラキ

三支德壹斗四升、貳支河成
松源寺免

(紙總目)

同所
壹段
七郎大明神修理免

東門寺圓覺坊分中山之内後田貳反之事、為百姓地作言候間、付
進之候、向後納所公事等堅」可被調候、仍為祝儀、銀四十文自「請
取申候、於後代被地不可有」其煩候、為後日之狀若斯、

一トヨラキ
一トヨラキ

分米貳石參斗六升八合付ノ物在之
なうての下

永錄貳年卯月十五日

一トヨラキ
一トヨラキ

三十六壹反
松源寺免

(紙總目)

三一三
壹段
七斗貳升

自享三年寅ノ十一月

一トヨラキ
一トヨラキ

壹段
七斗貳升

万被者可達候之条、」聞奉候、恐・謹言、

24.5×38.0
内覚坊英賢安堵状写

楮紙 硬紙

◎安重書状 (26×38)
楮紙 硬紙

想用書候、仍而慮外之御弓箭出「來候て、御乗遣察存候、尤早」進
人「可承候処、遙々申候間、乍存無沙汰」令申候、少も非心破候、
隨而今時久、其方角之立柄如何成行候哉、精示「預度候、自然代儀、
とも候者、於我等相」當之御用於無沙汰有數候、此謂可申」ため
に候、彼者進之候、殊先日者「廢山へ在陣申候、其時分可參營語候」
とも、陣所之晝候間、無油斷存候て、無沙汰申候、所存之外候、
万被者可達候之条、」聞奉候、恐・謹言、

24.5×38.0
内覚坊英賢安堵状写

楮紙 硬紙

被（足付）（修理）されん時も、官（しゆり）之時、あしつけ事、可（可）被仰付之由候、我等事、不（私）断たひのミに候案、為（為）いこのに、如此一通進候、可

被（其心得候、恐々謹言、

天文治五年二月廿七日

久次（花押）

（足付）
（石室）
（重久）

新兵衛殿

03鳥飼俊久契狀案（4.4×8.8） 横紙 積紙
御領分廣瀬村紺屋名事、依有子細、近年御（領主）被召放候處、護聖院
院議對御領主被添（尊意）、安堵之儀被仰付候、誠系候、就夫為御札
斗八舛代參反、右煮斗（八舛代事者、夫錢之外、券注錢小俵米無）
無沙汰可納申候、夫錢事者、清新五文分・當折（七文はん、年中四
度ま（ハリ）廿五名御百姓衆並）可納申候、此外護聖院五月夫錢堅固可
納申候、「右条（無沙汰又進亂之儀申候者、被下地）事、別作人二
被仰付候共、一口之儀申間敷候」、組屋名井（南名内大称）壹反、以
上六段（事、子にて候又四郎ニ申付候、大称の事者、壹段ニ）相當
之公事足井夫錢年中ニ當折九十文、可否申候、無沙汰有間敷候、
仍一筆如件

案文 大河内殿へ

天文十七年二月十六日

鳥飼新兵衛殿
（縦裏書）
（花）

新兵衛殿

02曲淵氏助名字書出（26.8×29.1） 横紙 積紙

源五郎

重久

（年號）
天文十五年二月吉日

（曲淵）
氏助（花押）

鳥飼千代松殿

01稻田秀安下女去文（25.5×26.1） 横紙 積紙
（縦裏書）
（新兵衛殿）

稻田神五郎

進上

貢使中下女乙くりか事、御城米五斗之方ニ永代進置候、一万一御
徳政行候共、被下女事、相違之儀有間敷候、為後日」壹筆如件

天文十五年四月十日

稻田神五郎
秀安（花押）

00積善坊真海安堵狀案（26.0×36.0） 横紙 積紙
（縦裏書）
（カ）

鳥飼新兵衛尉方へ遣置候 横善坊

(6) 相田長安・積善坊菊千代丸連署安堵狀写 (29×38.5) 横紙 縦紙

〔印〕

〔印〕免深〔印〕

〔印〕

〔印〕參殿、赤二郎作貳殿一丈、上之原之前〔印〕二丈、

座七丈、原渡頭上之口七丈、〔印〕上壹段、以上九段三丈、此内羅

〔印〕内二丈屋〔印〕

〔印〕敷除田數八段貳丈相當之年貢諸〔印〕納所人足以下、堅

箇二丈走候て、無他妨」永代可相拘者也、如此雖定置候、年貢」諸

濟物於無沙汰者可政者也、仍為後日」一筆如件、

亨保五年壬辰二月廿六日 畠田和泉守

横書坊
菊千代丸

石谷新兵衛所へ通也

(8) 三郎ゑもん出舉米借狀写 (27×38.8) 横紙 縦紙

〔印〕

申請 出舉米之事

合米一斗五升定

〔印〕

右件米ハ、當秋方之ま、理分相刷、無未進、并可申候、但

けんにハ、我等名田之内、いちい木を、千王殿御米、口人めされ候

間、書入申候所」實也、もし米ふさた仕候者、「彼米所押御作ある

へし、「其時若廟一口之儀、」申ましく候、依為已後狀」如件

天文九年かのへ 正月廿日 三郎ゑもん(花押影)

○端裏に墨跡あれども破損により不明。

(7) たての新左衛門出舉米借狀 (24×32.1) 横紙 縦紙

申請 出舉〔印〕

合米貳斗か定

右件米者、當秋御法之體、利」分相そ〔印〕申、無未進、可致返弁〔印〕

但〔印〕焉〔印〕にハ、我等か〔印〕へ之内、原ノ〔印〕はしつめと申候田四百文

被在所」壹段書入申候處實也、同時も彼米」無沙汰之時者、をきへ

御作あるへく候、「其時聊一囗之儀申ましく候、たとへ」天下一同

御破政與行候共、被米」相違あるへからず候、仍為後日證文」如件

享保五年五月十四日 新左衛門 (略押)

○端裏書あれども、破損により読めず。

(9) 曲洞氏助名字宛行狀 (25.7×37.5) 横紙 縦紙

名字之事、源左衛門尉 康秀、以一通願望之」間、得其心所如件、

天文十貳午十一月十九日 氏助 (花押)

馬飼千代松所へ

〔印〕

〔印〕

新兵衛〔印〕久次

〔印〕新〔印〕修理免

〔印〕(新)封墨引

幸對馬守

〔印〕

今度山口の御入目として、ひろせの官しうりめんの事、其方」相
抱るゝによつて、(社)米いの事、我等(使)かりめ

若無沙汰仕候者」この米之もとこにあひあたる候つるほどおさへ候て、御作あるべく候、其時廟一門之儀申ましく候、仍而為後

口證文如件

寛正六年酉五月廿九日

上田之西福庵普判

(3) 西福庵普出米借状案 (26×39) 緒紙 空紙
(端裏書)

御米七斗文
あんもん

上田之西福庵

申請 出舉之御米申

合七斗か定也

右件之御米者、來秋之時、六りの利分を相そへ申候て、無未進、返付可申候、但御しきんには、わざだ一反かき入申事しつ也、若無沙汰仕候者、この米之もとこにあひあたるほど、おさへ御作あるべく候、其時廟一門之儀申ましく候、「仍而為後

如件

寛正六年五月廿九日

上田之西福庵普

利有
はんあり

(4) 石齋せん道左衛門某出米借状 (27.5×34.0) 緒紙 空紙

〔端裏書〕
「五斗二升狀

いしかませんたう」

申請 出舉米事

合五斗外か定也

右件御米ハ、來秋年貢外にて、六りのり分合そへ申候て、未進けたいなくわきまへ申へし、(但(實を尋ねにわ)三反田二反三丈書入申所)實也、もしふさだ申候者、「此米之本子相あたり候する」ほど、めしあけられ申へし、其時一口儀申ましく候、「仍而為後

日狀如件、

(王寅)
文明十四年十一月廿九日

石齋せん道
さゑもん□ (略押)

(5) 横善坊澄海安堵状写 (26.5×44) 緒紙 空紙

背振山中法殿之免□中深□くほの名之内、七反余屋敷其外一類地之軍、依筋目、為先燒領、成分別、付置處實也、但萬難公事以下、無懈怠勤候て、「子・孫・迄而、相拘られべき」事肝要候、たとへ如何様方、「於彼地、違乱煩之儀申候共、此」任一通旨候て、無きをい拘可有候、「仍而為後」口證文如件

横善坊
澄海 (花押影)

吉享四年辛卯四月十八日
(窓)
くほ名之田地主 □ 新兵衛丞俊久

の職務は形骸化していたと考えられる。ところで結城文書には結城氏が史料中に出でてこない文書がいくつも含まれている。このうち「くほの名」に関する史料が三通含まれているが、五号文書については

「石谷新兵衛」に宛てられており、写が島銅文書と明光寺文書に含まれている。おそらく「くほの名」に関する史料は、六郎三郎から島銅氏へと伝えられ、その後結城氏へと移ったものと思われる。史料は土地の移動に付随しており、「くほの名」とそれに関する史料が

何時頃、どういう理由で結城氏に移ったか不明であるが、結城氏は

池田氏と血縁関係にあり、島銅氏等の小領主層とも婚姻関係を結んでいたことも考えられる。ともあれ婚姻関係あるいは売買等により、最終的には「くほの名」は結城氏の所有するところとなつたと考えられる。

その他皆見の範囲内でこの地方に關係のある古文書、江戸時代の地誌類、仏像の銘文等も収録した。

以上ここに収録した史料以外に背振山の肥前国領、かつての下宮である修学院に中世～近世にかけての文書二・通が伝えられている。

背振山東門寺に関する基本史料であり、この地方に關係のある内容の史料も多く含まれているが、既に「佐賀県史料集成」第五卷に収められているため、ここではあえて割合した。

(三) 島銅文書

(1) 横善坊英年屋敷安堵状 (24.8 × 34.5) 横紙 縦紙

(2) くほノ六郎三郎所へ 屋敷あんと狀

(3)

くほの屋敷之廢之事

東ハ道をかかり、西ハ河をかかり、北者「 」へを界、南ハ原鹿瀬

をかかり候、「然者、彼用敷土賣之事、申かけ候處、」あまり伝言

申候間、無余價さしきを候余、かんれう登賣文請取申候、殊河瀬等一

屋敷之内たるへく候、同七丈田ひの口者、「上賣をきんしめるへく

候、かくにのことく」申付候上者、子・孫：までも、相拘ある」へき

事かんよう候、仍為後口一筆」如件

長銀四年
英年（花押）

(2) 西福庵普出奉米借状案 (27.3 × 37.9) 横紙 縦紙

御米七斗文 上田之西福庵

申請 出手之御米事

合七斗か定也

右件之御米者、來秋之時、六りの利分を相そ申候て、「無未進、返井可申候、但御しらけんにハ、(早稿)一反をかき入申」事しつ也、

敷」「くほの名」「太郎丸名」等の土地関係、出米水借状等の貸借、売買關係、それに惣にに関する書類等がからなっている。明光寺文書は長禄四年から永禄二年まで一一通からなり、内容上は鳥飼文書とはほぼ同内容である。

鳥飼氏については既に触れたことがあるが鳥飼氏が史料上最初に確認できるのは、文明三年（一四七一）である。この年、「石^{石門}出雲守家久」が今も石笠村の下ノ畑に鎮座する木造の坐像を造立している。鳥飼氏は「久」の字を通字としており、家久は鳥飼氏の一族であろう。文明十四年（一四八二）には「石庵せん道さえゑもん」の出米五斗二升の借状が残されている。その後享禄四年（一五二一）には、鳥飼俊久が「くほ名之田地主」としてあらわれ、一五四〇年（一五五〇年代）に鳥飼氏に関する史料は集中している。鳥飼氏が所有していた田畠・屋敷はくほの名、くほの屋敷の外に広瀬村の船尾名、広瀬官の修理免川、入部庄内二町、中山村の「後田」二反等である。これらは石笠村の外にあり、広瀬、中山、臨山、入部等の村内にある。鳥飼氏は「石笠」を頭につけて称されている場合があり、本拠地は石笠村にあつたと考へられるが、その活動範囲は横山郷全体に及んでおり、史料上から現れるかぎりでは、活動の基本はくほの名とくほの屋敷にあつたようである。又鳥飼氏は曲淵氏から名字を冠てがわれたり、入部庄内二町の土地を安堵されており、曲淵氏の被官化している。曲淵氏については不明な点が多いが、曲淵村に本拠地を置き、その活動範囲は早良郡全体から一部怡士郡にまで及んだ国人領主であったようである。地理的にみて、石笠村

は曲淵村のすぐ下流に臨接しており、曲淵氏が外に出ていく場合の交通上の要所にある。曲淵氏にとって、その勢力を拡大する上で、鳥飼氏を被官化することは、まづ第一に必要なことであつたであろう。又別稿でも述べたように各村毎に農民の共同体—惣村が形成されおり、更に横山郷全体に及ぶ共同体—惣郷が形成されていた。鳥飼氏は小領主として、これら惣村の指導的立場にあり、又惣郷は「六十三丁御老中」の構成員であった。

結城文書については青柳種信編「筑前国続風土記拾遺」に「小笠木村の農民結城氏に古文書數通を藏す」とか「右二通共に小笠木村農家にこれあるよし」として、六七と一号の文書を引用している。從つて種信がこの地方を調査した文政年間頃までは、この文書は小笠木村の結城家にあり、その後何らかの事情で黒川家に入れられたものであろう。建武二年（一二三二五）から天正八年（一五八〇）まで一一通からなり、内容的には「くほの名」「寺道名」「大辻名」等の所領に関するものが多い。結城（祐木）は小笠木村に本拠地をとき、寺道名を所有し、「小笠木之村百姓衆」の代表的立場にあつた人物であり、又鳥飼、馬田氏等共に三名の連署で臨山郷の清料の負担について訴えている。鳥飼氏と同じような階層の人物であろう。ところで結城氏は「山頭」「仙道」「寺道」等と称されている。鳥飼氏も「せん道」と称されており、謂ゆる「寺当」のことであろう。このことは背振山東門寺が結城、鳥飼氏の小領主層を「寺當」職として寺院機構の末端に組み込んでいたことを意味する。ただ一五〇〇年代には「寺當」の字もいろんな字が使われており、「寺當」として

「脇山地方関係中世史料」

吉良國光

(一) 凡例

一、鳥飼文書は鳥飼恩氏（福岡市早良区大字石釜八六九—）所蔵の文書であり、明光寺文書は明光寺（福岡市早良区大字石釜一九三、仕職鳥飼成海氏）所蔵文書である。結城文書は福岡市博物館所蔵黒田家文書に含まれているものである。

一、鳥飼文書は、最近編年的に配列して、一巻に仮表装されている。明光寺文書も一巻に成卷されているが、文書の配列には規則性は認められない。ここでは利用上の都合を考えて、編年的に配列し、不明分は最後に納めた。結城文書は編年的に一巻に成卷されている。

一、法量は縦×横で単位はセンチである。

一、料紙の破損による欠字、あるいは解説困難な箇所は、その字数分を〔 〕で示した。

一、抹消は〔 〕で示した。

一、原本における行変りは〔 〕で示した。

一、仮名は推定できるものについては、〔 〕で漢字を充てた。

(二) 解題

本史料集は、福岡市西部を流れる室見川の上流域、内野の以南に関する史料集である。この地方は背振山系から流れ出る小笠木川、椎原川、室見川が内野で合流しており、地形的にみてもまとまつた地域を形成している。平地は内野、脇山に若干あるが、小河川が背振山系から流れ出しており、これらの小河川がつくる谷にそって追田的に多く耕地が作られている。この地方は歴史的に見てもひとつつのまとまりのある地域を形成しており、十一世紀以降背振山東門寺の所領として中世を通して存在し、「脇山院」および「横山」と號称されている。

鳥飼文書と明光寺文書はかつて九州史学七七号で翻刻しているが、今回改めて、誤植等を訂正して改めて再録することにした。両文書の所有者は共に鳥飼姓であり、内容上から見ても、本来は同一のものであったと考えられる。

鳥飼文書は長禄四年（一四六〇）から永禄二年（一五五九）まで二七通であり、その外近世文書が若干ある。内容的には「くほの屋

の時期は長禄四年から享禄四年の間であり、課名内の屋敷はこの期間に一反から七反余と増加しているが、この増加分は大半が椎原川沿いの西側の段丘上に新しく築かれた集落にあつたと考えられる。

その後更に原田の丘陵部の開発が進められる中で、経営の拠点としての集落を丘陵の中心地にある現在の上原田の地域に移したものであろう。その際に谷部に存在していた下原田の住人との間でいろいろな問題が生じたであろうことは想像に難くない。しかし少量の自然湧水に頼り、おそらくは旱魃の被害にさらされる等不安定な經營を行っていた下原田に対し、釣溝の灌漑による安定的な経営を行う上原田が優位を占め、下原田を含み込む形で原田の集落は成立したものと考えられる。「深渡之村」が現在全くその痕跡をとどめないのは、以上のように歴史上一時期存在した集落であることによるものであろう。更に釣溝による開発が進められるにつれて、上(神)ノ原、寺地等の集落も原田から分かれて新しく成立したと考えられる。これらのことと裏づけるものとして谷口にある十二所権現社の祭祀がある。十二所権現社は前にも触れたように釣溝を堀いた熊野の比丘尼が居宅の辺に熊野神と勧請したとの伝承を持っている。
筑前国統風土記拾遺には、「谷口並西村の内上原・原田・寺地の産神也」(その他の史料1号)とある。十二所権現社の横からは小川が流れており、この小川によって作られた小さな谷が、谷口から門戸口におりていている。椎原川からの取水による灌漑がなされる以前は、この谷に迫田が造成され、十二所権現社は谷口の水分神社であったと考えられる。その後谷口から分かれて、新しく原田、上(神)ノ

原、寺地等の集落ができたが、彼らは新しく鎮守社を勧請することなく、以前のとおり谷口の十二所権現社を産土神として信仰したものであろう。

最後に現在行われている発掘の成果との関連について触れておこう。発掘調査の結果、現在の門戸口の北方、大門との間の田の中から、平安時代末期頃築かれたと思われる幅二〇メートルに及ぶ水路が出てきた。この水路はまもなく埋り、その後規模を縮小しながら築りなおされているとのことである。詳しいことは発掘の報告書をまつしかないが、平安時代末期、この地方でこれだけの水路を築けた人物は、前編でも述べたが先祖相伝の私領としてこの地方を領有した大藏氏以外には考えられない(修学院文書一六号、「佐賀県史料集成五巻所収」)。しかし大藏氏は平安時代末期の内乱で滅亡しており、その後はこの地方に大藏氏にかわる大きな在地勢力の存在を確うことはできない。おそらくは大藏氏の滅亡により、この水路の維持・修築が不可能となり、その後は在地住民の手でより規模を縮小しながら新しくつくり直されていったものと考えられる。

四

本稿は現地調査の結果を基本にして、近世の地誌類と僅かの中世史料により考えたものである。従って耕地の開発、集落の形成は時間的に非常長いスパンの中でしか考えることができなかつた。史料的な欠落はいかんともしようがない。現在進められつつある発掘の成果に期待すること大なるものがある。

中心的役割を果したことはまちがいないであろう。釣溝の築造については、前稿でも触れたように熊野の比丘尼であるとする伝承が江戸時代の地誌類に載せられている。この熊野の比丘尼が居宅の辺に勧請したのが、椎原川東側(右岸)、現在の谷口に鎮座する十二所権現社であるとされている(その他の史料四号)。この十二所権現社は後で触れるように、谷口、原田、上(神)ノ原、守地の四ヶ村の鎮守であり、釣溝と関係の深い神社であるが、釣溝が深名を含めて谷口の住人によって築かれたことが、これらの伝承にも反映しているようと思われる。

さて深名と篠屋敷はこの後六郎三郎から鳥飼氏の手にわたっている。文明一四年(一四八二)原田にある三反田は石造せん道(鳥飼氏)が所有しており(鳥飼文書4号)、享禄四年(一五二二)には、「深口^(西)ほの名之内、七反余屋敷其外類地」が筋目により、鳥飼俊久に安堵されている(鳥飼文書5号)。更に翌享禄五年には「深渡之下之畑(その他の史料9号)、下(明光寺文明11号)等の村があり、下村を除いたこれらの村は今も村名として残つておらず、前稿でも指摘した如く惣村を形成していたと考えられる。深渡については、史料上確認されるのは前稿の一通のみであり、又現在も全く痕跡をとどめていない。ところで上原田の村民の間には、この集落の先祖は椎原川の対岸(東側)から移ってきたが、最初は現在の集落の北東、椎原川沿いの西側の段丘上に住んでおり、その後現在の場所に移つてきただといふ伝承が残されている(上原田在住北崎評氏より御教示願いた)。深名の耕地の分布から見て、十分に考えられる内容の伝承である。深名等谷口の住人は、釣溝の延長、拡大による原田の丘陵

側)に「カミタ」という地名がある。ここに西福寺があり、「寺之上」とは、この西福寺の上(南側)にあった耕地のことであろう。參反田、赤二郎作については前に述べたとおりである。原田は參反田、赤二郎作、上之原の前畠までにかかり、窪、原渡瀬上之口、寺之上は椎原川の東側(右岸)にある。「深渡之村」とは、椎原川の東西に分布するこれらの耕地を含んだ地域の村の呼称であり、原田は大永五年から享禄四年の間に村名を中山から深渡へと変えている。当時の史料から「村」のついたものをひろってみると、深渡以外に、中山(結城文書4、6、10)、小笠木(結城文書3、7、8、11)、その他史料6号)、石笠(結城文書5号)、広瀬(鳥飼文書13、23号)、下之畑(その他の史料9号)、下(明光寺文明11号)等の村があり、下村を除いたこれらの村は今も村名として残つておらず、前稿でも指摘した如く惣村を形成していたと考えられる。深渡については、史料上確認されるのは前稿の一通のみであり、又現在も全く痕跡をとどめていない。ところで上原田の村民の間には、この集落の先祖は椎原川の対岸(東側)から移ってきたが、最初は現在の集落の北東、椎原川沿いの西側の段丘上に住んでおり、その後現在の場所に移つてきただといふ伝承が残されている(上原田在住北崎評氏より御教示願いた)。深名の耕地の分布から見て、十分に考えられる内容の伝承である。深名等谷口の住人は、釣溝の延長、拡大による原田の丘陵部の開発が更に進められる過程で、経営の拠点としての屋敷を新たに椎原川を渡った川沿いの西側の段丘上に作ったと考えられ、この集落を中心とした領域が「深渡之村」と呼ばれたものであろう。そ

の本村を形成する大きな集落である。中山から小さな谷が三本、南の吉振山に向ってのびている。一本は急傾斜の谷であるため、谷の入口付近に耕地が若干開かれている程度である。一本は山田川に沿って山田の集落に向ってのびている谷であり、追田が帶状に開かれている。建武二年（一二三五）法橋隆舜は「中山引地屋敷并坊舎下小家等」を充却しているが、その四至の北界は「藤四郎屋敷中林外植」である。その充券には法橋隆舜、弟子二人とともに「藤四郎大夫」が略押を施している（結城文書1号）。前稿でも指摘したとおり、この引地屋敷や藤四郎屋敷は谷の最奥部、現在の上山田の辺に比定することができる。当時の辺まで開発が進められており、山田の集落は既に存在していたことが窺える。おそらく中山の住人によって開発が進められ、中山から分かれて山田の集落は成立したものと考えられる。しかし以前として「村」の領域としては「中山」に含まれており、又村落の祭祀についても、江戸時代では中山にある三所権現社を共同で産土神として祭っている（筑前国統風土記附録）及び「筑前國統風土記附錄」等）。おそらくこの祭祀の形態は山田の集落が成立した時点まで遡ると考えてまちがいないであろう。

そして残りの一本が原田に向ってのびている谷である。おそらくこの谷に存在する追田の開発も中山の住人によつて開発が進められ、その結果下原田の集落が成立したものと考えられる。前述したように、「上原田貳段」が「中山之村」に含まれているのは、こうした開発と集落成立の歴史に規定されたものであろう。ただこれら谷部の開発と集落の成立が何頃であるかについては、全く史料的後證を欠いており、現在進められつつある考古学上の成果を待つしかないが、かなり古い時代であることはまちがいはあるまい。

さて、これら谷部における開発が一段落した後で、釣溝の築造とそれによる丘陵部の開発が進められたであろうことは前に述べた。又、長禄四年当時、釣溝が築かれており、それによる丘陵部の開発が進行しつゝあつたことは、深名の耕地の分布を通して、前稿で述べたとおりである。ただ長禄四年当時、上原田の集落はまだできていなかつたであろう。深名の耕地は、椎原川東側（右岸）に四段一丈、西側（左岸）の原田に一町二丈あり、經營の中心は西側（左岸）の原田に移りつゝあつたにもかかわらず、その拠点となる屋敷はここに構えていたはずである。「筑前国統風土記附錄」によると、釣溝の灌漑する田地の面積は二五町余となつてゐる。それに対して深名の原田の集落が成立していれば、当然經營の拠点として屋敷をここに構えていたはずである。

長禄四年当時、原田地域の釣溝による丘陵地の開発は進行途上にあり、この後釣溝の拡大、延長等を行なながら耕地の開発が更に推進められたものと思われる。それではこれら釣溝の築造及び拡大、延長を行ながら、原田の丘陵地の開発を進めていったのは誰であろうか。少なくとも深名の原田にある耕地が、釣溝により灌漑され耕地の主要部分を占めていることから、深名に關係のある人物が

「をのはる」等は「小ノ原」の用水により灌漑されていたと考えられ、その後「堰」の用水の拡大、延長がなされる中で、各用水の灌漑する範囲に若干の変更が生じたことは予想される問題である。以上のことから、窪名の耕地のうち、椎原川の（右岸）に分布する耕地は「小ノ原」の用水を中心にして開発された耕地であり、更に云えば、「小ノ原」の灌漑用水路を築いたのは、窪名に關係した人物であり、これが窪名發生の起源であるということができよう。

三

以上椎原川東側（右岸）について見てきたが、次に西側（左岸）についてみてみよう。窪名の耕地は椎原川東側（右岸）の四段一丈に対し、西側（左岸）には一町二丈の耕地があり、長禄四年当時、經營の中心は次第に西側（左岸）に移りつづったことがわかる。西側に広がるこれらの耕地は、釣溝の築造に開発されたものであることは既に前稿で指摘したとおりである。これによりそれまで「原」と呼ばれていたこの地方は「原川」へと呼称が変化したものと考えられる。ただ長禄四年当時は、經營の拠点となる屋敷は椎原川東側（右岸）にあり、隣屋敷の住人である六郎三郎は屋敷の南側にある原渡瀬を通って、椎原川を渡り、原田まで出作していたであろう。窪名の坪付が「同くほノ内原田之事」とわざわざ記しているのは、椎原川の東側（右岸）と西側（左岸）にある原田では成立の事情が異なり、ひいては灌漑用水を中心とする經營のまとまりが分かれていたことが坪付にも反映したものであろう。

ところで大永五年（一五二五）の史料によると、「背振山領中山之村之内上原田武段之事」とあり（結城文書4号）とあり、原田は中山に含まれている。この中山は下原田か谷を下った出口の辺りであり、「福岡県地理全誌」には二戸の戸数が記されており、西村内

ところで原田の集落は上原田と下原田に分かれている。「筑前国風土記拾遺」でも上、下に分かれしており、「福岡県地理全誌」では上原田一戸、下原田九戸と戸数が記されている。現在両村の立地条件等を見るに、明らかにその性格を異にしている。前稿でも記したが、「上（神）ノ原」の集落の上（南）に少量の自然湧水があり、この湧水によって作られた小さな谷が、上（神）ノ原の集落の下から下原田の集落の中を通って中山の方におりている。図1からも窪えのように、この谷のはじまりの部分の田地の区画は、現在でも田地の形で帶状に並んだ区画をしている所があり、釣溝の用水によって灌漑されている他の区画と様子を異にしている。下原田の集落はこの谷の西側に家があり、谷の開発、追田の成立と関係が深いことを窺わせる。これに対して上原田の集落は、下原田から一段高くなつた東側の、谷と椎原川に挟まれた丘陵地にあり、集落の中を釣溝が流れおり、集落の北の溝で釣溝の水は下原田の谷へと落とされている。上原田の集落は釣溝の東西にへばりつくようにならうに家が密集しており、明らかに釣溝が造られた後でこの集落は成立したものであることを窺わせる。谷部の開発によりまず下原田の集落ができ、その後溝の築造により丘陵部の開発が進められる過程で上原田の集落ができるものであろう。

の地方の灌漑水系とそれによる耕地の開発は、「筑前国統風土記附録」が編纂された一七六〇—一七七〇年代には、ほぼ現在と同じ状態にまで達していたことがわかる。そして前稿でも指摘したことであるが、この中で最も大規模で、また築造に困難な技術を必要とするのが、釣溝と堰であることから、それ以外の灌漑用施設も長禄四年当時までは既に作られていたと考えられる。ただ後述する渾名の例からみても、耕地の開発はかなり遅れており、長禄四年以後、これらの水利の拡大・延長により耕地の開発が進められたと考えられる。それでは「七丈田ひの口」の「ひの口」はどの水路にあたるのだろうか。窪屋敷の記載及び椎原川東側（右岸）に分布する窪名の耕地の分布から考えれば、小ノ原（クルマ）井手にあたると考えられる。そうだとすれば、七丈田と窪屋敷は図1のような範囲にあつたと考えられる。「くほの屋敷之境之事」の中で、「同七丈田ひの口」（傍点筆者）があり、この極の口と七丈田は窪屋敷に含めて考えられる場合もあつたようである。窪屋敷の四至は、西側は河となり、椎原川に接しており、東側の道は窪名の東導と同じく脇山から椎原に通じる道であろう。南側の「原渡瀬」とは、椎原川を渡って原に農作業等に行く場合の渡瀬があり、これをそう呼んだものと考えられる。原田は「西ノ原」「原ノまへ」或いは「原ミソ」とあり、本来は「原」（はる）と呼ばれていたようである。この窪屋敷内には一反の田地があり、得田は三丈で、残り二丈は河成となっている。西は椎原川に接し、河瀬も屋敷内に含まれている。北には「かはら川」もあり、二反のうち一反は河成となつていて、椎原川に

接するこの部分は、椎原川の氾濫にさらされる不安定耕地も多かつた。

ところで、この窪屋敷内には「ますほり」があり、天文一七年（一五四八）にはその支配権をめぐって、鳥飼俊久と六郎丸平左衛門尉が争っている（鳥飼文書14号）。又天文一九年（一五五〇）には鳥飼俊久は「かりわけますほり」を直後五郎左衛門尉に譲与している（明光寺文書6号）。この「ますほり」或いは「かりわけますほり」とは何のことであろうか。小学校館の「日本国語大辞典」によると「ます（耕・升・枠・斗）」の説明の三番目に「水を引く樋の接続部分などに設けてある大きな箱」とある。「ますほり」とは水路の聚目などに作られたます型の樋のことと考えられ、灌漑用水路は「ますほり」から「ますほり」へと水を落していったと考えられる。又「かりわけますほり」は水路の分岐点に設けられた「ますほり」のことであり、この「かりわけますほり」で用水を分水していくと考えられる。こうした灌漑用水路上の重要な施設であったために相論の対象となり、又これだけで独立して譲与の対象となつたのである。窪屋敷内に設けられた「ますほり」は、その位置からして「小ノ原」の用水に接された「ますほり」は、その位置からして「小ノ原」の用水に接されたものであり、「かりわけますほり」は窪名の耕地の分布から「小ノ原」或いは「釣溝」の用水のいずれかに設けられた灌漑用施設であつたと考えられる。「大樂」の用水により灌漑される地域が「大樂」と呼ばれおり、おそらく当初は「小ノ原」の用水により灌漑される地域が「をのはる」と呼ばれたのである。ともあれ、淀名の耕地のうち、椎原川東側（右岸）に分布する「かきのうち」

川の東側（右岸）と西側（左岸）の南北界を別々に記したからである。ただ向方も南北としたのでは区分できなくなるため、後で述べるようすに空名の本来の発生地である東側（右岸）については南北とし、新しく開発した西側（左岸）については南側を上（この地方では南側が背振山に向って高くなっている）、北側をむかへと表現したものであろう。南の「兎の溝の築地」とある覚とは、前稿でも指摘した如く「掛樋」のことであり、現在の樋と呼ばれている灌漑用水路のことである。この樋は、現在でも取水口から少し下った所に掛樋をしなければ水を通すことができなかつたであろう場所がある。南堀となるような築地が築かれて溝が通させていたことからも、この水路が、かなり大きなものであることがわかる。むかへと西堀の「原溝」とは、これも前稿で述べた如く、釣溝のことである。この釣溝は、現在上原田の集落の北はづれで、下原田の谷に向つて木を落しており、これがむかへ堺の「水は^はづし」にあると考えられる。釣溝は空名の西側を流れて、むかへ（上原田地区の北界）で木を谷に落していったことがわかる。上の「まるくまのひら」は現在地は不明であるが、現在の「上（神）ノ原」のいすれかにあつたと想定される。東堀の道は現在でも、又戸時代の地図にも脇山から椎原へと通じる道が記されており、この道は椎原川の東側（右岸）を通っていたと考えられることから、この道にあたると考えられる。そして北堀の「筋田ノ大がき」は、「大楽」と呼ばれる井手によって灌漑される地域が、「大樂」と呼ばれており、「大がき」が「大らく」と訛ったものかもしれない。

表(1)江戸時代の備前用水路
 (『筑前国統風土記附録』より)

福山	ノタノマエ	町	2町	2段	8歳
	松ノ木	町	2町	6段	5歳 8歩
	マウカセ			7段	1歳 24歩
	舞川			1段	6歳 8歩
	川原田	町	1町	1段	6歳 14歩
	永田	町	1町	2段	5歳 23歩
	ジンピヤウエ			4段	6歳 24歩
	宮ノ原			4段	8歳
	御瀬	町	2町	2段	3歳 8歩
	大衆	町	4町	5段	3歳 25歩
西	小ノ原	町	18町	6段	7歳 1歩
	ノナカ	町	4町	8段	3歳 25歩
	猪			38町	9歳 8歩
	ツリミソ	町	25町	3段	3歳 24歩
	カウハル			4段	2歳 14歩
	タミラセ	町	1町	1段	3歳 14歩
	ホキノシタ	町	4町	6段	9歳 11歩
	古賀ノ前	町	2町	8段	8歳 21歩
	龍川			6町	3段 4歳 16歩

が、当該地域の部分を表したもののが表(1)である。また図(2)は東地域調査を行つて、現在椎原川から取水している灌漑用水路とその灌漑地域を地図に記入したものである。これを見ると、椎原川の東側（右岸）については下流から上流へと、又西側については上流から下流へといつた順で「筑前国統風土記附録」の記載はなされていることがわかる。そして現在の「クルマ井手」は、「筑前国統風土記附録」にみえる「小ノ原」にあると考えられる。又この表と図から、こ

さて前稿で比定できなかつた「七丈田」については「屋敷ノ上」七丈田」とあり、「屋敷ノ上」つまり座敷の南側にあつたことがわかる。又「七丈田ひの口」は七貢が免除されている。この「ひの口」とは灌漑用水路の帷原川からの取水口のことと考えられる。ところで前稿でも使用したが「筑前国統風土記附録」河水記の条は、筑前国内の江戸時代の灌漑施設が書き上げられている貴重なものである。

筑前国早良郡脇山地方における村落の形成過程について——戦国時代を中心にして——

吉良 国光

及び名毎に支配させる方法へと支配方式を変えていった。
こうした基本的見解は今も變りはないが、前稿で詳しく述べ
とができない原田という集落の形成過程について、より詳しく
見ていくことにしたい。

一

筑前国早良郡の南部、脇山地方における中世文書としては、從来修学院文書（佐賀県史料集成「五巻所収」）が知られていた。その後ここに紹介する鳥飼文書、明光寺文書及び黒田家文書に含まれる結城文書の存在を知り、しかもこれらの文書が小領主層に属する階層の家文書であり、在地の構造を小字史料が含まれていることから、拙い論稿を発表したことがある（「背振山の所領支配と村落——筑前国早良郡脇山を中心として——」『九州史学特集号所収』）。その要旨は次の如くである。

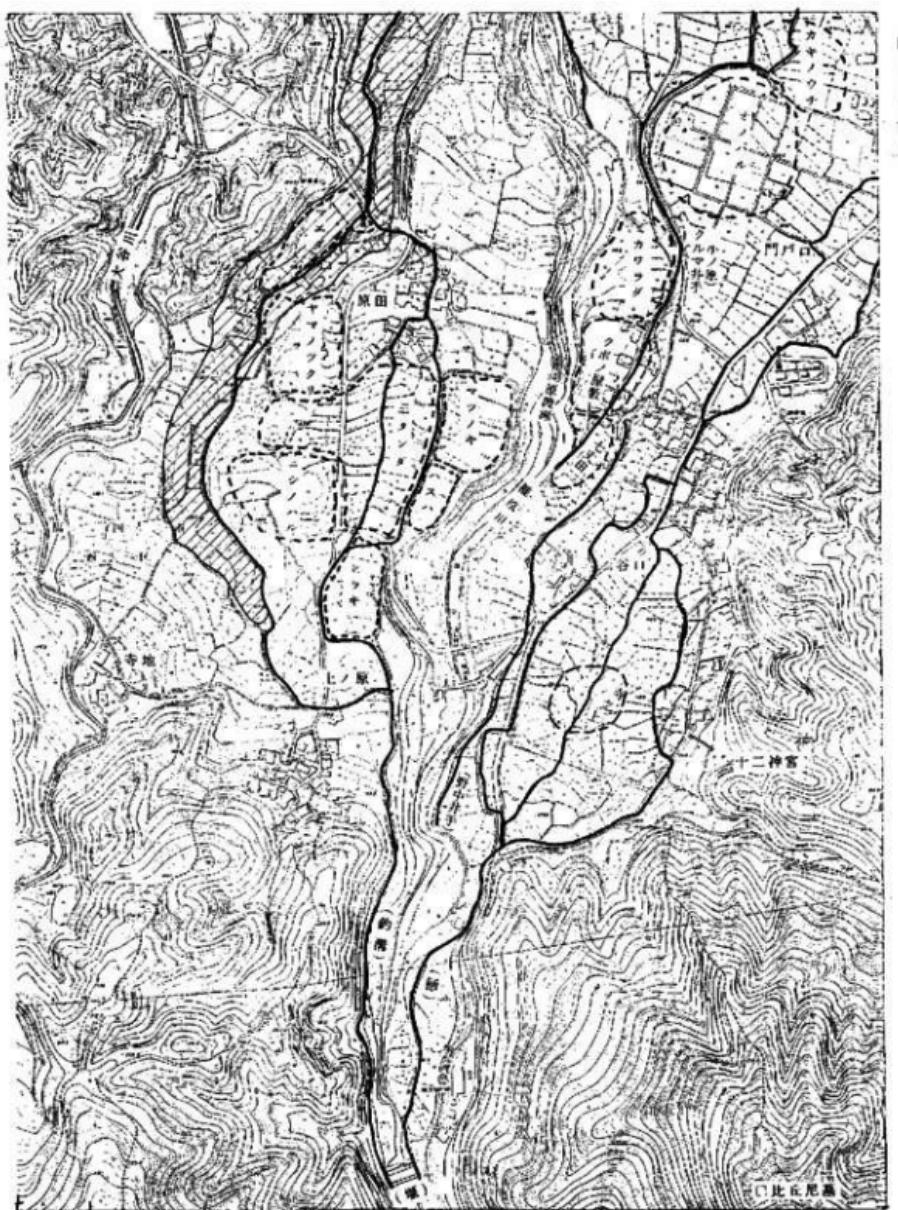
この地方の耕地の開発は、谷における追田的開発から塘、井手等の灌漑施設による開発へと進められた。長禄四年（一四六〇）の津名と溝渠敷の界・田数注文の分析と現地比定により、釣溝、橋等のこの地方で最も大規模な灌漑施設が、長禄四年当時既に築かれていた。こうした開発により、戦国時代には小領主層を中心にして、各村毎の惣村と横山郷全体に及ぶ惣郷が形成されており、これらの共同体を基盤として、小領主層は剩余生産物の在地確保、自らの經營の安定化と拡大を図った。こうした在地構造に対応して、背振山東門寺は「政所」を通して行っていた直接支配から、各坊をして村

二

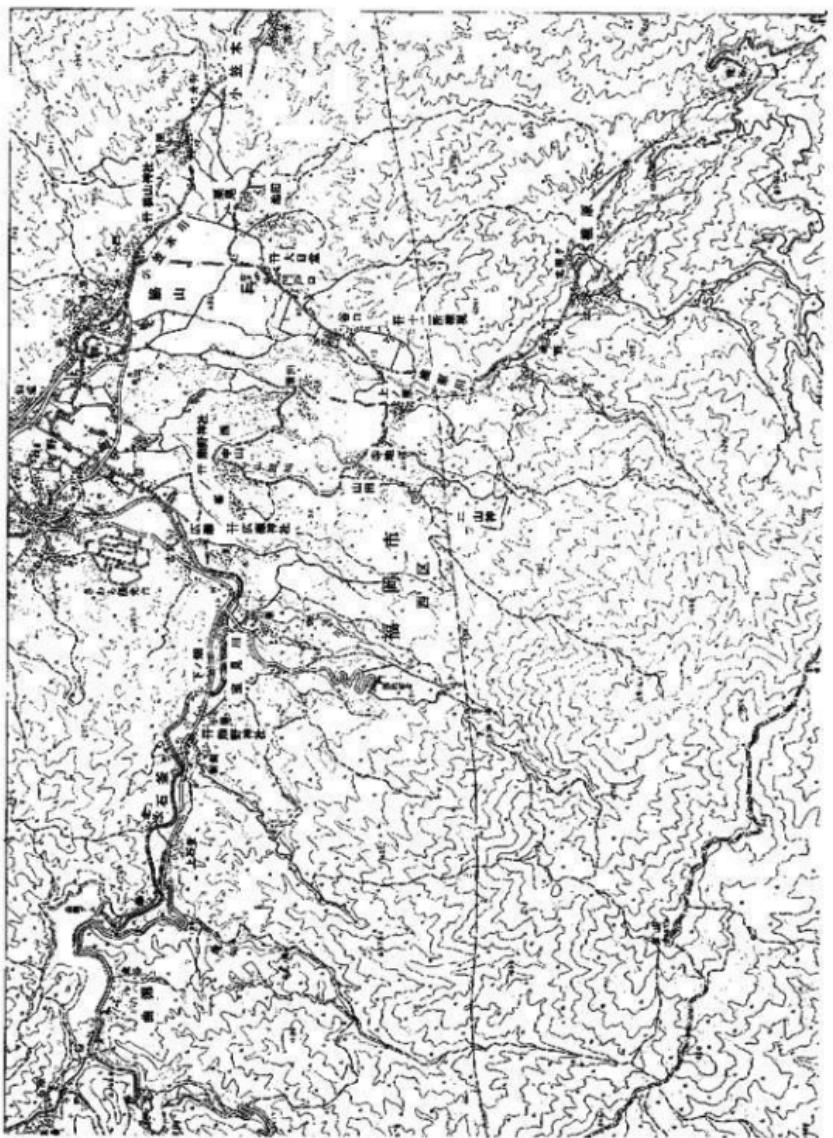
さても一度長禄四年の津名の堺・田数注文（結城文書2号、本稿で使用した史料は全て本報告書に収めており、史料名と番号は全てそれによっている）と窪屋敷の四至に関する史料（鳥飼文書1号、明光寺文書1、2号）から見ていくことにしたい。前稿で現地調査を行い、窪名坪付に見える地名を現在地に比定した。その後の調査をふまえて、もう一度名と屋敷の現地比定を試みたのが、別紙地図（1）である。この地図について前稿の補足説明を行いたい。津名の坪付のうち、三段田、まつ木田、下はすへ、西ノ原、山つくり、下てま（ひらき）等が、椎原川左岸の丘陵地にあり、釣溝による灌漑によりはじめて田地化が可能な地形上に位置していること、従つて釣溝がこの長禄四年当時既に築かれていたことについては前稿で指摘した。名の堺についてはあまり詳しく触れなかつたので若干説明したい。津名の堺は北—跡供田の大さき、東—道、南—兎の溝の築地、上—まるくまのひら、むかへ—原溝の水はつし、西—原溝の溝ふち、となつてゐる。この名の堺の記入の仕方は、謂ゆる四至（東西南北）以外に、「上」と「むかへ」が記入されているのが特徴である。それはこの名が椎原川を挟んで東西に広がっていたからであり、



地 図 (2)



地図 (1)



背後山領跡山院の圖

目 次

- 一、筑前国早良郡脇山地方における村落の形成について百二十八頁
二、中世史料集

(一) 凡例	百二十一頁
(二) 解題	百二十二頁
(三) 鳥飼文書	百十九頁
(四) 明光寺文書	百十一頁
(五) 結城文書	百八頁
(六) その他の史料	百四頁

筑前国早良郡脇山地方における

村落の形成について

—戦国時代を中心として—

(附)中世史料集

わき やま
脇 山 II

－福岡城跡整備事業に伴う発掘調査報告－

(鷹山A遺跡4次調査概報、谷口遺跡本報告)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第269集

1990年（平成3年）3月15日発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷アド印刷株式会社

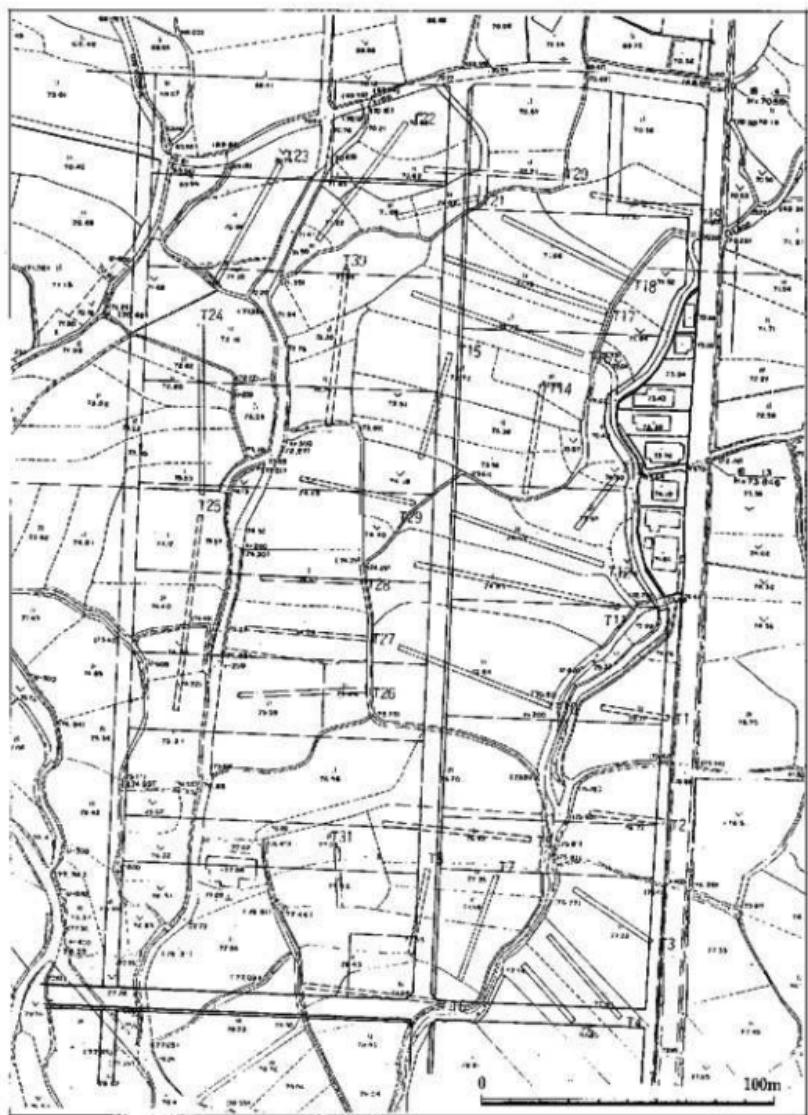


Fig. 4 試掘調査トレンチ配置図 (縮尺1/5,000) ※数字はトレンチNoを表す。

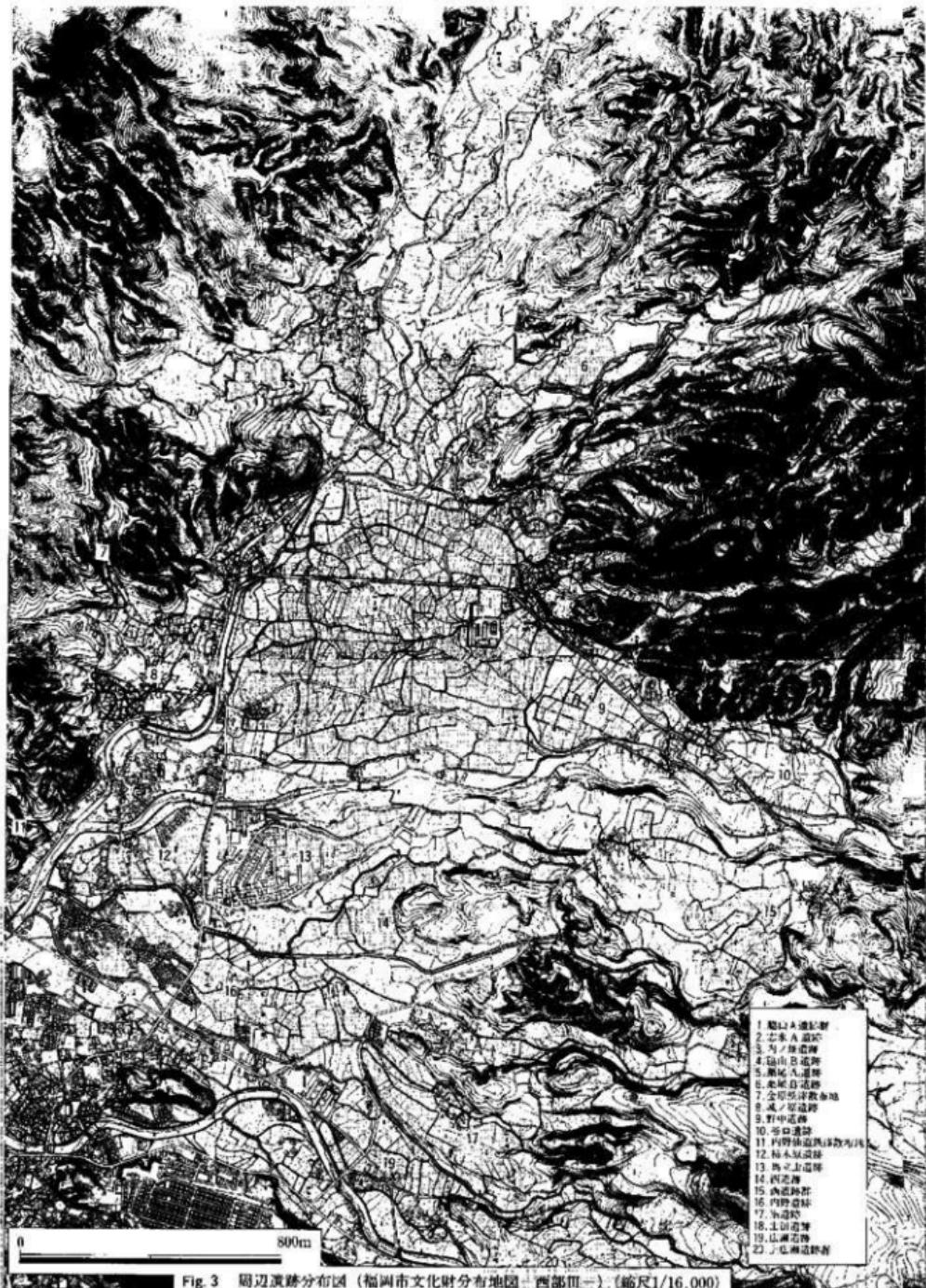


Fig. 3 周辺演跡分布図（福岡市文化財分布地図－西部III-）（縮尺1/16,000）

八月九日

長遠（花押）

連祐（花押）

長益（花押）

庄崎雅樂丸殿

○繼目裏に花押あり

○袖を切除

(六) その他の資料

(1) 「筑前國風土記拾遺」脇山村の条

經塔 谷山に在、宝形の所に梵字三つあり、基石に奉造立塔塼一基事、右

志趣者、爲阿彌陀三尊二四菩薩提壽寶等妙經二部亦奉造立供

養」如件明徳五年正月廿七日孝子教白と覺あり

于時文明三穗卯霜月十二日

願子旦那五歲

石出雲守家久

○米篠堂（早良区大字石笠字下ノ烟、平河一氏管理）に鎮座。

○「筑前町村書上帳」にも收められている。

(4) 大内家々臣連署状

聖福寺文書

早良郡内當寺領鷹山一町分山之口札錢事、去文明十三年、於左鷹山
筑前國早良郡鷹山三町分地頭職、同郡小川郡地頭職并主船司名七
町・富永庄内成古名・同久富名・同國郡河郡内廊子村八町・同國深
江三町入道跡事、任本領貢、知行領掌不可有相違之狀如件、

嘉吉三年五月二日

大幸少武

九月十八日

房行（花押）

庄崎彦郎殿

○大宰管内志では「嘉吉三年二月」となっている。

(3) 木造薬師如來坐像々底墨書銘

奉新造

藥師瑠璃光如來

一軀爲現世安穩後

世善盛也、

于時文明三穗卯霜月十二日

○米篠堂（早良区大字石笠字下ノ烟、平河一氏管理）に鎮座。

○「筑前町村書上帳」にも收められている。